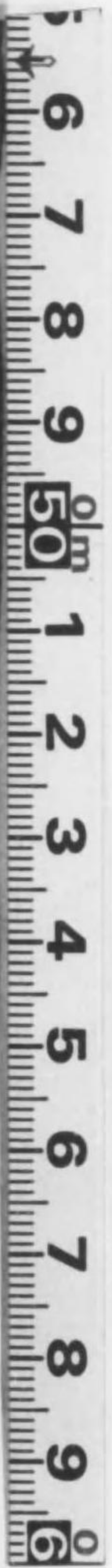


續國譯漢文大成

文學部 八十二

309
65

疾
入



始



續國譯漢文大成

吉田律郎氏

贈本

文學部第八十二册(第二十一帙の二)

高青邱詩集三の二



高青邱集 卷十一

長短句體

青邱子歌

青邱子の歌

江上有青邱、予徙家其南、因自號青邱子、閒居無事、終日苦吟、間作青邱子歌、言其意、以解詩淫之嘲。

【訓讀】江上に青邱あり、予、家を其南に徙し、因つて、自ら青邱子と號す。閒居無事、終日苦吟、このころ、青邱子の歌を作り、其意を言ひ、以て詩淫の嘲を解く。

青邱子

青邱子

臞而清

臞にして清

本是五雲閣下之

本と是れ五雲閣下の仙卿

仙卿

長短句體 青邱子歌

【字解】一、臞・而・清、瘦せては居るが風骨極めて清い。二、五・雲・閣、五色の彩雲の棚引く樓閣、無論、天上に在る。三、仙・卿、仙人仲間。葛洪の枕中書に「懸覆は太極の仙卿たり」とある。四、降・謫、罪を得

高青邱集卷十一

高青邱集卷十一

何年降謫在世間。何の年か降謫して世間に在る、
 向人^{ひと}不道姓與名。人に向つて道はず姓と名とを。
 躡^{あぐら}屣^{くつ}厭^{いと}遠游^{あんいう}。屣を躡んで遠游を厭ひ、
 荷^か鋤^{くわ}懶^ま躬^こ耕^{かう}。鋤を荷うて躬耕に懶し。
 有^あ劍^{けん}任^{にん}鏞^{ほう}造^{ぞう}。劍あるも鏞造に任せ、
 有^あ書^{しよ}任^{にん}縱^{じゆう}橫^{かう}。書あるも縱横に任かす。
 不肯^{あへ}折^ま腰^{こし}爲^を五斗米^{ごとうまい}。肯て腰を折つて五斗米の爲にせず、
 不肯^{あへ}掉^た舌^{した}下^{した}七十城^{じゅうしじやう}。肯て舌を掉つて七十城を下さず。
 但^た好^{この}覓^{もと}詩^し句^く。但だ好んで詩句を覓め、
 自^{みづか}吟^{げん}自^{みづか}酬^{ちゆう}賡^{かう}。自ら吟じて自ら酬賡。
 田^{でん}間^{かん}曳^ひ杖^{つゑ}復^{また}帶^{おび}索^{さく}。田間、杖を曳いて復た索を帯び、
 傍^{はた}人^{じん}不^あ識^し笑^{わら}且^{かつ}輕^{かろ}ん^す。傍人識らず、笑ひ且つ輕んず。
 謂^い是^こ魯^ろ迂^う儒^{じゆ}。謂ふ是れ魯の迂儒、

たるに因り、人界に謫せられて下る。
 【五】躡屣。屣は莫ぐつ。虞翻が屣を躡んで、趙の孝王に見えたといふことが、史記の本傳に見えて居る。【六】荷鋤。すきを肩にする。【七】鏞造。さびて造る、李綱の劍の詩に鐵花鏞造者辭痕とある。【八】任縱橫。散らかつた儘にしてある。【九】折腰。爲五斗米。晉書の陶潛傳に「彭澤の令となる。郡、督郵を遣して至らしむ。縣吏白す、應に東帶して之を見るべし」と。潛曰く、吾、五斗米の爲に腰を折り、拳拳として郷里の小人に事ふる能はざるかと。印を解いて縣を去る」とある。五斗米は、些少の俸祿。【一〇】掉舌下七十城。史記淮陰侯傳に「蒯通、信に謂つて曰く、蒯生は一士、戟に伏して三寸の舌を掉ひ、齊の七十餘城を下す」とある。【一一】

楚狂生

楚の狂生

青邱子聞之不介意。青邱子、これを聞けども意に介せず、
 吟聲^{げんせい}出^い吻^{くん}不^あ絶^た呻^{いん}。吟聲、吻を出でて、呻呻の鳴を絶たず、
 呻^{いん}鳴^{めい}。呻鳴。
 朝^{あした}吟^{げん}忘^{わす}其^{その}飢^{うま}。朝吟、その飢を忘れ、
 暮^{ゆふ}吟^{げん}散^{さん}不^あ平^{へい}。暮吟、不平を散す。
 當^{あた}其^{その}苦^く吟^{げん}時^{とき}。その苦吟の時に當つて、
 兀^{ごつ}兀^{ごつ}如^{ごと}被^か醒^{せい}。兀兀として醒を被るが如し。
 頭^{あたま}髮^{はつ}不^あ暇^{いとま}櫛^{くし}。頭髮、櫛るに暇あらず、
 家^か事^じ不^あ及^{およ}營^{えい}。家事、營むに及ばず、
 兒^こ啼^な不^あ知^し憐^{あはれ}。兒啼けども、憐むを知らず、
 客^{かく}至^{きた}不^あ果^{はた}迎^{むか}。客至れども、迎ふるを果さず、
 不^あ憂^{うれ}回^{かへ}也^{なり}空^{そら}。回也の空しきを憂へず、

謂。自分で之に和する。【三】帶索。繩を帶とする。列子に「榮啓期、鹿裘にして索を帯び、琴を鼓して歌ふ」とある。【四】不識。識別せぬ。【五】魯迂儒。叔孫通一輩を云ふ。【六】楚狂生。風令の歌を作つた接輿は楚狂と稱せられて居た。【七】不介意。心にかげぬ、何とも思はぬ。【八】呻呻。唇から漏れ出る。【九】兀兀。性體なき貌。【一〇】被醒。醒は醉。【一一】回也空。回は顔回、字は子淵、論語に「賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其憂に勝へず、回や其樂を改めず、賢なるかな回や」とあり、又論語に「回や其れ庶いか、屢ば空し」とあるから、その輩も、往往にして、空しかつたのである。【一二】騎氏盈。騎頓の富貴、

不慕^(三〇)猗^(三一)氏^(三二)盈^(三三)

猗氏の盈つるを慕はず、

不慙^(三四)被^(三五)寬^(三六)褐^(三七)

寬褐を被るを慙ぢず、

不羨^(三八)垂^(三九)華^(四〇)纓^(四一)

華纓を垂るるを羨まず、

不問^(四二)龍^(四三)虎^(四四)苦^(四五)戰^(四六)鬪^(四七)

問はず、龍虎の苦に戰鬪するを、

不^(四八)管^(四九)烏^(五〇)兔^(五一)忙^(五二)奔^(五三)傾^(五四)

管せず、烏兔の忙はしく奔傾するに、

向^(五五)水^(五六)際^(五七)獨^(五八)坐^(五九)

水際に向つて獨坐し、

林^(六〇)中^(六一)獨^(六二)行^(六三)

林中に獨行し、

斲^(六四)元^(六五)氣^(六六)

元氣を斲り、

搜^(六七)元^(六八)精^(六九)

元精を搜る、

造^(七〇)化^(七一)萬^(七二)物^(七三)難^(七四)隱^(七五)情^(七六)

造化萬物、情を隠し難く、

冥^(七七)茫^(七八)八^(七九)極^(八〇)游^(八一)心^(八二)兵^(八三)

冥茫たる八極、心兵を游ばしめ、

坐^(八四)令^(八五)無^(八六)象^(八七)作^(八八)有^(八九)聲^(九〇)

坐到無象をして有聲と作らしむ。

微^(九一)如^(九二)破^(九三)懸^(九四)蝨^(九五)

微は懸蝨を破るが如く、

水經注に「猗氏は、魯の勇士なり。朱公の富を聞き、往いて術を問ふ。朱公曰く、子、速に富まむことを欲すれば、當に五符を寄ふべしと。ここに於て、十年の間、その息、計るべからず、以て富を猗氏に興す」とある。【三〇】寬褐、おのが身には大き過ぎる弊衣、だぶだぶの破衣。【三一】華纓、纓は冠の紐、官職あるもの用ふる立派なる冠の紐。【三二】龍虎苦戰鬪、英雄豪傑の値くまで戰爭すること、侯主の割鴻溝賦に龍争虎鬪令萬象交奔とあり、韓愈の詩に「龍疲虎困割三川原」とある。【三三】烏兔忙奔傾、烏兔は日月、日月が忙はしく奔り傾く。【三四】斲元氣、宇宙の元氣を削り取る。【三五】搜元精、天地の至精を搜り求める。【三六】造化萬物、宇宙間の森羅萬象。【三七】隱情、

壯^(九六)若^(九七)屠^(九八)長^(九九)鯨^(一〇〇)

壯は長鯨を屠るが若く、

清^(一〇一)同^(一〇二)吸^(一〇三)沈^(一〇四)瀦^(一〇五)

清は沈瀦を吸ふに同じく、

險^(一〇六)比^(一〇七)排^(一〇八)崢^(一〇九)嶸^(一一〇)

險は崢嶸を排するに比す。

靄^(一一一)靄^(一一二)晴^(一一三)雲^(一一四)披^(一一五)

靄靄として晴雲披き、

軋^(一一六)軋^(一一七)凍^(一一八)草^(一一九)萌^(一二〇)

軋軋として凍草萌す。

高^(一二一)攀^(一二二)天^(一二三)根^(一二四)探^(一二五)月^(一二六)窟^(一二七)

高く天根を攀ちて月窟を探り、

犀^(一二八)照^(一二九)牛^(一三〇)渚^(一三一)萬^(一三二)怪^(一三三)呈^(一三四)

犀は牛渚を照らして萬怪呈す。

妙^(一三五)意^(一三六)俄^(一三七)同^(一三八)鬼^(一三九)神^(一四〇)會^(一四一)

妙意、俄に鬼神と同じく會し、

佳^(一四二)景^(一四三)每^(一四四)與^(一四五)江^(一四六)山^(一四七)爭^(一四八)

佳景、毎に江山と争ふ。

星^(一四九)虹^(一五〇)助^(一五一)光^(一五二)氣^(一五三)

星虹、光氣を助け、

煙^(一五四)露^(一五五)滋^(一五六)華^(一五七)英^(一五八)

煙露、華英を滋す。

聽^(一五九)音^(一六〇)諧^(一六一)韶^(一六二)樂^(一六三)

音を聽けば韶樂に諧ひ、

咀^(一六四)味^(一六五)得^(一六六)大^(一六七)羹^(一六八)

味を咀んで大羹を得たり。

情は實情。【三二】八極、宇宙を云ふ、八は大數。【三三】心兵、わが心を兵となして攻め立てる。韓愈の詩に冥茫八極とある。【三四】無象、形態なきもの。【三五】破懸蝨、蝨は、だに、列子に「紀昌射を飛衛に學ぶ。飛衛曰く、視ることを學んで後に可なりと。昌、蓬を以て、蝨を屬の南面に懸け、之を望む、こと三年の後、車輪の如し、乃ち燕角の弧、朝蓬の絲を以て之を射り、蝨の胸を貫いて、懸、絶えず」とある。【三六】屠長鯨、楊炯の碑文に觀三封豕一而斬三長鯨とある。【三七】吸沈瀦、正韻に「沈瀦は海氣、一に曰く、露氣」とあり、東方朔の七諫に含沈瀦以長生とある。普通に仙人の飲む酒といつて居る。【三八】排崢嶸、峨峨たる山を排列する。【三九】靄靄、もやも

世間無物爲我娛。世間、物の我が娛を爲すなく、

自出金石相轟鏗。自ら金石を出でて相轟鏗。

江邊茅屋風雨晴。江邊の茅屋、風雨晴れ、

閉門睡足詩初成。門を閉ち、睡足つて、詩、初めて成る。

叩壺自高歌。壺を叩いて自ら高歌し、

不顧俗耳驚。俗耳の驚くを顧みず。

欲呼君山老父攜。君山の老父を呼んで、諸仙弄するところ

諸仙所弄之長笛。ろの長笛を攜へしめ、

和我此歌吹月明。わが此歌に和して、月明に吹かしめむ

但愁歎忽波浪起。但だ愁ふ、歎忽波浪起り、と欲す。

鳥獸駭叫山搖崩。鳥獸駭叫、山搖崩、

天帝聞之怒。天帝、これを聞いて怒り、

下遣白鶴迎。下、白鶴を遣して迎へしめ、

やしたる貌。【三九】 軋軋、氣を得て勢だつ貌。【四〇】 高攀天樞探月窟

天の根脚に攀ち登つて、月宮の洞窟を探險する、邵雍の詩に乾遇巽時

爲三月窟、地逢雷處見天樞とある。

【四一】 犀照牛渚 晉書に「温嶠、牛渚に至る、水深くして測るべからず、世

云ふ、その下に怪物多し」と。嶠、遂に犀角を燃やして之を照らす、須臾

にして、水族火を覆ひ、奇形怪状なるを見る。その夜、夢に人謂つて曰く、

君と幽明道別、何の意か相照らすや」とある。【四二】 滋華英 滋は潤す、

華英ともに花。【四三】 韶樂 韶は舜の樂、善を盡し又美を盡したものと稱せられて居る。【四四】 嘔味 嘔は

味ふ。【四五】 大羹 結構な吸ひ物。【四六】 出金石 韓詩外傳に「原憲、

瓊瑤の室、商頌を歌ふ、聲、天地に論

不容在世作狡獪。世に在つて狡獪を作すを容さず、

復結飛珮還瑤京。復た飛珮を結んで瑤京に還るを。

【四九】 君山老父 前に卷五、松江亭の詩中にも引いたが、博異志に「賈客呂鄉筠、善吹笛、月夜、君山の側泊し、酒を命じて笛を吹く、忽ち老父あり、舟を牽して來り、袖より笛三管を出す、その一は大き合拱の如く、次は常の如く、その一は細えて小、細管の如し。鄉筠、老父に請うて一吹せしむ。老父曰く、大なるものは上天の樂に合し、次は仙樂に合し、小なるものは、老身、朋儕と樂むところのもの、庶幾難つて之を聴く、未だ曲を終るべきや否やを知らず」と。言畢り、笛を抽いて三聲を吹く。湖上風動き、波濤汎濤、魚龍跳噴、五聲六聲、君山の上、鳥獸叫噪、月色昏暗、舟人大に恐る。老父遂に止め、數杯を引滿し、舟を棹して去り、隱隱として波間に没す」とある。【五〇】 歎忽 不意に。【五一】 狡獪 いたづら、惡戯。【五二】 飛珮 飛び舞く玉佩。【五三】 瑤京 天上の白玉京をいふ。

【題義】 この詩は、作者が詩人としての本領を詠出したので、序の意味は、下の如くである——婁江の岸に青邱といふ小山があつて、予は家を其南麓に徙し、山の名に因んで青邱子と號した。閒居無事、唯だ終日苦吟して居るばかり、この頃、この歌を作つて、おのが本志を述べ、世人から詩淫といはれた其嘲を解かうとした——といふのである。この詩は、至正十八年戊戌、吳越に遊ぶ少し前の作に係り、青邱は、年、方に二十三であつた。

【詩意】 おのれ青邱子、瘦せては居るが、風骨いとも清く、それも其管、もとは天上なる五雲閣下に羣れつどうて居た仙人仲間の隨一人であつて、何時頃か知らぬが、一寸した罪を得て、この塵世に降

讀され、人に向つて本當の姓名を名乗つたことはない。青邱子は、藪ぐつを穿いて遠遊することも、厭だといふし、鋤を肩に荷うて躬ら耕して食ふのも、面倒臭いといつて居る。劍はあれども、鑊び放題、書物はあつても、散らかした儘で、少しも片付けない。それから、腰を屈めて長官に拜謁し、月に米五斗を頂戴する様な小役人となることを肯んせず、一たび舌を掉へば、齊の七十餘城を下すといふ古しへの辯士の真似を爲さうとは思はぬ。ただ、平生好んで詩句を案じ、自ら吟じて自ら之に和し、一人で得意がつて居る。田間に杖を曳いては、繩を帶とし、如何にも、ひどい風で散歩をして居る處から、傍人は、その何人たるかを識別せず、風體の餘り賤しきを笑ひ、且つ之を輕蔑し、これは、世事に融通の利かぬ魯の迂儒か、滄浪の歌を唱へた楚の狂生の類であらうといつて居る。青邱子は、かかる噂を聞いても、一向心にかけて、相變らず、詩を吟じ、その聲、唇より出でて、絶えずうといつて呻つて居る。かくて、朝に吟じては其飢を忘れ、暮に吟じては不平を散じ、終年詩を吟じてさへ居れば、それで満足して居る。が、その苦吟の時に當つては、まるで正體なく、さながら、酒に酔つたと一般、頭髮も櫛を入れる暇なく、一家の事も全く始末をせず、子供が啼いても、可哀相とも思はず、客が來ても、請じ入れやうともせず、顔回の如く箆瓢屢は空しくなつても、決して心配せず、さうかといつて、猗頓の様な富貴を慕ひもせず、だぶだぶの古衣を著ても、恥とせず、大官輩が立派な冠纓を垂れて居るのを羨ましいとも思はず、世の騷亂に際し、龍の如く虎の如き英雄豪

傑が飽くまで戦争を續けても、その結果は如何と問ふでもなく、日月が忙しげに奔り傾いても、少しも關係しない。時には水邊に往つて獨坐し、時には林中をたどつて獨行し、宇宙の元氣を削り取り、天地の至精を搜り求める。かうなると、森羅萬象、この人に向つて實情を隠すことなく、因つて、容易に造化の秘奥に參透するを得、身は此に在るも、心魂は冥茫たる宇宙の隅隅に遊んで居る。かうして得たところの感想が即ち詩となるので、形體なきものを化して、聲響を發するものと爲らしめる。その詩は、巨細遠近、兼ね到らざるなく、あらゆる姿趣を盡して居て、その微細なることは、吊してある蝨に射中てるが如く、その壯烈なることは、海上に浮ぶ大鯨を屠るが如く、その清澄なることは、仙家沈澁の漿を吸ふが如く、その奇險なることは、嵒嶮たる亂峰を目前に排列した如くであるし、もやもやして居る晴天の雲も、これが爲に披かれ、軋軋として生氣を含んで居た枯草も、これが爲に俄に萌えて出る。或は高く蒼天の根脚を攀ちて、月宮の窟を探險し、或は犀角を燃やして、牛渚を照らすと、さまざまの怪物が残りなく見らるるが如く、如何なる隱秘でも、詩人の筆を以てして盡さぬものはない。詩中に含める妙意は、鬼神とならば會得することが出来るが、なかなか、人間に分からず、詩中に畫き出されたる佳景は、江山と其勝を争ふ位。その光氣は、星や虹が之を助くるが如く、その華英は、煙や露が之を潤すが如く、その詩の發する音は、かの舜の大韶の樂に諧うて、美を盡し善を盡し、その詩の有する味は、結構なる羹と同じで、甘醖その中を得て居る。そこで、詩を作るより外、こ

の世に於て我が娯樂とするものなく、聲調の響亮なるは、金石より出でて、鳴り轟くが如くである。江邊の茅屋、風雨初めて晴れ、四方の景色の鮮かに見える時、門を閉ちて、十分に晝睡を爲し、やがて起き上ると、丁度、詩が出来た。そこで、唾壺を扣いて、聲高に自ら之歌ひ、俗人の耳を驚かすをも顧みない。出来るならば、かの君山の老父を呼び來り、天上の諸仙が吹きすさぶといふ長笛を攜へ來らしめ、わが此歌に和して、月明の下に吹き鳴らして貰ひたい。但し、愁ふるところは、波浪俄に起り、鳥獸は駭いて叫び、山嶽は搖いで崩れむとし、大へんなことに成りかけると、天帝は之を開いて、ひどく立腹せられ、わざわざ下界に白鶴を降して之を迎へしめ、この世に在つて、惡戯を恣にすることを許されず、そこで、仕方がないから、風に吹き靡く腰佩を締め直して、天上の玉京に歸らねばならぬ様に成るかも知れぬといふ其一事のみである。

【餘論】この詩は、青邱集中の冠冕たるのみならず、あらゆる漢詩中に、稀に見るところの傑作であつて、これを世界の文壇に出した處で、決して、引けは取らぬと思ふ。青邱その人は、詩人の如何なるものかを自覺して居たので、その言ふところは、今日卓絶したる美學者の言ふところと、さながら符節を合する様である。支那の論詩家は、詩經の大序を以て金科玉條となし、詩は溫柔敦厚を旨とすべく、言ふもの罪なく、聞くもの戒むるに足るといふことを以て、詩の本旨としたが、憐むべし、彼等は、詩を以て道義に隸屬せしめ、文學と教訓とを混同し、従つて、詩の品位を下落せしめたことを覺らな

かつたのである。青邱が此詩に述ぶるところは、詩人は世の俗人に容れられない、詩人の本領は、宇宙の神祕を探るに在る、さうして出來たものが、眞正の詩であるといふことを極言したので、起首より不_レ管鳥兎忙奔傾に至るまでは、詩人の生活状態を敘し、向_ニ水際_一獨坐より自出_ニ金石_一相轟鏗に至るまでは、作詩より其詩の價値に及び、江邊茅屋風雨晴より以下は、詩の極妙なるものは、絶大の勢力を有するといふことを象徴的に述べたのである。通篇長短錯落、句法の變化を極むると同時に、聲調も申し分なく、つまり、内容と形式と、共に間然するところなきもので、それにつけても、青邱が尋常一様、批風抹月の徒に非ざること、もとより言を俟たない。

登陽山絶頂

陽山の絶頂に登る

我登此山顛

われ此山の顛に登り、

不知此山高

この山の高きを知らず。

但覺羣山總在下

但だ覺ゆ、羣山すべて下に在り、

坐撫其頂同兒曹

坐して其頂を撫して、兒曹に同じきを。

又見太湖動我前

又見る、太湖、わが前に動くを、

長短句體 登陽山絶頂

【字解】(一) 赤城杖 陸游の詩に倚_ニ天山作_ニ海游_一傾、看遍人間兩赤城とあつて、その自注に「青城山、一名赤城山、而して天台の赤城山は乃ち余の舊遊」とあり、又吳志趙遵傳の注に「仙人介象、諸方術を善くす。吳主、聞いて之を徵す。吳主、

洶湧三十萬頃煙 洶湧三十萬頃の煙波濤。

波濤

長風吹人度層嶂 長風人を吹いて層嶂を度り、

不用仙翁赤城杖 用ひず仙翁赤城の杖。

峰廻秋礙海鶻飛 峰は廻つて、秋礙る海鶻の飛ぶを、

日出夜聽天雞唱 日は出でて、夜聽く天雞の唱ふるを。

中有一泉長不枯 中に一泉あり、長しへに枯れず、

乃是蜿蜒神物之 乃ち是れ蜿蜒神物の都するところ。

所都

老藤陰森洞府黑 老藤陰森、洞府黒く、

樹上不敢留棲鳥 樹上敢て棲鳥を留めず。

常年禱雨車 常年雨を禱るの車

來此投金符 ここに來つて金符を投ず。

鱗魚を得、窟下をして之を切らしめ、蜀薑を得て燕を作らむと欲す。象、即ち吳主をして、左右の一人を指し、錢五十を以て之に付せしめ、象、一符を書し、以て青竹杖中に著け、行人をして、目を閉ぢて杖に騎せしむ。須臾にして、すでに成都に至る、乃ち簾を買ひ、復た杖に騎し、目を閉ぢ、須臾にして、すでに還つて、吳の窟下に至れば、鱗を切つて適了る」とある。【二】秋礙 礙はさへざる。【三】蜿蜒神物 即ち龍。【四】洞府 洞窟。【五】常年 例年、一に當年に作る。【六】金符 金紙の御符。これは白龍廟を指したので、前に卷二、迎送神曲の原注に「白龍廟は、陽山に在り、世傳ふ、東晉の時、居民鍾氏の女、一肉塊を生む、化して白龍となつて去る、女靈絶、

靈旗風轉白日晦 靈旗風轉じて白日晦く、

馬鬣一滴露三吳 馬鬣の一滴、三吳を濡す。

巖巒蒼蒼境多異 巖巒蒼蒼、境に異多く、

樵子尋常不曾至 樵子、尋常、かつて至らず。

探幽歷險未得歸 幽を探り、險を歴て、未だ歸るを得ず、

忽聞鐘來澗西寺 忽ち聞く、鐘の澗西の寺より來るを。

此時望青冥 此時、青冥を望み、

脫落塵世情 脫落す塵世の情。

白雲冉冉足下起 白雲冉冉として足下に起り、

如欲載我昇天行 われを載せ、天に昇つて行かむと欲す

古來名賢總何有 古來名賢、すべて何かある、「るが如し。」

只有此山長不朽 只だ此山の長く朽ちざるあり。

欲呼明月海上來 明月を呼んで海上より來らしめ、

長短句體 登陽山絕頂

遊に洞を山巔に立つ」とある。【七】馬鬣一滴 前に卷十、題三董元臥沙龍圖の詩中に引いて置いたが、續玄性錄に、龍母が李靖に行雨を依頼する言葉に「郎、馬に乗せよ、衝勒を濡らすなかれ、その行くに信せよ、馬、地を跑けて嘶鳴すれば、即ち瓶中の水一滴を取つて、馬鬣の上に滴らせよ、慎んで多きこと勿れ」とある。【八】三吳 指掌圖に「蘇常湖を以て三吳となす」とある。【九】尋常 普通には。【一〇】青冥 青天に同じ。【一一】冉冉 もくもくと湧き出る。【一二】浮邱 仙人の名、詳しくは浮邱伯、列仙傳に「王子晉、好んで笙を吹き、鳳凰の鳴を作す、伊洛の間に道士浮邱伯あり、授して以て嵩高山に上る」とある。【一三】洪崖 亦た仙人の名、神仙傳に「嶺叔綽、華山に歸

照把長生一瓢酒。照らされて、長生一瓢の酒を把らむと
浮邱醉枕肱。浮邱は酔うて肱を枕にし、
欲す。

洪崖笑口開。洪崖は笑口開く。

天風吹落浩歌聲。天風吹き落す浩歌の聲、

地上行人盡回首。地上の行人、盡く首を回らす。

漢の武帝、叔卿の子度をして之を求めしむ。その父、數人と博するを見る。度曰く、さきに與に博するものを誰と爲す、叔卿曰く、これ洪崖先生、王子晉、薛容なり」とあり、又郭璞の詩に「姮娥揚三妙音、洪崖領二其韻」とある。

【題義】陽山は、題下の原注に「城の西北に在り、古しへ餘杭山と名づく、吳中最高の者、中に白龍湫あり、早には必ず禱る」とあり、姑蘇志に「陽山は、府城の西北三十里に在り、高さ八百五十餘丈、逶迤二十餘里、その陰を背にし、陽に面するを以て、故に陽といふ、大峰一十五にして、箭缺を絶頂と爲す。相傳ふ、秦皇、ここに射ると。故に其下に射瀆あり。文殊寺あり。寺内の石井、大旱にも涸れず、白龍洞あり、西に龍母塚あり。東北に白鶴山あり、丁令威の宅たるを以て山に名づく、又白蓮峰と名づくるは、下に白蓮寺あるを以てなり。今澄照寺と名づく、白龍廟在り」と見ゆ。この詩は、即ち陽山の絶頂に登つて作つたのである。

【詩意】われ陽山の絶頂に登ると、この山の高いことが分らないが、唯だ羣山は、すべて低く下方に在つて、ここからは、子供と同じく、その頂を撫づべきを覺ゆるのみで、考へて見れば、随分高い

に相違ない。それから、太湖が我が前に動いて居るのが見え、三十萬頃の煙波は、一望瀾然として洶湧して居る。ここに來るまでの間、長風は人を吹いて、層幃を度らしめ、さながら、羽が生えて飛んで行く様であつて、仙人の赤城の杖も、格別用ふるには及ばない。羣峰廻立して居るから、秋には、海鶴の飛ぶを遮り、紅日早く上らむとして、夜半には、天雞の叫ぶのが聞こえらると思ふ。その間に一條の泉があつて、如何なる早にも涸れず、その湫を成す處には、龍が蜿蜒として住んで居る。あたりは、太い藤蔓が陰森として鎖ちこめ、仙人の洞府は、宥然としてほの暗く、何となく、恐ろしいから、樹上に棲む鳥だにない位。例年、雨を禱る車は、ここに來て、金色の御符を湫中に投ずるのであるが、その效驗著しく、見る間に、靈旗風に靡いて、今まで晴れて居た日も、俄に晦くなり、そして雨を降る。仙人が馬の鬣に一滴の水を垂らすと、それが幾尺の甘霖となつて、三吳の全土を霑すのである。巖壑は蒼蒼として、異境頗る多く、普通には、木こりだに來ぬ處であるが、幽を探り、險を歴て、なかなか歸らうとしなかつた。忽ちにして、洞西の寺より、夕を告ぐる鐘聲の響の出づるを聞き、止むなく中止した。この時、頭を仰いで青天を望めば、塵の浮世の情を振ひ落して仕舞ふ様である。白雲は、冉冉として、脚の下より湧き起り、やがて、われを載せて昇天せしめむとするが如くである。願みれば、古來の名賢、果して何物を遺したか、唯だ此山のみは、萬古に互つて朽ちず、依然として残つて居る。そこで、明月を呼び出して、東海の上より來らしめ、その清光に照らされながら、瓢に入

れた長生の酒を酌まうと思ふ。やがて、興酣なるに至れば、浮邱伯は、酔うて腕を枕にして眠り、洪崖先生は、大口を開いて、呵呵として笑ふであらう。その時、われは高らかに歌ふが、天風が其歌聲を吹き落したならば、地上の行人は、何事が起つたかと思ひ、誰しも、首を回らして仰望するであらう。

【餘論】起首、先づ絶頂の大觀を敘し、長風吹入度層嶂の四句は、登山の途すがらなる景色、中有一泉一長不枯の八句は白龍廟、巖巒蒼蒼境多異は、洞の附近を日暮まで探討せしこと、此時望青冥の四句は、塵世を脱落して、將に羽化登仙せむとするを言ひ、古來名賢總何有の八句は餘波で、想像を逞うして、浩浩たる曠懷を敘し、結末も亦た大に振つて居る。

張節婦詞

張節婦の詞

誰言妾有夫。

誰か言ふ、妾に夫ありと、

中路棄妾身先殂。

中路に妾を棄てて、身、先づ殂す。

誰言妾無子。

誰か言ふ妾に子なしと、

側室生兒與夫似。

側室、兒を生んで、夫と似たり。

【字解】【一】中路 中道に同じ、又中途。【二】身先殂 殂は死亡。【三】側室 妾を云ふ、漢書文帝紀に「朕は高皇帝側室の子」とある。【四】辟繯 辟は劈に同じ、つんざく。繯はの糸、或は麻絲。絲を裂いて

兒讀書妾辟繯。

兒は書を讀み、妾は繯を辟く、

空房夜夜聞啼鳥。

空房夜夜、啼鳥を聞く。

兒能成名妾不嫁。

兒能く名を成し、妾は嫁せず、

良人瞑目黃泉下。

良人目を瞑せむ黃泉の下。

細くし、繯の用意をする。

【題義】題下の原注に「靈壽張明府の嫡母、早く寡して志を守る」とある。靈壽は地名なるべく、張の名字は分からないが、明府といへば、太守の尊稱で、先づ立身したものと見える。節婦は、夫の死後、おのが子でない妾腹の倅を守り立てて、家門を盛にしたのである。

【詩意】私に夫があると誰が言ふか、有るには有つたが、半途で私を棄てて、先づ死んで仕舞つた。私に子がないと誰が言ふか、夫の妾が倅を生み、夫と極めて肖て居て、それが即ち私の子である。この兒は、書物を読み、その側で、私は絲を裂いて居て、空房の中、夜夜鳥の啼くのを聞くと、自然傷心に堪へられぬ。しかし、倅は、どうやら立身して名を成すに至り、私は節を守つて、再び嫁せず居たので、夫は、黃泉の下に之を聞かば、定めて安心して瞑目されるであらう。

【餘論】節婦に代つて言を立て、その中正の道を失はぬ處は、以て、世上の教訓に充てることが出来る。措辭の上から云ふと、樂府の體を學んだもので、流石に巧慧である。元來、かういふことは、至

極結構ではあるが、目ざましい事實が無くて、筆を下すことが太だ困難である處から、作者は、特に苦心して、いささか一新機軸を出したのであらう。

與客飲西園花下 客と西園の花下に飲む

一壺酒正滿 一壺、酒、正に滿ち、

一樹花仍新 一樹、花、仍は新なり。

傾壺對花樹 壺を傾けて花樹に對す、

日暮西園春 日暮、西園の春。

不愛枝上花 枝上の花を愛せずして、

愛此花下人 此の花下の人を愛す。

相逢莫學花無賴 相逢ふ學ぶ莫れ花の無賴なるを、

明日分飛隨路塵 明日分飛して路塵に隨ふ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、西園は、作者の家に在ると見える。

【字解】(一) 花無賴 杜甫の詩

に章曲花無賴、家情三殺人とある。無賴は、頼るなし。即ち誰にも相手にされないといふ義。ここでは、性が悪いといふ位に見れば善からう。

【詩意】一壺の酒は、正に滿ち、一樹の花は、仍は新に、この花、この酒、相得て恰も好き折から、壺を傾けつつ花に對し、日暮、ともに西園の春を賞玩しやう。しかし、予は、枝上の花を愛せずして、この花下の人を愛するので、花は本來性が悪く、明日は東西に分飛して、路上の塵を逐ふが、ここに相逢ひし君は、決して之を學ぶことなく、長しへに、交情を持続することが願はしい。

【餘論】この詩は、折角ながら、形を備へて居るだけで、淺俗にして陳腐、取るに足らぬ愚作である。

吳中逢王才隨朝京使赴燕南歸

吳中、王才が朝京使に隨ひ、燕に赴いて、南に歸るに逢ふ

江南草長蝴蝶飛 江南、草長じて蝴蝶飛ぶ、

白馬新自燕山歸 白馬、新に燕山より歸る。

燕山歸不堪說 燕山より歸り、説くに堪はず、

易水寒風薊門雪 易水の寒風、薊門の雪。

朝邸空隨使者車 朝邸、空しく使者の車に隨ひ、

禁閣不受書生謁 禁閣、書生の謁を受けず。

【字解】(一) 賦莫哀 杜甫の短

歌行、贈三王郎直一に王郎酒酣拔劍斫地歌莫哀、我能拔三鬣抑塞磊落之奇才とある。歌聲悲む勿れといつて、禁止の辭。何も莫哀といふ歌を唱へるといふのではない。(二) 黃金臺 燕の昭王が築いたので、千金を其上に置いて、諸侯の客を招いた。(三) 堯基 堯殿した礎石。(四) 土

一杯勸君歌莫哀。一杯、君に勸む、歌、哀む莫れ、
 歸時應過黃金臺。歸る時、應に過ぐるなるべし黃金臺。
 不見荒基秋來土。荒基を見ず、秋來土花紫に、
 花紫。

花首。【一】伯圖、朝國に同じ。
 【二】國士、一國の士、前に屢ば見え
 たが、豫讓が「智伯は國士もて我を
 遇す、故に我國士もて之に報ず」と
 いひしに本づく。

伯圖已歎昭王死。伯圖、すでに歎んで昭王死す、
 千載無人延國士。千載、人の國士を延くなし。

【題義】吳中は、即ち蘇州。王才の字、竝に閱歷等は不詳。朝京使は、張士誠が發して北上せしめた使者であらう。この詩は、蘇州に於て王才に遇ひ、その王才は、近ごろ、朝京使に隨つて燕京に赴き、丁度、ここに歸つて來たといふので、仍つて、その人に贈つたのである。

【詩意】江南に於ては、草がのびて、蝴蝶羣れ飛ぶ二月の頃、君は、白馬に騎して、この頃、燕都から歸つたとのことである。燕都から歸つたが、客中遭遇せしことは、説くに堪へず、易水の寒風、薊門の積雪、冬の北地旅行の辛いことは言はずもがな、その上、使者の車に隨つて、官邸に投宿したが、格別面白いこともなく、天子の居られる處は、咫尺の地であるが、書生に拜調を許されぬから、滿腹の經綸、展ぶるに由なく、實は、何一つ仕出來さずして歸つたとのことである。そこで、君に一杯

を勸め、歌ふにしても、悲むには及ばず、精神、くよくよせぬ様に、氣を大きくして賞ひたいと申すのである。君の歸る時、黃金臺を過ぎたであらう、その黃金臺は、荒れた礎石さへ見えなくなり、秋來苔が積んで、紫色に見える。昭王逝いて、すでに久しく、霸圖悵として歎み、その後幾千年、昭王の如く、己を謙して國士を延く様な人は無いから、今さら、仕方がない。

【餘論】この詩は、前に卷十、送王孝廉游京歸錢塘の七古と大體同じであつて、起首より禁閣不受書生謁に至る數句は、皆彼に見えて居る。但し、燕山歸、不堪説の三言二句は、彼に於て燕山歸來不堪説といふ七言一句となり、禁閣は、彼に於て帝閣に作つてある。それから以下も、文字こそ聊か違ふが、命意は、全く同じである。不見荒基秋來土花紫は、長句としては、甚だ拙劣なものである。要するに、この二首は、體は稍や違ふが、意象風格、略ぼ相若き、どれが定稿か一寸分からねぬ。又その題も、彼には送王孝廉游京歸錢塘とあつて、兩者を併せ觀れば、王孝廉、名は才、朝京使に隨つて燕都に游んで、一先づ吳下に歸著し、これより、更に其故郷の錢塘に歸るのだといふことが分かる。すると、この題に赴燕南歸とあるは、未だ盡さず、且つ曖昧に失する處があることと思ふ。いづれにしても、兩首ともに名作といふべき程の者でないことは、確實である。

白雲泉

白雲泉

白雲不爲雨

白雲、雨と爲らず、

散在清泉流

散じて清泉に在つて流る。

泉氣復成雲

泉氣、復た雲と成り、

山中同一秋

山中同一の秋。

巖前石竇幽寒處

巖前の石竇、幽寒の處

雲自長浮泉自注

雲は自ら長く浮び、泉は自ら注ぐ。

潜龍未起出深泓

潜龍、未だ起つて深泓を出でず、

渴鳥時來下高樹

渴鳥、時に來つて高樹より下る。

雲應無心飛上天

雲、應に飛んで天に上るに心なかるべく、

泉亦不肯隨奔川

泉、亦た肯て奔川に隨はず。

老僧愛此不復下山去

老僧これを愛し、復た山を下つて去らず、

臥雲飲泉終歲年

雲に臥し、泉に飲して歳年を終る。

【字解】 ① 石竇 石の穴。

② 深泓 泓は水の溜まり。

③ 歳年 ただ年といふに同じ。

【題義】

白雲泉は題下の原注に「天平山腰に在り、乳泉なり」とあり、覺藻集に載する游天平山記に「白雲寺に至る……然る後、その麓より狙杖以て上る。山に怪石多く、臥すが若く、立つが若く、搏つが若く、噬むが若く、蟻孳孳柱、名狀すべからず。復た泉あり、亂石の間より出づ、白雲泉といふ。椶脈縈絡、下つて沼に墮つ。瓢を擧げて、酌んで嘗む、味極めて甘冷。泉上に亭あり、名、泉と同じ、草木秀潤、蔭すべく、息ふべし」とあり、又白居易の詩に、

天平山上白雲泉、雲自無心水自閒。何必奔衝下山去。更添波浪在三人間。

とある。この詩は、即ち白雲泉を詠じたので、天平山の游記と同時の作であらうと思ふ。

【詩意】

白雲は、雨ともならず、いつしか散じて仕舞つて、清泉と一處に流れて居る。そして、泉氣は、再び雲となり、絶えず、反覆循環し、山中は、いつでも秋の氣分である。巖前の石の穴は、幽深にして、自然寒く、そこには白雲が長しへに自ら浮び、清泉が自ら流れて居る。そして、龍は、その流の下なる深い溜りに潜んだ儘、起き出づることなく、渴したる鳥は、水を飲まうと思つて、時たま、高樹から飛んで下りて來る。雲は、格別、飛んで天に上らうとも思はぬし、泉も亦た流れ下つて奔川に隨はうともしない。その傍には、白雲寺といふのがあるが、寺中の老僧は、ひどく氣に入つたと見え、矢張、山を下つて去ることなく、その雲に臥し、その泉を飲み、一生涯ここに居る積りであるらしい。

【餘論】起四句は、清警幽妙なるのみならず、偶然にも、今日の理學に協つて居る處が面白い。以下、絶えず雲と泉とを錯綜し、老僧を借ひ來つて、これを收束したのは、愈よ妙である。

戎王追彘圖

戎王彘を追ふの圖

前騎脱兎奔

前騎は脱兎奔り、

後騎驚鴻急

後騎は驚鴻急なり。

火燒秋草獵場空

火は秋草を焼いて、獵場空しく、

一彘窮追勢難及

一彘窮追、勢及び難し。

大小當戸左右賢

大小當戸、左右賢、

單于勇銳關支妍

單于是勇銳、關支は妍なり。

雕戈白羽謾爭發

雕戈白羽、謾に争ひ發す、

衆中得雋知誰先

衆中、雋を得るは、知る誰か先。

君不見天策將眞

君見すや、天策將は眞天子、

【字解】「脱兎」孫子に「始は處女の如く、後には脱兎の如し」とある。

「驚鴻」曹植の洛神賦に「凌波微步、羅若三驚鴻」とあり、東坡の詩に「驚鴻脱兎争先後」とある。

「一彘」彘はわのこ、即ち家であるが、ここでは、野猪。元來、家も猪も、同一種類で、家を野に放し飼ひにすると野猪になるといふ話である。

「大小當戸左右賢」史記匈奴傳に「冒頓強、左右賢王を置き、その官號、左右大當戸を置く」とある。左右賢王は、左右大臣の如く、

天子。

馳一馬。殪四豕。

一馬を馳せて、四豕を殪す。

大小當戸は、その下の大官である。

【一】單于、匈奴君長の號。【二】關氏、前に卷一、王明君の詩中にも引いて置いたが、集韻に「關、音煙。

氏、一に支に作る。單于の遺妻なり」とある、即ち匈奴の皇后。【三】得雋、雋は第一等の獲物、左傳莊公十一年に「雋を得るを克といふ」とある。【四】天策將、通典に「唐の武德の初、秦王、すでに王世充及び竇建德を平らぐ。高祖、秦王の功、今古に殊なるを以て、乃ち特に天策上將軍を置き、以て拜す。位、王公の上に在り」と記してある。【五】殪四豕、唐書唐僉傳に「僉、從つて洛陽苑に獵す。羣豕、林より突出す。帝、射つて四たび發し、輒ち四豕を殪す。一豕躍つて殿に及ぶ。僉、馬より投じて之を搏つ。帝、劍を抜いて豕を斬り、顧みて笑つて曰く、天策長史、上將の賊を撃つを見ざるか」とある。

【題義】戎王の戎は西戎、西方の未開種族、即ち匈奴。彘は野猪。この詩は、匈奴の單于が獵をして野猪を追ひかけて居る圖に題したのである。

【詩意】前方の騎馬武者は、脱兎の奔るが如く、後方のは、驚鴻の急に飛ぶが如く、各、後先を争うて馳せ出して居る。野獸を追ひ出す爲に、枯れた秋草を焼き拂つたから、獵場は一空、何物も残つて居らぬ。その時、一の野猪は、窮追せられ、非常の勢で逃げ出し、とても追ひつかぬ位。あたりには、大小當戸、左右賢王などが列を作つて差し扣へ、單于是、凜凜しげに、さも勇銳なる身ぶりをして居るし、關氏は、流石にあでやかに見える。そこで、飾つた弓に白羽の箭を番へて、あてもなく争つて放つて居るが、この晴れの場所に於て、眞先に第一の獲物を仕留めるのは、誰であるか。しかし、匈奴

奴の射獵などは、もとより言ふに足らぬので、かの唐の太宗は、その昔、天策上將軍の職に居られたが、一馬を馳せて、物の見事に四頭の野猪を射留められ、射技の精妙、天下に敵なく、匈奴などは、いくら威張つて見た處で、到底、わが中國を覬覦することは出来ない。

【餘論】圖中に見えたる匈奴射獵の狀を詩化して、幾句を費したのは、格別、賞讃を值せぬが、結末、唐の太宗を借ひ來つて、陪襯となした處は、極めて面白く、全篇、爲に振起するを覺える。

茅山陳道士臥雲所

茅山陳道士の臥雲所

不逐雲渡海、寧隨雲出山。

雲を逐うて海を渡らず、むしろ雲に隨つて山を出でむや。

但邀雲共宿、日夕三峰間。

但だ雲を邀へて共に宿す、日夕、三峰の間。

網緹枕席潤、唵靄房櫺間。

網緹として枕席潤ひ、唵靄として房櫺間なり。

聽松閣前風滿耳。

聽松閣前、風、耳に滿つ、

吹盡白雲應睡起。

白雲を吹き盡さば、應に睡起すべし。

【字解】【一】三峰、即ち三茅峰、なほ題義の條に詳述する。【二】網緹、匂やかなる貌。【三】唵靄、もやもやする貌。【四】聽松閣、茅山に在つて、もと陶弘景の構想した處。

【題義】茅山は、前に卷五、送蕭隱君の題下に注して置いたが、一統志に「句容縣東南の山、形句の字の如く、はじめ、句曲山と名づく。後、茅君道を此に得たるに因つて、今、茅山と名づく。道書、第八洞天、第一福地たり。山に三峰あり、三茅君、各一峰を占む、これを三茅峰といふ」とある。陳道士は、名字ともに不詳。茅山に隱宅を設け、臥雲所と號せしに因り、青邱は、乃ち此に寄題したのである。

【詩意】身は、雲に隨つて海を渡らうともしない位だから、いかで、雲に隨つて山を出すべき。ただ雲を迎へて、ともに宿し、朝夕、茅山三峰の間に起臥して居る。その間、雲が網緹として繞ると、枕席、爲に潤ひ、雲が唵靄として立ちこめると、房櫺ともに靜かである。陶弘景の遺跡たる聽松閣の前には、松風吹きさびて、耳に滿ちて居るが、やがて、白雲を吹き盡したならば、その時、睡より起きやう、つまり、雲の居る間は、臥した儘、決して、起き出でぬ覺悟である。

【餘論】臥雲の二字に就いて構想し、偃臥、雲を離れざる奇趣を敘したのである。

贈醉樵

醉樵に贈る

川釣已遭獵

川釣、すでに獵に遭ひ、

野耕終改圖

野耕、終に圖を改む。

長短句體 茅山陳道士臥雲所 贈醉樵

【字解】【一】川釣已遭獵、呂尚が渭川に釣して居て、文王の獵するに遇ひ、仍つて、直に其師となりし

不如山中樵、
醉臥誰得呼、
采山不采松、
松花可爲酒、
酒熟誰共斟、
木客爲我友、
木客已去空石牀、
舉杯向月邀吳剛、
借汝快斧斫大桂、
要令四海增清光、
林風吹髮寒擁耳、
獨枕空樽碧巖裏、
此時忘却負薪歸、

如かず、山中に樵せむには、
醉臥、誰か呼ぶを得む。
山に采れども松を采らず、
松花は酒と爲すべし。
酒熟して誰と共にか斟まむ、
木客は我が友たり。
木客、すでに去つて、石牀空しく、
杯を舉げ、月に向つて、吳剛を邀ふ。
汝の快斧を借つて大桂を斫る、
四海をして清光を増さしめむことを要す
林風、髪を吹いて、寒、耳を擁し、
ひとり、空樽に枕す碧巖の裏。
この時、忘却す、薪を負うて歸るを、

こと、李白の詩に如逢三涓川獵、猶可
帝王師とある。【二】野耕移改關
伊尹が有莘の野に耕して居て、湯の
招聘に違ひ、仍つて、おもひ直し、
湯を佐けて桀を討ちしこと。史記に
「伊尹は處士、湯、人をして之を聘
せしむ、五たび反り、然る後に往く」
とある。【三】木客、木の精が人の
形を爲せるをいふ。十道四蕃志に「處
州上洛山に木客鬼あり、人と交つて
甚だ信」とあり、東坡の詩に山中木
客解吟詩とある。【四】吳剛、西
陽雜俎に「月中に桂あり、高さ五百
丈、下に一人あり、常に之を斫る、
樹則隨つて合す。その人、姓は吳、
名は剛、仙を學ぶ、過あり、誦して
樹を伐らしむ」とある。【五】擁耳、
耳を押へて居る。【六】看茶、述異
記に「信安郡石室山、晉の時、王質、

猛虎一聲驚不起、
世間萬事如浮煙、
看茶何必逢神仙、
青松化石鶴未返、
酒醒又是三千年、

猛虎一聲、驚いて起たず。
世間萬事、浮煙の如し、
茶を看る、何ぞ必ずしも、神仙に逢はむ。
青松、石に化して、鶴、未だ返らず、
酒醒めて又是れ三千年。

木を伐つて至り、童子數人、棋して
歌ふを見る。質、因つて之を聽く。
童子、一物を以て質に與ふ、棗核の
如し、質、これを含んで、飢を覺え
ず。俄頃にして、童子謂つて曰く、
何ぞ去らざると。質起つて視れば、
斧柯盡く爛す。すでに歸れば復た時
人なし」とある。【七】青松化石
一統志に「金華永康縣延真觀前、唐の建中の中、道士馬自然、庭松を指して曰く、この松、すでに三千年、當に化して石となるべし
と。夕に至つて大風雨、その松、果して化す」とある。

【題義】醉樵は饒介之の號で、この詩は、即ち其人に贈つたのである。列朝詩集張簡の傳に「勝國の
時、法網寬にして、大人必ずしも仕官せず、漸中、每歲、詩社あり、一二の名宿、楊廉夫輩の如きを
聘して、これを主らしめ、宴賞最も厚し。饒介之、吳中に分守し、自ら醉樵と號し、諸文士を延
いて、歌を作らしむ。仲簡の詩壇場、首坐に居り、黃金一餅を贈らる、高季迪は白金三斤、楊孟載は
一鎰。後、承平久しく、張洪修撰、人の爲に、一文を作ること五百錢を得たり」とある。すると、
青邱の此作は、當日第二位の選に上つて、賞與を得たものである。

【詩意】呂尙は涓川に釣して、文王の獵に遭ひ、伊尹は有莘の野に耕し、湯の招聘を受けると、翻然

として考へ直し、ともに起つて、その主に帝業を爲さしめた。しかし、そんな事をするよりも、山中に木こりをして居るが、はるかに宜しく、その酔臥するに當つては、誰も呼び醒ますことが出来ない。これが即ち醉樵の超絶的な閑趣である。醉樵の山に分け入るや、松の木だけは伐らないので、それは、松の花が酒を醸せるからである。その松花の酒、方に熟する時、誰を相手にして酌むかといふと、木精が即ち友である。その木精が立ち去ると、石牀の邊に誰も居ないが、ひとり、杯を舉げ、月に向つて月中に住む吳剛を招き、その持てる大斧を借りて、月中に生ひ茂れる大なる桂樹を斫り倒し、四海をして清光を増さしめやうとする。やがて、空林を渡る風は髪を吹き亂し、寒さが甚しいから、ちつと耳を押さへ、はては、ひとり苦練なる巖石の間に横はり、空樽を枕にして、すやすやと眠つて居る。この時は、すでに薪を背負うて歸ることを忘れたので、まことに呑氣至極な話。やがて、猛虎一聲、すさまじく哮けるに驚かされても、まだ醉が醒めぬから、起き上ることが出来ない。顧みれば、世間萬事は、雲煙の浮べるが如く、まことに詰まらないから、たとひ、神仙でなくとも、棋を圍むものがあつたならば、傍觀するのも、面白からう。青松も、久しきを経れば、化して石となるべく、その松の上に棲む鶴も、何處かに飛び去つて、返り來らず、酒が醒めると、この世に於ては、すでに三千年を経過して居た。

【餘論】中間、吳剛を邀へるの一段は、極めて精彩がある。そして、借汝快斧の二句は、斫却月中桂、清光看合多といへる杜句に本づいたものである。以下二解も、各その後半が振つて居て、殊に青松化石の二句は、仙音縹緲、他に其類なきものである。

雷雨護嬰圖、爲包山徐庭蘭賦

雷雨嬰を護る圖、包山徐庭蘭の爲に賦す

兒衣寒母衣溼

兒の衣は寒く、母の衣は溼ふ。

風雨蒼黃歸意急

風雨蒼黃、歸意急なり。

雷忽鳴兒勿驚

雷忽ち鳴る、兒驚く勿れ、

抱兒與兒同死生

兒を抱いて兒と死生を同じうす。

樹聲吹迴水聲注

樹聲吹き廻つて水聲注ぐ、

田家尚遙無避處

田家、尚は遙にして避くる處なし。

看圖誰念亂離人

圖を看て誰か念はむ亂離の人、

白日青天棄兒去

白日青天、兒を棄てて去るを。

【字解】「蒼黃」あわてる。

【二】田家 田舎の家。

【三】亂離人 亂世の人。

【題義】嬰は嬰兒、即ちみどりこ、包山の徐庭蘭は、詩中に謂はゆる兒で、その母を追慕する爲に、

長短句體 雷雨護嬰圖爲包山徐庭蘭賦

この圖を作つたものと見える。そして、青邱は、その依頼に應じて、これに題したのであらう。

【詩意】 兒の衣は、寒い位であるが、母の衣は、しとどに溼ひ、この風雨に遇つて、あわてふためき、早く歸りたいと思ふ心は矢の如くである。須臾にして、鳴る神、おどろおどろしく、兒は、ひどく驚いて居るので、母は、兒を抱いた儘、死ぬるも、生きるも、兒と一處にしやうといふ決心。やがて、木の揺すれる聲は吹き廻り、あたりの水の聲は、注ぐが如く、田舎の我が家は、まだ遠くて、おまけに、風雨を避ける處もない。その困苦につけても、母の兒をいたはる至情が分かる。亂離の世に於ては、白日青天に、おのが身を全うする爲に、その兒を棄てる人さへあるに、この圖を見れば、誰も、真逆と思つて、眞に受けることはあるまい。

【餘論】 この詩は、材料が乏しいのを強ひて構想したのであるが、結末二句の如き、襯映甚だ妙、流石に、青邱の手筆たるに負かぬものである。

南園

南園

君不見平樂館

君見すや平樂館

古城何處寒雲滿

古城何の處か、寒雲滿つ。

【字解】 〔一〕平樂館 漢書武帝紀に「元封六年、夏、京師の民、角抵を上林平樂館に見る」とあり、又李

君不見奉誠園

君見すや奉誠園

荒臺無蹤秋草繁

荒臺蹤なく秋草繁し。

白日沈山水歸海

白日は山に沈んで、水は海に歸る、

寒暑頻催陵谷改

寒暑、頻りに催して陵谷改まる。

皇天大運有推移

皇天の大運、推移あり、

富貴於人豈長在

富貴の人に於ける豈に長しへに在らむや

請看當年廣陵王

請ふ看よ、當年の廣陵王、

雙旌六纛何輝光

雙旌六纛、何ぞ輝光。

幸逢中國久多故

幸に中國の久しく多故なるに逢ひ、

一家割據誇雄強

一家割據して雄強に誇る。

園中歡游恐遲暮

園中歡游、遲暮を恐れ、

美人能歌客能賦

美人は能く歌ひ、客は能く賦す。

車馬春風日日來

車馬、春風、日日來る、

白の詩に陳王昔時宴平樂一とある。

【三】奉誠園 金樓の注には、元魏の蕭相深誠奉三臺尊、善居求作奉誠園の二句を引いてあるが、切實でない。

これは、白居易の傷宅に、不見馬家宅、今作奉誠園とあるのを引くべきである。馬燧は、德宗の時に大功を建て、従つて、第宅も華美を極めて居たが、死後、その子孫が持ち切れずして、朝廷に獻じて仕舞つたので、それが即ち奉誠園である。

【四】陵谷 改 前に同であつた處が、いつしか變じて谷となる。

【五】廣陵王 十國春秋に「廣陵王元璋、字は德輝、武肅王の第六子、文穆王元璿の兄なり。吳王行密、女を以て之に妻はす。

しきりに、中興建武等軍節度使、蘇常潤等州團練使、太傅同中書門下平章事を勅授せられ、蘇州に在ること

楊花吹滿城南路。楊花、吹き滿つ城南の路。

疊石爲山。石を疊んで山と爲し、

引泉爲池。泉を引いて池と爲す、

辟疆舊園何足奇。辟疆の舊園、何ぞ奇とするに足らむ。

經營三十年。經營三十年、

欲令子孫永保之。子孫をして永く之を保たしめむと欲す。

不知回首今幾時。知らず、首を回らせば今幾時ぞ、

繁華掃地無復遺。繁華地を掃うて復た遺すなし。

門掩愁鷓鴣風雨。門は掩うて、愁鷓、風雨に嘯き、

種菜老翁來作主。菜を種うるの老翁、來つて主となる。

空餘怪石臥池邊。空しく怪石を餘して池邊に臥し、

欲問興亡不能語。興亡を問はむと欲するも、語る能はず。

春已去人不來。春、すでに去つて、人、來らず。

三十年、文穆王立つや、晉、廣陵郡王に勅封す」とある。【五】雙旌六纛

唐書百官志に「節度使は、軍旗を總べ、殊殺を顧にするゆ、雙旌雙節を賜ひ、行けば節を建て、六纛を樹つ」とある。つまり居るときは雙旌、行くときは六纛を樹てるので、

旌はのぼり、纛は大旗である。【六】辟疆舊園 晉書王獻之傳に「獻之、かつて吳郡を經、顧辟疆に名園ありと聞き、先づ相識らず、平肩輿に乗じて、徑に入る。時に、辟疆、方に賓友を集む。而して、獻之、游歴すでに辱り、傍に人なきが若し」とある。

【七】愁鷓 鷓は鷓、劉孝威の詩に愁鷓集古樹」とある。【八】射堂 射を習ふ堂字、庾信の春賦に分明入射堂」とある。【九】陶圃 賦職する廣庭、廣海に「園圃の戲、草を以て之を爲り、實たすに柔物を以てす、今、これを種といふ」とある。【一〇】雅門 前に卷一、野田行の詩中にも引いて置いたが、檀譚の新論に「雅門周、琴を以て孟嘗君に見ゆ。孟嘗君曰く、先生、琴を鼓する、亦た能く文をして悲しましむるか」と。雅門周、琴を引いて之を鼓し、徐に宮徵を動かす、角羽を叩き、終つて曲を成す、

三十年、文穆王立つや、晉、廣陵郡王に勅封す」とある。【五】雙旌六纛唐書百官志に「節度使は、軍旗を總べ、殊殺を顧にするゆ、雙旌雙節を賜ひ、行けば節を建て、六纛を樹つ」とある。つまり居るときは雙旌、行くときは六纛を樹てるので、旌はのぼり、纛は大旗である。【六】辟疆舊園 晉書王獻之傳に「獻之、かつて吳郡を經、顧辟疆に名園ありと聞き、先づ相識らず、平肩輿に乗じて、徑に入る。時に、辟疆、方に賓友を集む。而して、獻之、游歴すでに辱り、傍に人なきが若し」とある。【七】愁鷓 鷓は鷓、劉孝威の詩に愁鷓集古樹」とある。【八】射堂 射を習ふ堂字、庾信の春賦に分明入射堂」とある。【九】陶圃 賦職する廣庭、廣海に「園圃の戲、草を以て之を

一樹兩樹桃花開。一樹兩樹、桃花開く、

射堂陶圃俱青苔。射堂陶圃、ともに青苔。

何須雅門琴。何ぞ須ひむ雅門の琴、

但令對此便可哀。但だ此に對して便ち哀むべからしむ。

人生不飲胡爲哉。人生飲ます胡すれぞや、

人生不飲胡爲哉。人生飲ます胡すれぞや。

孟嘗君、飲飲して之に就く」とある。

【題義】南園は、題下の原注に「城南に在り、吳越廣陵王錢元璪の園」とある。この詩は、南園の荒蕪に歸せしを見、舊

十年、勝、吳中に甲たり。今の郡學前の菜圃なり」とある。この詩は、南園の荒蕪に歸せしを見、舊を懐ひ、今に感じて作つたのである。

【詩意】平樂館は、むかし、漢の武帝の時、種種の催しをした處であるが、今は長安の古城、寒雲

天に滿ちて、何處とも分らない。奉誠園は、唐代に聞こえて居たが、今は、荒臺の跡だにもなくして、

て、秋草が生ひ茂つて居るだけである。白日は山に沈み、流水は海に歸し、寒暑は頻りに促し、陵谷

は互に相變するのが、この世の常態。それといふも、皇天の大運は、推移を旨として居るからで、富

貴の人に於ける、亦た決して永續するものではない。當年の廣陵王は、その權勢、飛ぶ鳥をも落とすばかり、身は節度使の重職に任じ、居るには雙旌、出づるには六纛、それが光り輝いて、あたりを拂ふ位。加ふるに、中原の地、變故多く、唐末の騷擾、愈よ甚しきを幸に、一家の者どもは、吳越地方に割據して、その雄強を誇つて居た。そこで、この南園に遊び戯れて、日の暮るるを惜み、美人は能く歌ひ、詞客は能く賦し、逸興過飛。東風吹き渡る春の頃には、日日車馬羣をなして、ここに來り、楊花は城南の路に吹き滿つるばかり。園中には、石を疊んで山と爲し、泉を引いて池をなし、あくまで數奇を盡し、かの辟疆の舊園も物の數ならず、これを経營すること三十年の久しきに及び、後世の子孫をして、永く之を保たしめむとして居た。首を回らせば、今日に至るまで、幾時を経たか知らぬが、繁華地を掃うて空しく、何一つ残つて居るものはなく、今見るところは、門を堅く鎖めて、蔦が風雨に嘯き、すべて菜畑となつて、老翁は主人顔に之を耕して居るだけである。珍らしい石の池邊に倒れて居るのは、むかしの名残であるが、これに向つて、興亡を問はむとするも、石は非情の者で、語ることが出來ぬから仕方がない。春は既に去れども、人は來らず、唯だ一樹二樹の桃が、花を開いて居るだけで、弓場や、蹴鞠の廣庭などは、ともに青苔が地に滿ちて居る。何も雍門周の琴を聞くまでもなく、これに對すれば、容易に悲哀に堪へざらしめる。人生は、まことに果敢ないもので、盛なるも、終に衰ふるを見れば、酒を飲むより外に詮なきものである。

【餘論】はじめに平樂・奉誠を點出し、その盛衰を言ひ、徐徐として本題に引き入れ、廣陵王の盛時を寫し、一轉して、刻下の荒廢に及び、感慨を以て收束したので、普通の構想ではあるが、敘述周匝、讀者をして、愴然たらしむるは、即ち詞筆の妙である。

滄浪亭

滄浪亭

滄浪平

滄浪平かに、

無風波之驚

風波の驚くなし。

滄浪廣

滄浪廣くして、

有風月之賞

風月の賞あり。

吳興長史舊遷謫

吳興の長史、舊と遷謫、

買得此水自號滄

この水を買ひ得て、自ら滄浪の客と號す。

浪客

垂釣在北渚

釣を垂れて北渚に在り、

長短句體 滄浪亭

【字解】(一)滄浪 書經に「雋冢より濼を導き、東流して漢となり、又東して滄浪の水となる」とあるのは、取りも直さず、漢水であるが、又汎く水色といふ義に用ふることがあるので、ここのは、即ちそれであらう。(二)風月之賞 歐陽修の滄浪亭の詩に「清風明月本無價、可惜祇賣四萬錢」とある。(三)吳興長史舊遷謫 宋史蘇舜欽傳に「范仲淹、その才を薦め、召試して、集賢校理に除せられ、進奏院を置す。會ま、院、神

榜船臨西洲。

船を榜して西洲に臨む。

白鷗不來往。

白鷗來往せず、

遣興誰同游。

遣興、誰か同游。

發清歌弄清景。

清歌を發し、清景を弄す、

醉入荷花夢魂冷。

醉うて荷花に入つて夢魂冷かなり。

天念儒臣去國冤。

天は、儒臣國を去るの冤を念ひ、

故與無塵水雲境。

故らに與ふ無塵水雲の境。

斯人去已遠。

この人、去つて已に遠く、

我來空復情。

われ來つて空しく復た情。

滄浪水雖在。

滄浪水ありと雖も、

不似昔年清。

昔年の清きに似ず。

躊躇獨過亭前路。

躊躇、ひとり過ぐ亭前の路、

疏葦寒煙沙鳥鳴。

疏葦寒煙、沙鳥鳴く。

を祀るに當り、舜欽、右班殿直劉雲と、故紙を嚼ぐ公錢を用ひて、鼓樂を召して宴を設く。御史中丞王拱辰、廉して之を得、その屬に諷して、論奏せしむ。事、開封に下し、劾治す。舜欽、興、自ら監せしに坐して除名す。これに久しうして、復た起されて湖州長史となり、蘇州に寓居し、木石を買つて滄浪亭を作るとある。【四】榜船、舟を楫ぐ。【五】儒臣去國冤、蘇舜欽傳に「これより先、舜欽、宰相杜衍の女を娶る。衍、方に仲淹・富弼と政府に在り、庶事を更定せむと欲す、故に、拱辰等、これを便とせず、舜欽を勸奏し、因つて以て衍を排かさむと欲するなり」とある。

【題義】滄浪亭は、題下の原注に「郡學の東に在り、積水數十畝、子美、これを得、亭を上につくへ、その名、はじめて著はる」とあり、石林詩話に「錢氏廣陵王元璪の別圃、宋の蘇舜欽、これを得、亭を築いて滄浪といふ。これに由つて、滄浪の名、はじめて著はる。積水、數十畝に彌り、旁に小山あり、高下曲折、水を縈帶し、今に至つて吳中の勝境たり。俗に韓王園と名づく。この園、舜欽より後、屢ば主を易へ、紹興の時、かつて韓世忠に得られしを以てなり」とある。この詩は、即ち滄浪亭に題したのである。

【詩意】滄浪の水は、平かにして、風波の驚くなく、滄浪の水は、廣くして、風月の眺がある。むかし、蘇舜欽は、吳興の長史として、この地に遷謫せられ、因つて、この池を買つて園となし、自らも滄浪の客と號して居た。そこで、釣を垂れむとしては北渚に向ひ、舟を漕いで西洲に臨み、白鷗が來往せざれば、誰と共に、興を遣つて遊ばうか。やがて、清歌を發して清景を賞し、酔うては、蓮の花咲く間に入つて眠り、夢魂の冷かなるをも苦にしなかつた。天は、儒臣が冤罪を以て京國を去りしことを氣の毒に思召され、わざわざ、俗塵全く其跡を絶てる水雲の境を以て、舜欽その人に與へられたのである。しかし、舜欽一たび逝いて、歲月すでに久しく、われ偶ま此に來るも、追慕の情に堪へぬその上、滄浪の水は、依然として残つて居るが、むかしの様に、水は、澄んでも居ない。去りがてにして、亭前の路を過ぎ行けば、頃しも、秋の末、枯れ残つた疏なる葦の間には、寒煙白く立ちこ

め、水鳥が淋しげに鳴くのみである。

【餘論】この詩は、程よく纏まつて居て、格別新奇の處もない代りに、平正穩妥、且つ多少の巧思を以て斡旋したものらしく、長短句の配合には、特に意を用ひて、音節は自然醜暢である。

石射棚

石射棚、張石城。

石鼓響或發、石騎勢欲行。

彷彿古戰場、上有愁雲生。

餓鴟嘯寒風、春若箭鏑鳴。

何人作此留山中。

鳥獸欲過膽盡驚。

疑是神禹治水時。

來教鬼射降妖精。

石射棚

石射棚、張石城。

石鼓、響、或は發し、石騎、勢、行かむと欲す。

彷彿たり古戰場、上に愁雲の生ずるあり、

餓鴟、寒風に嘯き、春として箭鏑の鳴るが若し。

何人か此を作つて山中に留め、

鳥獸過ぎむと欲して膽盡く驚く。

疑ふらくは是れ、神禹水を治むるの時、

來つて、鬼をして射つて、妖精を降さしむ。

至今風雨夕、猶聽人馬聲。

嘗聞父老言、鼓鳴則有兵。

方今瘡痍民、脫命見太平。

我願碎其鼓、際其棚。

一人安、四海清。

自此萬年無戰爭。

今に至つて、風雨の夕、猶は聽く人馬の聲。

かつて、父老の言を聞く、鼓鳴れば兵ありと。

方今瘡痍の民、命を脱して太平を見る。

われ願はくは、その鼓を碎き、その棚を墮り、

一人安く、四海清く、

これより、萬年、戰爭なからむことを。

【字解】(一) 張石城、地名であらう。(二) 餓鴟、前に數ば見ゆ、鴟は鷹。(三) 春、忽然、物を截ち刺る様な響。(四) 箭鏑、かぶら矢。(五) 妖精、妖怪の精。(六) 瘡痍、戦亂の爲に負傷した人民。(七) 脫命、幸に命を拾つた。(八) 一人、天子を云ふ。

【題義】石射棚は題下の原注に「石城山に在り、石鼓あり、世傳ふ、鼓鳴れば則ち兵ありと。又石馬あり、望めば、人の騎するが如し」とある。棚はあづち、即ち射埒の義である。

【詩意】石城山には、石射棚があるし、張石城があるし、その名さへ、すでに物物しく、石鼓は、往往にして響を發し、石騎は今にも驅け出しさうな勢をして居る。あたりは、凄寥として、さながら古戦場の如く、上には愁雲が蔽ひかかつて居るし、餓ゑた鴟が寒風に嘯くと、その聲、春然として、

かぶら矢が鳴つた様である。元來誰が、こんな奇怪なものを作つて、山中に置いたのか、鳥獸が此を過ぎむとすれば、いづれも、膽を驚かして、遠巡する。ひよつとすると、むかし、大禹が洪水を治めた時、ことさらに鬼神に命じ、射つて妖精を降さしめ、それが、その儘、残つて居るのでは無からうか。今に至るも、風雨の夜など、依然として人馬の聲を聞く様である。かつて、父老の話聞いたが、ここなる石鼓が鳴れば、兵亂があるとのこと。今しも、人民は、瘡痍を帯びた儘、からくも命拾ひをして、太平の世に逢つたばかりであるので、そんな事があつては、まことに大變。われ願はくは、謂はゆる石鼓を撃ち碎き、石壩を打崩して仕舞ひ、上、御一人も安らかに、四海も清平であつて、今後、萬年を経るも、全く戦争の無い様に致したいものである。

【餘論】前半は、形容刻劃を極めて居るが、その凄味の聊か足らぬは、畢竟、作者得意の詩境で無いからであらう。嘗聞父老言以下は、旨意の在るところ、殊に我願以下は、世の長しへに清平ならむことを囑望し、忠愛の情の自然ほの見ゆるは、まことに嬉しい。

走狗塘

走狗塘

春隄長 春草淺

春隄長く、春草淺し、

【字解】 一 春草淺 春の草が

此地吳王曾走犬。

この地、吳王、かつて犬を走らす。

獵場四面圍畫旗。

獵場四面、畫旗を圍み、

紅炬照輦還宮遲。

紅炬輦を照らして、宮に還ること遅し。

割鮮夕宴誰共食。

鮮を割いて、夕宴、誰と共に食す、

臺上妃子非樊姬。

臺上の妃子、樊姬に非ず。

春苑年來草仍綠。

春苑、年來、草仍は綠に、

韓盧已去多麋鹿。

韓盧、すでに去つて、麋鹿多し。

君不見漢皇縱狗

君見すや、漢皇、狗を縱つて殊に功あり。

殊有功。

逐兔直到烏江東。

兔を逐うて、直に到る烏江の東。

獵狗を知るか。曰く、これを知れり、と。高帝曰く、夫れ獵して獸兔を殺すを知るものは狗なり、しかも、鹿を發して獸の處を指示するものは人なり。今、諸君、徒に能く走獸を得たるのみ、功狗なり。蕭何の如きに至りては、鹿を發して指示す、功人なり」とあり、又淮陰侯列傳に「狡兔死して走狗索られ、高鳥盡きて良弓腐し、敵國破れて謀臣亡ぶ」とある。【五】烏江東 項羽の敗死せし處、その評は、前に卷一、虞美人の詩中に述べて置いた。

續に生じて、まだ十分に伸びざるを

云ふ。【二】紅炬 たいまつ。【三】

割鮮 新鮮なる肉を料理する。【四】

臺上 臺は姑蘇臺。【五】妃子 子

は唯だ燕へた言葉、西施を云ふ。

【六】樊姬 楚の莊王の夫人。莊王

の游戲を事とするを諫めむが爲に、

わざと肉を食ばなかつたといふこと

で、その評は、前に卷一、楚妃歎の詩

中に述べて置いた。【七】韓盧 獵

犬の名、説苑に「韓氏の盧は、天下の

疾狗なり、兔を見て指屬すれば失兔

なし」とある。【八】麋鹿 史記蕭

相國世家に「高帝曰く、諸君、獵を

知るか。曰く、これを知れり、と。

【題義】走狗塘は、題下の原注に「城西に在り、吳王游獵の處なり」とある。吳王は、即ち夫差である。

【詩意】頃しも春、隄は長くつづき、草はまだ十分に伸びず、ここは、吳王が獵をして犬を走らした處だといふので、今でも、走狗塘といふ名が残つて居る。むかし、吳王が獵をした時、狩り場の四面は、畫旗を押し立てて、嚴重に之を圍み、一頭だに逃がさず、やがて、夜になると、炬火に羣を照らされて、遅く宮中に歸つて來た。さて、その獲物を料理して、夕に宴を張るが、誰が御相伴をするかといふと、姑蘇臺に居る妃子、即ち西施であつて、この女は、樊姬の賢に非ざるが故に、遠慮なく肉を食べて居る。苑中の草は、年來なほ緑なれども、韓盧の如き名犬は、すでに去り、臺下には、麋鹿多きも、最早獵を爲さず、夫差、すでに死し、吳國は亡びて仕舞つたから仕方がない。その獵に就いて思ひ出すが、かの漢の高祖の如きは、自ら手を下さず、唯だ狗を縦つことが上手であつたばかりに、大功を爲し、さしもの項羽は、兎と同じく、やがて、烏江の東に追ひつめられて仕舞つたので、人君たるものは、犬を使ひさへすれば、それで善いのである。

【餘論】結末、君不見の二句は、聊か切實を缺いて居る様ではあるが、人君は、區區の田獵を事とすべきものではないといふ意を述べて、まさしく、諷諭の妙を極めて居る。

清冷閣、爲陳協律題

清冷閣、陳協律の爲に題す

臨清池、敞華閣。

清池に臨み、華閣敞たり。

明月入綺疏、微風颭羅幕。

明月、綺疏に入り、微風、羅幕を颭かす。

白波連遠洲、竹冷芙蓉愁。

白波、遠洲に連り、竹は冷かにして芙蓉愁ふ。

客聽秋聲起、魚驚星影流。

客は秋聲の起るを聽き、魚は星影の流るるに驚く。

氷絃彈罷鷓鴣雞曲。

氷絃、彈じ罷む鷓鴣の曲。

天河墮水良宵促。

天河、水に墮ちて良宵促す。

試問西園閣上游。

試みに問ふ、西園閣上の游。

何如南浦舟中宿。

南浦の舟中に宿するに何如ぞや。

【字解】【一】敞華閣、敞は、廣くてがらりとして居ること。【二】綺疏、綺麗な窓。【三】鷓鴣、鷓は吹き動かす。【四】鷓鴣曲、鷓鴣は、たうまるといつて、鷓の一種。その筋を弾つて、鷓鴣の曲とする。その評は、卷一、王明君の詩中に述べて置いた。この句の意は、鷓鴣の筋を弾つて氷と見まがふ其絃を弾じて、鷓鴣の一曲を奏し終つたといふこと。何も、鷓鴣の曲といふものがあるのではない。【五】天河、銀河。【六】墮水、西に傾いて水に接するをいふ。【七】良宵促、促は、縮る、迫るといふ意。夜の更けわたりしをいふ。

【題義】清冷閣は、前に卷四、來鴻軒の題下に注して置いたが、姑蘇志に「吳縣の綠水園は、孫老橋

東に在り、故と朱勳の別墅たり、元の至正中、廬山の陳汝秩・汝言兄弟、これを購ひ得たり。中に來
馮軒・清冷閣・羅徑等の名ありとある。すると、閣は綠水園中に在るので、陳協律は、汝秩・汝言
の孰れかであらう。この詩は、陳協律の依頼に應じて、清冷閣に題したのである。

【詩意】清らかなる池を俯瞰する清冷閣は、廣くがらりとして居るから、明月は、綺麗な窓にさしこ
み、その吹く風は、羅の幕を吹き動かして、いかにも涼しさうである。見わたせば、白波は、遠き
彼方の洲渚に連り、岸上の竹は、そよいで冷かに、池中の蓮の花は、愁を含んだ様な風情をして居る。
客は、秋聲の颯として吹き起れるを聞いて、悽然たる思に堪へず、魚は星影の流るるに驚いて、時た
ま、跳ねることがある。やがて、鷓鴣の絃を弾じて、琵琶の一曲を奏し終ると、銀河、西に斜にして、
水上に落ちむとし、折角の良宵も、いたく更けて仕舞つた。試みに陳協律に問ふが、この西園なる閣
上に遊ぶことは、南浦の舟中に獨り宿するに比して、いづれか興ありや。そは、無論、前者の方が優
れて居るといふであらう。

【餘論】起四句は閣、次の四句は、閣上より見たる光景、結四句は、琵琶を聞いたことを敍したので、
その時、その處につけ、殊に相應しきを覺える。

鳥夜村

鳥夜村

荒村鳥夜棲。忽繞月明啼。
生得東家女。身爲萬乘妻。
至今種高樹。不遣鳥飛去。
居人凡幾家。愛聽啼啞啞。
啼啞啞。勿驚怪。
婦開門。向鳥拜。

【字解】(一) 生得東家女 東家の女として生まれ得たといふ義。東家は、尋常の家といふ意味で、吾人が孔子を東家の丘と稱し
たことがある。(二) 萬乘妻 皇后。(三) 啞啞 鳥の啼く聲。

【題義】鳥夜村は、題下の原注に「崑山縣に在り、晉の穆帝何皇后の父淮、かつて此に寓す。后を産
むの夕、羣鳥あり、夜、村落を驚かす。自後、鳥あつて、徹夜鳴けば、必ず大赦あり」と記してある。
【詩意】荒れたる村落に、鳥が夜の宿りを求め、そして、月明を繞つて、騒がしく啼き立てる。その
時、東家の女として生まれた小娘は、後に穆帝の皇后となり、まことに、大した出世である。この村
では、今日に至るまで、高い木を植ゑて、鳥を引き寄せやうとし、幾軒かある居民の家では、啞啞と
呼ぶ鳥の聲を繰起の善いものとして聞きたがつて居る。鳥が一たび啞啞といつて啼くと、決して、驚

き怪むことなく、婦人どもは、門を開き、そして、鳥に向つて拜を爲して居る。
【餘論】 簡單なる傳説を詩にしたので、多少苦心の跡は認められるが、何分にも、平板の譏を免れ得ないものである。

醉贈宋卿

醉うて宋卿に贈る

勸君歸來休。

君に勸む、歸り來つて休せよ、

莫作澹蕩游。

澹蕩の游を作す莫れ。

黃雲已蔽燕國晚。

黃雲、すでに蔽ふ燕國の晚、

白露正滿梁園秋。

白露、正に滿つ梁園の秋。

千石酒萬戶侯。

千石の酒、萬戶侯。

請君論此誰當優。

請ふ君、これを論ず誰か當に優なるべき。

吳門日出花滿樓。

吳門、日、出でて花は樓に滿つ、

小婦喚客不解羞。

小婦、客を喚んで羞を解せず。

【字解】 一 澹蕩游 格別の目的なく心のどかに旅行する。 二 燕國 今の北平一帯で、むかし戰國時代の燕の地であつた。無論、元朝も、此に都して居た。 三 梁園 梁の孝王の園、孝王は、漢代の大諸侯で、客を受し、鄒陽・枚乘等が其地に居た。 四 吳門 今の蘇州。 五 綠綺琴 綠綺は琴の名、傅玄の文に「楚王に琴あり、綺梁といひ、司馬相如に綠綺あり、蔡邕に焦尾あり、皆名器なり」とある。 六 紫

衣裘 紫色の絹で裏をつけた皮裘。

君留綠綺琴。

君は留む綠綺琴、

我脫紫衣裘。

われは脱す紫衣裘。

今朝春好能飲否。

今朝春好し、能く飲むや否や、

東風吹散江南愁。

東風吹き散す江南の愁。

【題義】 卿は、相親んで云ふ稱呼。宋卿は如何なる人か分からぬが、餘論の條に述べる通り、字を仲温といつたらしい。この詩は、醉中、賦して宋卿に贈つたのである。

【詩意】 君に勸めるが、故郷に歸つて、落ち付いて居るのが第一で、氣まぐれの旅行などはせぬ方が善い。今しも、雪の黃雲は、燕地を蔽うて、天、將に暮れむとし、白露は、梁園に滿ちて、さながら秋の如く、風光慘澹、まさしく、喪亂の世界である。千石の酒を擁して、思ふさま痛飲するのと、萬戶侯に封せられて威張つて居るのと、君は、これを論じて、いづれを優れりとするか。吳門は、流石に平穩無事、相變らず、繁華の有様であつて、日は出でて花は樓に滿ち、若い女は、客を呼び、まことに人なれて居て、少しも羞らふ氣色がない。君は、綠綺琴を留めて、これを弾せらるべく、われは、紫衣裘を脱いで、起つて踊らうと思ふ。今日は、春景色も殊に宜しいが、君は、能く快飲せらるべきや否や。今しも、東風ゆるく吹いて、江南の愁を吹き散じ、勝遊を恣にするには、まことに持

つて来いといふ時節である。

【餘論】燕園梁園の景色が、秋冬の様だといふのは、元朝の末運に際し、四方の警報日に至る折からだからで、以下、吳門の冶游に足るを言うて、留飲を勧めたのである。金檀の附注に、鐵網珊瑚に、同じく高啓の作に係る醉歌贈宋仲温の一首が載せてあつて、これと互に異なる處から、参考の爲に附載するとある。その詩は、即ち左の如くである。

書足レ記ニ姓名。劍可酬ニ恩讎。少學兩不レ就。空作ニ澹蕩游。與レ君相逢在ニ東州。赤氣浮レ而非ニ凡儔。驅レ車欲レ過公子宅。苦心無レ伸涕橫流。黃雲已蔽燕園晚。白露正滿梁園秋。天高海濶無ニ處往。借問何以銷ニ煩憂。千石酒。萬戶侯。請君論レ此誰當レ優。吳門日出花滿樓。醉眠不レ須レ遣ニ客休。君留ニ綠綺琴。我脱ニ紫衣裘。今朝春好能飲否。東風吹散江南愁。因つて考ふるに、鐵網珊瑚の方が初稿で、その繁冗を汰して簡潔にしたのが、即ち前に掲載したものであらう。

潘隱君月樓歌

潘隱君の月樓の歌

樓高高月皓皓

樓は高高、月は皓皓。

容月多得月早

月を容ること多く、月を得ること早し。

【字解】皓皓 月の冴えたる貌。

【三】鳥飛 曹孟德の短歌行に、月明

朝看西墮江

朝に看る、西、江に墮つるを、

夕見東生鳥

夕に見る、東、鳥に生ずるを。

我歌鳥飛向穹昊

われ、鳥飛を歌うて、穹昊に向ふ、

樓中之人須醉倒

樓中の人、須らく醉倒すべし。

人長閒月長好

人は長く閒に、月は長く好し、

月中藥成人不老

月中、藥成つて人老いず。

【題義】潘隱君は、名字隠歴、ともに不詳。月樓は、その居室の號。この詩は、即ち其樓に寄題したのである。

【詩意】樓は高高として聳え、月は皓皓として冴え渡つて居る。樓は高きが故に、月光を容ること多く、月を見ることも早い。朝には、殘月が西に向つて江水中に落つるを見るべく、夕には初月が東に當つて鳥嶼の間から上るのが見える。月の正に明かなる時、樓中の人、天を仰いで、鳥嶼南飛といふ古詩を歌ひつつ、やがて酔ひ倒れて仕舞ふ。かくの如き逸興は、決して他には求められない。人は長しへに閒であるし、月の景色は長しへに宜しく、そして、月中の兔が仙藥を擣いて成り、それを貰つて飲むと、人は即ち不老である。

星宿、鳥嶼南飛とあるを云ふ。
【三】穹昊 二字、ともに天。
【四】月中藥成 傅玄の擬天問に、月中何所、有、白兔擣三靈藥とある。

【餘論】 潘隱君が樓上に月を得て、獨り清興を恣にする有様を想像して述べたのである。我歌三鳥飛の我は、別人ならず、矢張、樓中の人とせねば、意味が取れないと思ふ。

約諸君看范園杏花不果後偶獨游而杏已盡落惟桃數樹盛開感而有賦因寄諸君

諸君に約して、范園の杏花を看むとして、果さず、後、偶々獨游す、而かも、杏は已に盡く落ち、惟だ桃數樹盛に開く、感じて賦あり、因つて、諸君に寄す

久欲與君往。

久しく君と往かむと欲す、

那期成獨來。

那ぞ期せむや、獨來を成すを。

參差二月暮。

參差たり二月の暮、

過却杏花開。

杏花の開くを過却す。

杏花雖好今無在。

杏花、好しと雖も、今在るなし、

只有桃花笑相待。

只だ桃花の笑つて相待つあり。

杏白桃紅何淺深。

杏白桃紅、何ぞ淺深、

【字解】 參差 不揃、こま

では齟齬する、豫期と違ふ。

【三】 過却 むなしく送り盡す。

【三】 何淺深 何ぞ淺深あらむや。つ

春還不負看花心。

春は還るも、花を看るの心に負かず。

看花心君更劇。

花を看るの心、君、更に劇、

莫爲不來空歎息。

來らざるが爲に空しく歎息する莫れ、

世間萬事盡如花。

世間萬事、盡く花の如し、

著意相尋應不得。

意を著けて相尋ぬれば、應に得ざるべし。

【三】 著意 注意する。

【題義】 前に卷十に、約諸君游范園看杏花といふ七古があつて、その詩を以て諸友に約し、一處に范園に往つて杏花を賞しやうといつて居た處が、如何なる都合か、遂に約を果さず、その後、青邱は、一人で往つて見た處が、杏花は、すでに散つて仕舞ひ、ただ數樹の桃のみが眞盛りであつた。そこで、感ずるところあつて、この詩を賦し、重ねて諸君に寄せたのである。

【詩意】 久しく諸君と一處に出かける積りであつて、今日ここに獨りで來やうとは、豫期しなかつた。約束が齟齬して、愚圖愚圖して居る内に、二月も暮れて、杏花の盛りを空しく送り過して仕舞つた。杏花は、好いといつた處で、すでに散つて、今残つて居ないから、詮方ないので、跡には、桃花の笑つて客を待つのがあるばかり。杏花の白きも、桃の花の赤きも、花の匂に淺深ある譯ではなく、ここに春の還らむとするに際し、花を看るの心に負かず、折から眞盛りに咲いて居て呉れたのは、まこと

に善かつた。元來、花を看むとする心は、諸君の方が予よりも更に劇しいが、ここに來なかつたといつて、歎息するには及ばない。世間の萬事は、すべて、花の如く、注意して尋ねやうとすると、却つて、得られずに終るものである。

【餘論】杏白桃紅の二句は、花を愛する情思を道ひ得て、聊か面白いが、その他は、概して平淺である。

番人移帳圖

番人移帳の圖

懸爾弧韜我弓。

爾の弧を懸けよ、わが弓を韜まむ。

拔帳何徒榆林東。

帳を抜いて、何にか徒る、榆林の東。

顧語勿驅日暮中野。

顧みて語る、驅る勿れ、日は中野に暮る。

兒未十歲不能騎馬。

兒、未だ十歲ならず、馬に騎する能はず。

【字解】

【一】懸爾氣 氣も弓も同じもの、懸は弦を張つた儘、肩にかける。【二】韜我弓 韜は、囊、即ち弓袋に入れる。【三】榆林 一統志に「榆林は、漢の五原郡、唐の榆林、今、陝西の都司に隸し、地は河套に處み、朔北の要圖」とある。【四】勿驅 驅は奔走する。【五】兒未十歲、不能騎馬 高適の涼州詞に胡兒十歲能騎馬とある。

【題義】

番人は匈奴、もとより、未開の種族であるから、テントを張り、水草を追うて轉移するので、

この詩は、そのテントを移す處の有様を畫いた圖に題したのである。

【詩意】弓の始末をするに就いて、汝のは肩に懸けよ、自分の弓袋に入れて置かう。ここにテントを引き拂うて何處に往くかといへば、落ち付く先は、榆林の東である。顧みて、從僕に向つて云ふには、日が野中に暮るるとも、決して、疾驅してはならぬ。愛する小供は、まだ十歲にも成らず、從つて、馬に乗ることが出來ないので、覺束なくも、とぼとぼと歩むのであるから、あまり急ぐと、置いてきばりに成る虞があるからである。

【餘論】これは、畫外の趣を道破したので、その點だけは、題畫の精神に協つて居る。

夜聞謝太史誦李杜詩

夜、謝太史が李杜の詩を誦するを聞く

前歌蜀道難

前には歌ふ蜀道難

後歌偏仄行

後には歌ふ偏仄行

商聲激烈出破屋

商聲激烈、破屋を出で、

林鳥夜起鄰人驚

林鳥、夜、起つて、鄰人驚く。

我愁寂寞正欲眠

われ寂寞を愁へて、正に眠らむと欲す、

【字解】【一】蜀道難 李白の作に係る。【二】偏仄行 杜甫の作に係る。【三】商聲 五音の中で、商聲は秋に應じ、殊に悲愴なものとして知られて居る。【四】鄰人 四鄰の人人。【五】高歌隔舍 鄰れる構の中で謝太史が高歌する。【六】李

聽此起坐心茫然。これを聴いて起坐、心茫然。

高歌隔舍如相和。高歌、舍を隔てて、相和するが如く、

雙淚迸落青燈前。雙淚、迸つて落つ青燈の前。

李供奉杜拾遺。李供奉、杜拾遺、

當時流落俱堪悲。當時流落、ともに悲むに堪へたり。

嚴公欲殺力士怒。嚴公は殺さむと欲し、力士は怒る、

白首江海長憂飢。白首江海長く飢を憂ふ。

二子高才且如此。二子の高才、且つ此の如し、

君今與我將何爲。君、今、我と將に何をか爲さむとする。

の三たび、左右、その母に白し、奔つて之を救うて止むを得たり」とある。【九】力士怒 前に卷十、風塵二逸圖の詩中にも引いて置いたが、李翰林別集の序に「高力士、靴を脱せしを以て深恥となす。異日、太真、重いて清平調の詞を吟するや、力士曰く、飛燕を以て、妃子を指す、これを賤むこと甚し」と。太真、深く之を然りとす。上、かつて三たび李白に官を命ぜむと欲す、卒に宮中に擯がれて止む」とある。

【題義】 謝太史は謝徽、その略傳は、前に卷七、酬三謝翰林留別の題下に詳述して置いた。この詩

は、青邱が謝徽と共に、元史の編修に與り、天界寺に寄寓して居た頃、各、異なる一構に住し、夜、謝徽が李杜の古詩を朗誦するのを聞いて作つたのである。

【詩意】 はじめには李白の蜀道難を歌ひ、あとでは杜甫の偏仄行を歌ひ、商聲は、悲憤激烈にして、破屋より出で、林に宿る鳥も、夜、俄に起ち、鄰人も何事かと思つて驚く位。予は、寂寞に堪へずして、丁度、眠に就かうとする折しも、これを聞くと、蹶然として起坐し、心茫然たるばかり。それは謝君が歌ふので、高らかなる其聲は、別に離れた一構の中に在つて、わが意思と相和するが如く、覺えず、雙行の涙が、迸つて、青燈の前に落ちた。李白といひ、杜甫といひ、その當時、流落して、すこしも落ち付かず、その運命の果敢なきは、ともに悲歎すべきばかり。嚴武は、甫の無禮を怒つて之を殺さうとし、高力士は、白に靴を脱せられたことを怨んで、楊貴妃に焚き付け、やがて、李杜の二人、白髮頭になるまで、江海を経めぐり、碌碌食事もせず、長しへに、飢餓を憂へて居た。二人の高才を以てして、なほ此の如く、今しも、君と我とは、どうしたら善からうかと思ひ惑ふばかりである。

【餘論】 はじめは、歌聲の悲しきをいひ、次に李杜二人を提起して、その坎坷不遇の極めて相似たるを云ひ、暗に爾我二人を以て之に比したので、感慨長しへに盡きず、後に、高謝二人が一處に翰林の職を辭したのも、偶然では無からうと頷かれる。

供奉。李白は、玄宗の朝に、翰林供奉であつた。【七】杜拾遺。杜甫は、安祿山の亂に賊中に陥つたが、やつとの事で、長安より逃げ出し、靈武に至つて肅宗に謁し、仍つて、左拾遺を授けられた。拾遺は、天子の過失を見付けては諫言する役、後の諫議大夫である。【八】嚴公欲殺。唐書、杜甫傳に「嚴武、世舊を以て甫を待つ。甫、これを見て、或時は巾せず。かつて、醉うて武の牀に登り、嚴視して曰く、嚴挺之、乃ち此兒あり」と。武、これを銜み、一日、甫を殺さむと欲す。冠、簾に鉤するも

贈金華隱者

金華隱者に贈る

我聞名山洞府三

われ聞く名山洞府三十六、

十六。

一一靈蹤紀真錄

一一、靈蹤、真錄に紀す。

金華秀出向東南

金華秀出して東南に向ひ、

遠勝陽明與句曲

遠く勝る陽明と句曲と。

樓臺縹緲開煙霞

樓臺縹緲として煙霞を開き、

天帝賜與神仙家

天帝賜與す神仙の家。

靈源有路不可入

靈源、路あり、入るべからず、

但見幾片流出雲

但だ見る、幾片流し出す雲中の花。

中花

子房之師赤松子

子房の師、赤松子、

三千年前亦居此

三千年前、亦た此に居る。

【字解】(一) 名山洞府 天下の

名山で、仙人の居る處。(二) 靈蹤

不思議なる仙跡。(三) 真錄 仙家

の記録、李白の詩に爲我草真錄と

ある。(四) 金華 山の名、浙江金

華縣北に在つて、一名長山、亦た常

山に作る。元和郡縣志に「長山は、

赤松子、道を得るの處。山中諸溪匯

流、その下、兩巖對峙、その上に登

れば、城郭深濬、宛として目前に在

り」と記してある。(五) 陽明 本

敬輿山白玉上經に「第十洞、會稽山、

陽明洞天と名づく」とある。(六) 句曲 洞天福地記に「第八句曲山の

洞、名づけて金壇華陽の天といふ、

茅君の理むるところ、潤州句容縣界

に在り」と見ゆ。(七) 靈源 仙源

に同じ。(八) 子房之師赤松子 子

飛行恍惚誰解尋

飛行恍惚、誰か尋ぬるを解せむ、

漫說至今猶不死

漫に説く、今に至つて、猶ほ死せずと。

松花酒熟何處游

松花酒熟して、何の處にか遊ぶ、

瑤草自綠春巖幽

瑤草自ら綠にして春巖幽なり。

羣羊臥地散如石

羣羊、地に臥し、散じて石の如く、

老鹿耕田馴似牛

老鹿、田を耕し、馴れて牛に似たり。

聞有隱君子

聞く隱君子ありと、

乃是學仙者

乃ち是れ仙を學ぶもの。

自從入山中

山中に入つてより、

不曾到山下

かつて山下に到らず。

世人莫知其姓名

世人、その姓名を知るなし、

以山呼之不敢輕

山を以て之を呼び、敢て輕んぜず。

樵夫忽見苦未識

樵夫忽ち見て、苦に未だ識らず、

房は張良の字、史記留侯世家に「今

三寸の舌を以て帝者の師となり、萬

戸に封ぜられ、列侯に位す。これ布

衣の極、良に於て足れり。願はくは、

人間の事を棄て、赤松子に従つて遊

ばむと。乃ち辟穀道引輕身を學ぶ」

とあつて、その素隱に「赤松子は、

神農の時の雨師、能く火に入つて自

ら燒く、崑崙山上、風雨に隨つて上

下するなり」とある。(九) 三千年

前亦居此 金華山中には、赤松子の

遺跡が多く、一統志に「金華山に赤

松溪、赤松觀、赤松洞あり」と記し

てある。(一〇) 瑤草 珍らしい草。

(一一) 老鹿耕田 浙江通志に「鹿田山

は、金華縣北二十五里に在り、上に

沃野あり、耕すべし」とある。鹿田

の名に因んで、この句を作つたもの

と見える。(一二) 黃初平 はじめ羊

只疑便是黃初平。只だ疑ふ、便ち是れ黃初平。

嗟我胡爲在塵網。嗟、われ胡すれぞ塵網に在る、

遠望高峰若天壤。遠く高峰を望めば、天壤の若し。

茯苓夜煮倘許餐。茯苓、夜煮て、もし餐するを許さば、

鐵杖來敲石門響。鐵杖、來つて石門を敲いて響かむ。

州清江縣長秋山に女子あり、井を汲んで、茯苓を得、蒸して之を食ひ、仙し去る。主簿王、その遺を食ひ、亦た仙し去る」とある。

【題義】一統志に「金華洞は、府城の北に在り、即ち道書第三十六金華洞元の天」とある。金華隱者は、その山中に棲んで居る隱士であるが、その本名は、不詳である。

【詩意】聞くところに據れば、天下の名山で仙人の住んで居る洞のある處は、凡そ三十六、いづれも、不思議な靈跡であることは、一一詳細に仙家の記録に残つて居る。金華といふ山は、東南方、浙江に在つて秀出し、その巖壑の靈異なることは、陽明句曲にも勝つて居る。樓臺は縹緲、煙霞を開いて出直し、ひと目見ても、この世ならぬ景色で、取りも直さず、天帝より神仙の家に賜はつたものである。仙源に通ずる路はあれども、容易に入るを得ず、唯だ雲中の花の幾片が、溪水に随つて流れ出るのを

を牧して金華山中に居たが、その後、仙人に遇つて、その術を受けたといふことで、その詳は、前に卷八煮石山房の詩中に注して置いた。【三】若天壤。その遠く隔絶せるを云ふ。【四】茯苓夜煮。茯苓は、松の根に生する一種の菌類、補血の藥になるので、前に屢ば見ゆ。夷堅叢志に「耶

見て、その方向を知る位である。かの張良の師たる赤松子は、三千年前、矢張、ここに住んで居たが、飛行自在、その跡は恍惚として、尋ねることが出來ず、今に至るも、猶ほ死せず居るといふ噂であるが、あまり、あてには成らず、松花の酒熟するとき、何處に遊んで居るか知らぬが、瑤草自ら縁にして、巖谷は春も猶ほ幽邃で、その影だに見えない。あたりには、羶羊地に臥して、その形、石の如く、老鹿は田を耕し、その善く馴れたことは、丁度、牛の様である。ここに、一人の隱君子があるが、即ち仙術を學ぶ人であつて、一たび山に入りし後は、かつて山下に出て來ないから、従つて、その姓名を知る由なく、山に因んで金華隱者といつて居るのは、決して之を輕んじた譯ではない。樵夫どもは、ふと見かけることがあるが、まだ其顔を篤と識別することが出來ないので、これは、むかし黄初平かも知れないといつて居る。顧みれば、予は、何故に、浮世の塵網に引ツかかつて居るのか、遠く金華の高峰を望めば、その相隔つこと、管に天壤のみならず、なかなか、その處に往くことも出來ぬが、もし隱者が、夜、茯苓を煮て、その御相伴を許されるならば、鐵の杖に縋つて行き、石門を敲いて、ほとほと音なはうと思つて居る。

【餘論】起筆、まことに堂堂として力がある。そして、徐に金華に緻到し、はじめに、その地が赤松子の遺跡たるを云ひ、然る後、刻下、隱者の此に棲めることに及び、これに従つて、おのれも仙を學びたいといふ意を以て收束したので、通篇、些の塵俗の氣を帯びず、一語、人をして塵界を脱離した

様な想あらしめる。

春初來

春初めて來る

春初來

春、初めて來る、

柳條欲舒花未開

柳條、舒びむと欲して、花、未だ開かず。

曉日窓前鳥聲喜

曉日窓前、鳥聲喜ぶ、

似報春來喚人起

春の來るを報じて、人を喚んで起たしむるに似たり。

東風吹暖入煙痕

東風、暖を吹いて、煙痕に入り、

綠遍江南幾千里

綠は遍し江南幾千里。

去年春去憶愁人

去年、春去つて愁人を憶ふ、

倏忽今年又見春

倏忽、今年、又春を見る。

但欲逢春醉杯酒

但だ春に逢うて杯酒に醉はむと欲す、

不管相思成白首

管せず、相思の白首を成すを。

【字解】(一) 柳條 柳の枝。

(二) 煙痕 煙かと思はれる痕。

(三) 不管 かまはぬ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 春は初めて來り、柳の枝は舒びむとして居るが、花は未だ咲き出でず、朝日の映る窓の前に、鳥の聲喜ばしげに聞こえ、春の來れるを報じて、眠より人を呼び起さうとして居る。ぬるき春風は、草の芽を萌え出さしめて、煙の痕かと疑ふばかり、江南幾千里の遠きに亙つて、一望、青青として居る。去年、春行く頃、相隔てて愁に沈める我が友を憶つたが、忽ちにして、今年も又春景色を見る頃となつた。今は唯だ春に逢へるを幸ひ、ともに杯酒に酔はうと欲するので、相思の極、いくら白髪が生えても、かまはない。

【餘論】 詞筆、極めて清便、且つ餘情もあるが、要するに、陳套の想を反覆するに過ぎぬ。

題黃大癡天池石壁圖

黃大癡天池石壁の圖に題す

黃大癡

黃大癡、

滑稽玩世人不知

滑稽、世を玩んで人知らず。

疑似阿母傍

疑ふらくは、阿母の傍、

再謫偷桃兒

再び偷桃の兒を謫するに似たり。

【字解】(一) 黃大癡 元代著名

の畫家、その略傳は、題義の項で述べる。(二) 阿母 西王母。(三)

偷桃兒 東方朔を指す。漢武故事に「東都、短人を獻す。東方朔を召して至らしむ。短人曰く、西王母、桃

平生好飲復好畫。平生、飲を好み、復た畫を好む、
醉後灑墨秋淋漓。醉後、墨を灑いで秋淋漓。
嘗爲弟子李少翁。かつて、弟子李少翁の爲に、
貌得華山絕頂之。華山絶頂の天池を貌し得たり。

天池

乃知別有縮地術。乃ち知る、別に縮地の術あるを、
坐移勝景來書帷。坐に、勝景を移して書帷に來らしむ。
身騎黃鶴去未遠。身は黃鶴に騎し、去つて未だ遠からず、
縞素飄落流塵縞。縞素飄落、塵縞を流る。
穎川公子欣得之。穎川の公子、これを得たるを欣び、
手持示我請賦詩。手に持し、我に示して詩を賦せむこと
我聞此中可度難。われ聞く、この中、度るべきこと難し、
玉枕祕記傳自青。玉枕の祕記は、青牛の師より傳ふ。

を種ふ、三千年にして一たび花を開き、三千年にして一たび子を結ぶ、この兒、不良、すでに三過これを偷む」とある。【三】灑墨を飛ばして畫を作る。【四】李少翁、仙人の名、漢の武帝に勤め、反魂香を焚いて、李夫人の亡魂を招いた。前に卷一、李夫人歌の詩中に詳述して置いた。【五】華山、この華山は、西嶽ではなく、吳地に在る同名の山、その頂に大きな池があつて、これを天池と稱する。【六】縮地、神仙傳に「費長房、壺公に遇ふ、神術あり、能く地脈を縮む、千里遶まつて目前に在り、これを放てば復た舊の如し」とある。【七】來書帷、書帷の戸ばりの處に來る。【八】黃鶴、前に屢ば見ゆ、羽の力が強くて、一擧千里と稱せられて居る。【九】縞素、縞

牛師

池生碧蓮花。池に碧蓮花を生じ、
千葉光陸離。千葉光陸離。
服食可騰化。服食すれば、騰化すべく、
游空駕雲螭。空に游んで雲螭に駕す。
奈何靈蹟久闕藏。奈何ぞ、靈蹟、久しく闕藏、
荒竹滿野啼猩猩。荒竹、野に滿ちて、猩猩を啼かしむ。
尋眞羽客不肯一。眞を尋ぬるの羽客、肯て一たびも相顧
相顧。みす、

却借釋子營茅茨。却つて、釋子に借して茅茨を營ましむ。
我昔來游早春時。われ、昔、來り游ぶ早春の時、
雪殘衆壑銷寒姿。雪は殘して、衆壑、寒姿を銷す。
磴滑不敢騎馬上。磴は滑かにして、敢て馬に騎して上らず、

縞をいふ、杜甫の曹將軍畫馬圖引に「縞素漢漢開風沙」とある。【二】縞素、縞に同じ、縞は黒色、黒色の塵埃。【三】穎川公子、温陵の陳彦廉を指す、その人、名字不詳、なほ題詞の項を見よ。【四】可度難、ここを通過することが困難である。【五】玉枕祕記、枕中記を云ふ。【六】青牛師、老子を云ふ、列異傳に「老子西游。關令尹喜、紫氣あつて、關に浮ぶを望み見る、而して、老子、果して青牛に乗じて過ぐ」とある。今、陝西華陰縣東華嶽廟中に青牛樹があつて、老子が青牛を繫いだ處と稱して居る。【七】碧蓮花、白蓮、白の純粋なるものを碧といふ。【八】千葉、花瓣厚く重なり合ふを云ふ。【九】騰化、昇天して羽化する。【十】雲螭、螭は龍の屬。【十一】闕、

青鞵自策桃笻枝。

青鞵、自ら策す桃笻枝。

上有煙蘿披拂之。

上には煙蘿披拂の翠壁あり、

翠壁。

下有沙石蕩漾之。

下には沙石蕩漾の清漪あり。

清漪。

晴天倒影落明鏡。

晴天、影を倒して、明鏡に落ち、

正如玉女曉沐高。

正に、玉女曉に沐して、高鬢垂るる

鬢垂。

飲猿忽下藤裊裊。

飲猿、忽ち下つて藤裊裊、

浴鶴乍立風嘶嘶。

浴鶴、乍ち立つて風嘶嘶たり。

匡廬有池我未到。

匡廬、池あり、われ未だ到らず、

未省與此誰當奇。

未だ省みず、此と誰か當に奇とすべき。

掃石坐其涯。

石を掃うて其涯に坐し、

藏。閉され藏する。【三】 翠壁。翠壁とたぬき。【四】 尋眞。眞は仙人。【五】 知信。この信は貸す、つまり自動にも他動にも用ふる。

【六】 椰子。佛徒、坊主。【七】 茅茨。かや葺の庵室。【八】 磴滑。石段が滑り易い。【九】 青鞵。鞵は足袋。【一〇】 桃笻枝。蜀都賦に靈壽桃枝とあつて、その注に「竹の屬、杖となすべし」とある。杜甫に桃竹杖引といふ詩があるが、桃笻は即ち桃竹であらう。【一一】 披拂。ひらき拂ふ。【一二】 翠壁。翠色の絶壁。【一三】 清漪。漪は漣波。【一四】 嘶嘶。寒冷の貌。【一五】 匡廬。即ち廬山、むかし、匡氏の兄弟が住んで居た故に云ふ。【一六】 未省。未だ知らずといふに同じ。【一七】 誰當奇。どちらが奇絶であるかといふ意。【一八】 接羅。

沿洄引流卮。沿洄して流卮を引く。

醉來自照影。

酔ひ來つて、自ら影を照らし、

俯笑知爲誰。

俯して笑ふ、知る誰が爲めぞ。

落梅撲香滿接羅。

落梅、香を撲つて、接羅に滿ち、

暮出東澗鐘鳴遲。

暮に東澗を出でて、鐘鳴ること遅し。

歸來城郭中。

歸り來る、城郭の中、

復受塵土欺。

復た塵土の欺くを受く。

十年勝賞難再得。

十年、勝賞、再び得難く、

恍若清夢一斷無。

恍として、清夢一斷、追ふに由なきか

由追。

若し。

朝來觀此圖。

朝來、この圖を觀、

惻愴使我悲。

惻愴、われをして悲ましむ。

當時同游已少在。

當時の同游、已に在ること少く、

晉書に「山簡、襄陽に鎮す、童兒歌うて曰く、時時能騎馬、倒著白接羅」とある。接羅は白帽。羅、一に羅に作る。【一五】 塵土欺。欺は壓倒される。【一六】 形先瘦。形容枯槁の意。【一七】 接羅。紛雜の貌。【一八】 不建。不建でないこと。【一九】 漢南。巴老司馬樹。晉書桓溫傳に「温、江陵より北伐し、行いて金城を經、少にして那那たりし時に、種ましところの柳を見る、皆すでに十圍、慨然として曰く、木、猶ほ此の如し、人、何を以てか堪へむと。枝を攀ぢ、條を執り、法然として流涕す」とある。【二〇】 峴首。巴仆羊公碑。元和郡縣志に「峴山は、襄州襄陽縣の東南九里に在り、東、漢水に臨み、古今の大路なり」とあり、水經注に「峴山、羊祜の襄陽を鎮するや、鄒潤甫と嘗て之に登

我今未老形先疲。われ、今、未だ老いず、形、先づ疲る。
 人生擾擾嗟何爲。人生擾擾、嗟、何をか爲さむ、
 不達但爲高人嗤。達せざれば、但だ高人に嗤はる。
 漢南既老司馬樹。漢南、すでに老ゆ司馬の樹、
 峴首已仆羊公碑。峴首、すでに仆る羊公の碑、
 惟應學道悟眞訣。惟だ當に道を學んで、眞訣を悟るべく、
 不與陵谷同遷移。陵谷と同じく遷移せず。
 仙巖洞府孰最好。仙巖洞府、孰れか最も好き、
 東有地肺西峨嵋。東に地肺あり、西に峨嵋、
 高崖鐵鎖不可攀。高崖の鐵鎖、攀援して以て徑に上るべ
 援以徑上。からず、
 仰望白雲樓觀空。仰望すれば、白雲樓觀、むなしく峩巍。
 峩巍。

る。嵒の巖後に及び、後人、碑を故處に立つ、望むもの悲感す、杜元凱、これを墮淚碑といふとある。峴首は、即ち峴山の頭。【四三】學道、仙道を學ぶ。【四四】眞訣、眞正の秘訣。【四五】地肺、南徐州記に「茅山、内に靈府洞室七重九原あり、四方に交通す、外に五穴あり、南に二穴、東西北に各一穴、謂はゆる金陵地肺なり」とある。【四六】峨嵋、山名、輿地志に「眉州城南に在り、峴山より來り、連岡疊嶂、延袤三百餘里、こゝに至りて、三峰を突起す、その二峰對峙、宛として峨眉の若し」とある。【四七】鐵鎖、杜甫の詩に、鐵鎖高崖不可攀、致身福地何蕭爽とある。【四八】太乙舟、太乙の仙人が蓬萊の舟に乗つて來り香なうたといふことで、前に卷十、明月舟の詩中に劉向別傳を引

此山易上何乃遺。この山、上り易く、何ぞ乃ち遺す、
 便與猿鶴秋相期。便ち猿鶴と秋相期す。
 欲借太乙舟。借らむと欲す太乙の舟、
 夜臥浩蕩隨風吹。夜、浩蕩に臥して、風の吹くに隨ふ。
 洞簫呼起千古月。洞簫、呼び起す千古の月、
 照我白髮涼絲絲。わが白髮を照らして涼絲絲。
 傾玉醪薦瑤芝。玉醪を傾け、瑤芝を薦む。勿れ、
 招君來游慎勿辭。君を招いて來游せしむ、慎んで辭する、
 無爲漫對圖畫日。漫に圖畫に對して、日夕遙に相思ふこと
 夕遙相思。を爲す無かれ。

いて評述して置いた、なほ劉因の詩に高亭雲錦鏡三清流、便是吾家太乙舟とある。【四九】浩蕩、水波の廣闊なるを云ふ。【五〇】洞簫、尺八の類。【五一】瑤芝、瑤芝は靈芝。

【題義】圖繪寶鑑に「黃公望、字は子久、峰と號す、別號大癡、浙江衢州の人。生まれて神童、三教に通ず、山水を善くす。富春に居て、江山釣灘の概を領略す。後、常熟に居り、虞山朝暮の變幻、四時陰霽の氣運を探閱し、心に得て筆に形はす、故に畫くところの千邱萬壑、愈よ出でて愈よ奇、重

巒巒、越よ深く越よ妙、その設色淺絳なるもの多く、青綠水墨のもの少し。董源を師とすと雖も、
 實は藍より出づ。元の四大家、首に推重す」とあつて、古今に卓絶した山水畫家である。天池は、處
 處に在るが、ここのは吳地の華山、池の周圍は、斷崖峭立する故に、天池石壁といつたので、黃大
 癡は、實際、ここに登つて寫生をしたのである。なほ、この圖の來歴價値に就いては、覺藻集に載す
 る小引に詳しく、それには「吳の華山に天池石壁あり。老子枕中記に云ふ、その池、度るべきこと難
 し」と。蓋し、古しへの靈壤なり。元の泰定間、大癡黃先生、遊んで之を愛し、爲に四五本を圖す。
 而して、池の名、益す著はる。これは、その弟子李可道の爲に畫くところ、尤も得意の者なり。溫陵
 の陳彦廉、これを得、余に詩を其上に賦せむことを求む。或は云ふ、これは廬山天池の景なり」と。余、
 未だ以て辨するあらず、然れども、舊と別本を見るに、張貞居、これに題し、首句に云ふ、嘗讀枕中
 記一と。すなはち、以て華山の池となす。前輩言ふ、貞居、大癡と數ば同じく此に遊ぶと。すなはち、
 その言、信、微すべく、初め必ずしも此を舍てて彼を取らざるなり。因つて、爲に長歌を賦し、吾が
 郷の山水を張り、香爐九老と高きを争はしめむと欲すと云ふ」とある。

【詩意】黃大癡が其性滑稽にして、この世を茶化したことは、絶えて知る人なく、たとへば、西王母
 の傍に在つて、桃を偷んだ爲に、兩度まで、人間に降譴された彼の東方朔に似て居ると思ふ。大癡
 は平生酒を飲むことを好み、又畫をかくことを好み、醉後に墨を灑いで、山水を畫くと、秋に當つて、

墨痕の淋漓たるを覺ゆるばかり。ある時、同姓の因で、李少翁とでも云ひさうな、弟子の李可道の爲
 に、華山の絶頂なる天池の景色を畫いたことがあるが、別に壺公の如き縮地の術があつて、坐ながら、
 その勝景を移して、書齋の帷帳に來らしめた様である。大癡は、その後、黃鶴に乗じて此世を去り、
 その死は、未だ久しきを経ざれども、縑に畫いた折角の名畫は、數ば其主を易へて飄落し、黒い塵埃
 を溶びて煙つて居たのを、潁川の貴公子、陳彦廉といふ人が掘り出して、喜悅、斜ならず、それを手
 づから持つて來て予に示し、爲に題詩を作らむことを請うた。聞くところに據れば、天池に往く路は、
 なかなか險阻で、その事は、枕中記に見え、それは、老子から傳はつたものだといふことで、その世
 に知られて居たのは、随分古いやうである。天池の中には、白い蓮花を生じ、しかも、その花は八重
 で、光彩陸離、これを服食すれば、容易に風骨を換へ、羽化して登仙し、螭龍に跨つて虚空を遊びま
 はることが出来る。しかし、かくの如き靈蹟が、久しい間湮滅し、紛亂したる叢竹が野を蔽うて、あ
 たりは猩猩だの狸だのが啼き叫んで、いたく荒廢したのは、どうした譯か、まことに殘念な話。そこ
 で、仙人を尋ねる羽客輩も、決して、一たびも相顧みず、却つて、その地域を坊主どもに貸したから、
 かや葺の庵室を建てた位。さきに、予が其地に遊んだのは、早春の時であつて、雪は消えて無くなつ
 て居たが、隨處の深谷は、ぼんやり曇つて、寒げなる我が影を銷し、石段は滑つて、あぶないから、馬
 に乗つて、登ることも出來ず、仕方がないから、青色の足袋を穿ち、桃竹の杖に縋つて、覺束なくも、

歩んで往つた。やがて、その處に到達し、仰ぎ見れば、上には、煙にまがふ葛かづらの類が披拂して居る翠色の絶壁があるし、俯瞰すれば、下には、沙石が濼はされて動いて居る漣波の池がある。折しも、天は晴れ、萬峰の倒影は、明鏡の如き池面に浮んで居て、丁度、玉女が朝に髪を洗つて、高い巖をほどいて居る様であつた。水を飲みに来る猿は、鼻鼻たる藤蔓につかまつて岸の邊に下るし、ここに浴して翅を洗つて居る鶴は、漸漸として稍や寒げなる天風に面して立つて居る。廬山にも、矢張、この種類の池があると云ふが、予は、まだ往つて見たことがないから、いづれを奇絶とすべきか、その邊の事は、とんと分らない。それから、石を掃うて水涯に坐し、水に沿うて遊び廻つて、流した盃を受けなどし、酔つた揚句に、自ら影をうつして見ると、誰かといひたい位、まるで別人の如きを笑はずには居られなかつた。兎角する中、梅花を吹き落す夕風は、香氣を送つて、わが帽に満ち、日暮に東澗を出ると、はじめて、鐘の鳴るのが聞こえ、人里の最早遠からぬことが分かつて、やつと安心した。蘇州城郭の中に歸ると、又ぞろ、塵土に壓倒せられ、十年の長きに互つて、かくの如き勝賞は、もう一度やつて見ることが出来ず、恍然として、清夢一たび覺めし後は、跡を追ひかけることが出来ぬと同じである。ここに、清晨に坐して、この圖を觀ると、愴然として、悲哀の情に堪へ兼ねるので、當時一處に游んだ連中で、生存するものは、すでに少く、予は、未だ老いざれども、第一に形容枯槁して、見すばらしく成つて仕舞つた。人生の擾擾たるは、今さら詮なく、瀾達に振舞は

ぬと、高人に笑はれる。漢南の柳樹は、十かかへの大ききとなつて、これを種ゑた桓司馬をして慨然たらしめ、岷山の頭に立てた羊祜の碑は、倒れた儘、起しもせず、今は其人の功德を記憶する人もない位。されば、仙道を學んで、真正の秘訣を悟るべく、さうすれば、吾のみ長生して、陵谷と共に遷移することもない筈である。そこで、道を學ぶ仙巖洞府は、どこが善からうかといふと、東には、金陵の地肺と稱する茅山があるし、西には、蜀中第一の名山で、一萬尺以上の高さを有する峨嵋もある。しかし、兩處とも、高い懸崖に鐵の鎖がぶら下つて居るから、これに絶つて、一氣に上ることは、なかなか六つかしく、仰げば、白雲に聳ゆる樓觀の巍峩として、即くべからざるを望むだけである。然るに、天池石壁の附近、さばかり路も困難ではなく、極めて登り易いのは、除却する譯には行かず、秋、猿鶴と共に期して、ここに會合するのは、甚だ宜しい。かくて、太乙の仙人の乗れる蓮葉の舟を借り、夜、浩蕩たる水波の上に臥して、風の吹くに任せ、どつちへ流されてもかまはず、洞簫を吹いて、終古依然たる明月を呼び起し、そして、絲絲涼しげなる我が白髪を照らさせたならば、定めて愉快であらう。はては、玉醪を傾け、靈芝を食し、追追長生不死の準備をする。その時、君を招いて、是非、御來遊あれと申し送つたならば、君は、注意して、否まぬが善いので、漫然、この畫に對し、日夜、はるかに、相思の情を動かして居ても、何の効果もないことであらう。

【餘論】起首より手持示我請賦詩に至るまでは、天池石壁圖の由來を記し、我聞此中可度難より却

借三釋子一營三茅茨一に至るまでは、靈蹟の次第に渾晦に歸せしことを嗟し、我昔來游早春時より恍若三清夢一斷無一由レ追に至るまでは、おのが前年の勝游を敘し、これに因つて、その勝景を審にし、晝と相俟ち、覽者をして、なる程と思はしめた處は、極めて巧妙である。朝來觀三此圖一より不與三陵谷一 同遷移一に至るまでは、浮生の事、待むに足らざるより、學道の一事に繼到し、仙巖洞府孰最好より結末に至るまでは、再び本題に歸つて、天池の最も其所を得たるを言うて、どうか、再び其地に行きたい、その時は君を招くから是非來いといつて、前に願應したのである。この詩は、情語景語、相錯はり、長句短句、相接し、まさしく、技巧の妙を極めて居る。

書夢中

夢中を書す

夢行塞下沙。

夢に行く塞下の沙、

無水無兼葭。

水なく、兼葭なし。

牧羊人歸霜草短。

羊を牧するの人は歸つて、霜草短く、

平地雁羣棲不暖。

平地雁羣つて、棲、暖かならず。

騎馬茫茫入遠煙。

馬に騎して、茫茫、遠煙に入る、

【字解】 一 塞下沙 城塞の近くに在る沙漠。
 二 兼葭 よしの類、詩經に兼葭蒼蒼、白露爲霜とある。

一行衝起上秋天。 一行衝起して、秋天に上る。
 我夢驚回雁飛去。 わが夢は驚回し、雁は飛び去る、
 角聲吹斷江城曙。 角聲吹き斷つ江城の曙。

【一】 驚回 驚いて醒める。
 【二】 角聲 角は喇叭の形をした樂器で、首として軍中に用ふる。

【題義】 夢中に見たことを敘述したのである。

【詩意】 夢に邊塞の下なる沙漠に行つたが、その附近一帶、水もなく、兼葭もなく、荒涼満目、羊を牧する人も歸つて仕舞ひ、霜を帯びた秋草は短く、雁は平地に下りて宿つて居るが、これでは、如何にも寒さうである。その時、われは、馬に跨つて、茫茫たる遠煙の中に驅け入ると、一行の雁が俄に起つて、秋天に上つた。その音に驚いて、わが夢は醒め、雁は何處かへ消えて無くなり、角聲はじめて吹き断え、江城には、ほのぼのと曙色を生じた。

【餘論】 もとより珍らしい夢でもなく、従つて、これを詩にして見た處で、さして奇警でも無い様である。

媯蜚子歌

媯蜚子の歌

媯蜚子

媯蜚子

長短句體 書夢中 媯蜚子歌

乃是軒轅之裔虞鱓之孫。
混沌既死一萬年。
獨抱大樸存。
竊伏在草野冥心究皇墳。
蚤逢三光五嶽之氣乍分裂。

乃ち是れ軒轅の裔、虞鱓の子。
混沌、すでに死して一萬年、
ひとり大樸を抱いて存す。
竊に伏して草野に在り、冥心、皇墳を究む。
蚤く逢ふ三光五嶽の氣、乍ち分裂するに、

天狼下地舐血流渾渾。
鹿走秦中原蛇鬪鄭國門。
俎豆棄草莽干戈歟崩奔。
媯媯子便欲東游渡弱水。
沐髮滄海朝陽盆。
又欲西行泝河漢踰崑崙。
山橫川阻兩地俱不可以

天狼地に下り、血を舐めて流渾渾たり。
鹿は走る秦の中原、蛇は鬪ふ鄭の國門。
俎豆は草莽に棄てられ、干戈、歟ち崩奔。
媯媯子、便ち東游して弱水を渡り、
髮を滄海の朝陽盆に沐せむと欲す。
又西行、河漢を泝り、崑崙を踰えむと欲す。
山は横はり、川は阻て、兩地、ともに以て往くべからず、

往兮

歸來掩戶臥旦昏。
蒔黍一區注醪一樽。
妻給井臼兒牧雞豚。
不詰曲以媚俗。
不偃蹇而凌尊。
作為古文詞言高氣醇溫。
手提數寸管欲發義理根。
上探孔孟心下弔屈賈魂。
其質耀金石其芳吐蘭蓀。
叩虛答有響斷險成無痕。
陸珍雜水怪變狀弗可論。
幾年兀兀不肯出。

歸り來つて、戸を掩うて旦昏に臥す。
黍一區を蒔き、醪一樽を注ぎ、
妻は井臼を給し、兒は雞豚を牧す。
詰曲以て俗に媚びず、
偃蹇にして尊を凌がず。
古文詞を作為して、言高くして氣醇溫。
手に數寸の管を提げ、義理の根を發せむと欲す。
上、孔孟の心を探り、下、屈賈の魂を弔ふ。
その質、金石に耀き、その芳、蘭蓀を吐く。
虚を叩けば、答へて響あり、險を斷れば、成つて痕なし。
陸珍、水怪に雜はり、變狀、論すべからず。
幾年か、兀兀として肯て出でず、

坐待眞主應運九五開乾

坐に待つ、眞主の運に應じて、九五、乾坤を開くを。

坤

鶴書自天來幽隱初見拔

鶴書、天より來り、幽隱、はじめて抜かる。

使者遠造廬雞鳴起膏轄

使者、遠く廬に造り、雞鳴、起つて轄に膏す。

與纂金匱編尚書爲給札

ともに金匱の編を纂し、尚書、爲に札を給す。

姦魂泣幽塚下恐遭誅殺

姦魂、幽塚に泣き、下、誅殺に遭はむことを恐る。

書成一代進紫宸

書、一代を成して、紫宸に進む。

鸞旗羽衛夾陛陳

鸞旗羽衛、陛を夾んで陳ぬ。

閣門導謁稱小臣

閣門導謁して、小臣と稱す。

麻衣不脫拜聖人

麻衣脱せずして、聖人を拜す。

捧函近前殿龍顏喜回春

函を捧げて、前殿に近く、龍顏、喜んで春を回す。

敕賚內帑之金與綺段

敕して内帑の金と綺段とを賚ふ。

其文織作銀麒麟

その文、織つて作す銀麒麟。

蒙恩乞還家以奉白髮親

恩を蒙つて、乞うて家に還り、以て白髮の親に奉ず。

戴古弁垂長紳

古弁を戴き、長紳を垂れ、

自號山澤之臞民

自ら山澤の臞民と號す。

媿雌子幸際明良時

媿雌子、幸に明良の時に際し、

無爲寂默坐老東海湄

無爲寂默、坐して東海の湄に老ゆ。

青邱有客鈍且癡

青邱、客あり、鈍且つ癡、

與汝欲結同襟期

汝と結ばむと欲す同襟の期。

左鼓清瑟右吹鳴篳

左に清瑟を鼓し、右に鳴篳を吹き、

作歌共祝天子壽

歌を作つてともに祝す天子の壽、

五風十雨萬國赤子同熙

五風十雨、萬國の赤子同じく熙熙。

【字解】【一】媿雌子 王常宗の號、その詳は、題義の項で述べる。【二】軒轅 即ち黄帝。【三】臞民 臞は男の妻なきもの。身、はじめ妻なきが故に云ふ。【四】混池既死 莊子に「南海の帝を儻となし、北海の帝を忽となし、中央の帝を混池となす。儻と

長短句體 媿雌子歌

忽と、時に混池の地に相遇ふ。混池、これを待つこと甚だ善し。龍忽、混池の徳に報ぜむことを謀る。曰く、人皆七竅あり、以て視聽食息す、これ獨り有るなし、嘗試に之を塞たむと。日に一竅を塞ち、七日にして混池死す」とある。【五】大樸、即ち大道、樸は純樸にして自然の儘なる藥。【六】草野、草茂る野べ、即ち民間。【七】冥心、心を專にする。【八】皇墳、韓愈の詩に高麗皇墳とあり、孔安國の尙書序に「伏羲、神農、黃帝の書、これを三墳といふ」とある。【九】三光、日月星を併稱す。【一〇】五嶽、前に數ば見ゆ、九州の鎮となる名山の總稱。東は泰山、南は衡山、西は華山、北は恆山、中央は嵩山。【一一】天狼、前に卷六、大將軍墓の詩に見ゆ。星の名。この星が落ちると、戦亂が起る。【一二】鹿走秦中原、前に卷四、感舊の詩中に見ゆ。秦の始皇の崩後、中原の地が亂れたるを云ふ。鹿は狩獵の目的物で、ここでは帝位を指す。【一三】蛇圖鄆國門、左傳に「はじめ、内蛇、外蛇と鄆の南門中に圍ひ、内蛇死す、六年にして厲公入る」とある。【一四】俎豆、俎はつくみ、祭享の器、牲を載せて薦むるに用ふ。豆はたかつき、木製の食器。ともに祭祀の時に供物とする。【一五】干戈、楯と戟、兵器の義に用ふ。【一六】弱水、山海經に「勞山、弱水出で、西流して洛に注ぐ」とあり、舊唐書東女國傳に「その王、居るところ、康延と名づく、川中に弱水あり、南流す、牛皮を用ひて船となし、以て渡る」とある。【一七】沐髮、髮を洗ふ、謝朓の辭隋王履に沐髮陽、未測滄浪」とある。【一八】滄海朝陽盆、朝日に照らされる滄海、盆に似たるが故に云ふ。【一九】河漢、銀河。【二〇】崑崙、西方の仙境、西王母の住む處。【二一】山橫川阻、山は横ばり、川は路を妨げる。【二二】且昏、朝暮に同じ。【二三】一區、一區劃の地。【二四】酌、濁り酒。【二五】井臼、水を汲み米を春く。【二六】詰曲、無理に曲げる。【二七】僮僕、のさばつて獨りで偉くして居る。【二八】言高、言辭の高尙なること。【二九】醇酒、醇にして濃厚。【三〇】數寸管、短い筆。【三一】義理、義理の根本。【三二】屈賈、屈原と賈誼。屈原是湘水に投じて死し、後に賈誼が其地を過ぎて弔つたことがある。そこで、史記では、これを合傳にしてある。【三三】蘭蓀、蓀は菖の一種、花あやめ、ともに香草の名。【三四】叩虛、中空だと思つて敲く。【三五】元元、説文に「動かざる貌」とあり、韓愈の進學解に「元元以窮年」とある。【三六】眞主、眞正の天子。【三七】九五、易の乾卦の九五に飛龍在天とあつて、天子の即位を云ふ。【三八】鶴書、朝廷より召し出しの書狀。孔稚珪の北山移文に鳴鶴入谷、鶴書赴、鶴とあつて、その法に「蕭子良の古文策、策文體に曰く、鶴頭書と僊波書と、

ともに詔板用ふるところ」とある。【三九】幽隱、幽僻隱晦の地に住むもの。【四〇】青嶂、嶂に「轄は車の軸端の鐵」とあつて、それに油をさして出發の準備をする。【四一】金匱、匱は櫃、金屬製の櫃に入れて珍蔵して置いた史料。【四二】給札、原稿用紙を支給する。【四三】雙旗、天皇旗、その上に雙を畫く。【四四】羽衛、羽林の兵の警備。【四五】夾陛、陛は殿階。【四六】閤門、閤門は、正殿の傍に在る小門、そこより入り、案内されて拜謁する。宋史職官志に「東上閤門、西上閤門、各三人、朝會宴享供奉贊相禮儀の事を掌る。もし慶禮奉表は、東上閤門、これを掌り、禮禮進名は、西上閤門、これを掌る」とある。【四七】麻衣、粗末な衣、もとより禮裝ではない。據言に「劉虛白、裴垣と視席を同じうす。垣は正文、虛白は猶ほ是れ舉子、裴前一絶句を獻じて云ふ、二十年前此夜中、一般燈燭一般風、不知歲月能多少、猶著麻衣待至公」とある。【四八】排面、面は原稿を入れた函。【四九】回春、春が立ち戻つて来た。【五〇】内幣、御内儀。【五一】綺段、見事な織物。【五二】銀麒麟、銀の絲で麒麟が織り出している、杜甫の麗人行に「繡羅衣裏照暮春、雙金孔雀銀麒麟」とある。【五三】古弁、むかし風な冠。【五四】長紳、長い帯。【五五】羅民、瘦せた人。【五六】明良時、明主良臣の際會した太平の時。【五七】青邱有客、作者自ら謂ふ。【五八】同遊期、一處に會合する機會、杜甫の詩に「時赴鄭老同遊期」とある。【五九】清瑟、瑟は琴の屬。【六〇】鳴篳、篳は横笛の一種、長さ一尺四寸、周圍三寸、八孔。詩經に「伯氏吹壎、仲氏吹篳」とある。【六一】五風十雨、前に數ば見ゆ、五日に一たび風がふき、十日に一たび雨ふるといふ太平の世。【六二】熙熙、樂しげなる貌。

【題義】媼雖子は、題下の原注に「友王常宗の爲に作る、蓋し其號なり」とある。王常宗は、前に卷三、春日懷二十友詩の第一に出て居て、そこに略傳を記して置いたから、参照して貰ひたい。媼は陳の姓、王常宗は、本と陳氏なるより云ひ、雖は蜘蛛猿といつて、小さい猿。すると、媼雖子とは、もと陳姓で、蜘蛛猿の如き貌を爲す人といふ意味であらう。婁堅の王常宗傳に「先生の請を得るに方つてや、自ら媼雖子と號し、以て志を見はす。媼は、陳の姓なり。先生、もと陳氏の裔、姓を復せむ

と欲して、未だ果さず。雌は、物に於て昂尾長鼻、兩ふれば木に挂り、尾を以て鼻を塞ぐとある。序に云ふが、媼といふ姓は、舜から出たので、書の堯典に釐降三女子媼酒とあつて、舜は堯の二女と婚せし後、媼水の邊に居たから、その子孫は、地名を取つて姓とした。そこで、この詩の起首に軒轅之裔虞鯀之孫と特記した譯である。この詩は、王常宗が元史編撰の事畢つて歸郷した時、青邱も、矢張、すでに歸家して居たから、賦して贈つたのである。

【詩意】媼雌子は、取りも直さず、黃帝の末裔で、虞舜の子孫である。混沌、死してより一萬年、世は唯だ功利を趁ふに専らなる折から、君のみは、ひとり至道を其身に體し、人に知れぬやうに、田舎に引ッ込んで、専心、一意、古しへの典籍を研究して居る。會ま、元の末運に際し、三光五嶽の氣は分裂して、中國は瓦解し、天狼の星は地に落ちて、血の渾渾として流れるのを舐つて居るといふ位、四海は争戦を事として居た。たとへば、秦の始皇の崩後、羣雄が中原の鹿を争ふが如く、鄭の南門の内外なる蛇が相闘ひ、外蛇が勝つたのが、前兆となつて、厲公が入國するといふ様な工合。祭祀の時に用ふる俎豆の類は、草むらの中に投げ棄てられ、どこに往つても、干戈の取り沙汰ばかりであつた。そこで、媼雌子は、こんな處に居ては大變だといふので、東游して弱水を渡り、そして、朝日に照らされた滄海の盆の様な水に臨んで髪を洗はむとし、さなくば、西に行つて、銀河を溯り、そして、西王母の住む崑崙を踰えて、なほ彼方に往つて見たいと思つて居たものの、山は横はり、川は阻て、兩地ともに、

往くことが出来ないから、引きかへして、戸を閉ぢた儘、朝暮を通じて、臥して居た。その時の生活状態はと云ふと、黍一區を蒔き、濁酒一樽を盈たし、妻は、井を汲んだり、米を舂いたりして居るし、俸は、雞の世話をしたり、豚を飼つたりして居る。君は、いやいやながら、己を曲げて世の俗人に媚ぶることはせず、さうかといつて、のさばつて、横柄に構へて、尊貴の人を凌辱することもしない。この間、古文詞を作つたが、その言語高尚にして氣象温醇、まことに希に見るところ。君は、手に數寸の筆を掲げて、義理の根本を闡明しやうといふので、上は孔丘、孟軻の本心を探り、下は屈原、賈誼の冤魂を弔ひ、文行を兼備し、古今を達觀し、文章の質は金石を耀かすべく、その芳は、蘭蓀の様な香氣を吐き、中が空かと思つて、これを叩くと、答へて響を爲し、險なるを削りならした揚句、渾然として痕なく、水陸の珍怪を併せて、千變萬化の状は、到底論じ盡されぬ位。君は、幾年の久しきに互り、兀兀として動かさず、草小屋に引ッ込んだ儘で、眞正の天子が天運に應じて出で、飛龍の天に在るが如く、一朝即位して、乾坤を開くことを待つて居られた。すると、豫期に違はず、明の太祖が即位せられ、態態、御召状を下されて、草莽幽隱の名士を初めて拔擢することになり、使者は、遠くより君の菴を尋ねて來たから、君は、直に之を諾し、夜あけに雞の鳴く頃、車轄に油をさして、發程の準備を整へられた。程なく、著京すると、帝室所藏の史料を編纂することとなり、尙書省より用紙を供給された。君の史筆は、いささかも、事實を枉げずに直書するから、姦雄の魂は、墓中に泣

き、地下に在つても、誅殺に遭はむことを恐れて居た。やがて、元一代の歴史が愈よ出来上ると、これを進獻する爲に、紫宸に朝し、あたりには、鸞旗並び立ち、羽林の兵士が嚴重に警衛し、殿階を夾んで整列して居た。君は、側の閣門より入り、しるべせられて謁見し、小臣と稱しつつ、麻衣を着けた儘で、天子を拜した。そこで、史稿を入れた函を捧げて殿前に近づくと、龍顔、喜を含んで、忽ち春を回せしが如く、御機嫌、斜ならず、感賞の餘り、勅して御内儀の金と見事な織物とを賜はつたが、それには、銀の糸で麒麟を織り出してあつて、滅多に見たことも無いやうなものであつた。君は、聖恩の渥きを蒙り、御暇を願つて、家に歸り、これからは、白髮の老親に孝養を盡さうといふ決心で、古めかしい冠を戴き、長い帯を垂れ、全然、浮世はなれをして、自ら山澤の瘦せ浪人と號して居た。嬀雉子よ、君は、明主良臣の結構なる時に遇ひ、無爲寂黙、坐ながら、東海の濱に老いむとして居られる。われは、青邱に寄寓して居て、資性頑鈍にして癡愚であるが、君と會同の機會を約して、詩酒徵逐の樂を縱にしやうと思ふ。その時は、左に清瑟を鼓し、右に鳴篳を吹き、歌を作つて、ともに聖天子の御世、千代萬代に續かむことを壽ぎ、そして、五日に風、十日に雨といふやうに、陰陽善く調ひ、萬國の赤子と共に、熙熙として笑ひさざめいて居たいといふ意を述べることに致さう。

【餘論】起首より冥心究皇墳に至るまでは、嬀雉子の出身を敘し、蚤逢三光五嶽乍分裂より歸來掩

戸臥且昏に至るまでは、元季に亂を避けむとして果さず、相變らず蘇州に隱居して居たことを記し、詩黍一區より坐待真主應運九五開乾坤に至るまでは、隱居中の生活状態より、その刻苦力學、愈よ文章の妙を得たることを述べ、鶴書自天來より自號山澤之隱民に至るまでは、修史の始末に繼ぐに、恩を蒙つて東歸せしを以てし、最後に嬀雉子幸際明良時より結末に至るまでは、爾我の交情に及び、且つ共に太平を謳歌したいといつて、世の至治を囑望したのである。

贈劉生歌

劉生に贈るの歌

君不見歐冶子。

君見すや歐冶子、

金鑄魚腸照吳市。

金、魚腸を鑄つて、吳市を照らす。

君不見徐夫人。

君見すや、徐夫人、

藥淬七首驚函秦。

藥、七首を淬して、函秦を驚かす。

奇鋒當年非不利。

奇鋒、當年、利ならざるに非ず、

氣奪秋雲愁白帝。

氣は秋雲を奪うて、白帝を愁へしむ。

伯圖恃此竟無成。

伯圖、これを恃んで、竟に成るなし、

【字解】【一】歐冶子 吳越春秋

に「干將、歐冶子と師を同じうし、

ともに能く劍を爲る」とある。【三】

金鑄魚腸 金は鋼、むかしの劍は、

鋼を以て鑄造した。魚腸は、劍の名。

吳越春秋に「越王允常、歐冶子を聘

して、名劍五枚を作る、泰曹・巨闕・

魚腸・純鉤・湛盧」とある。【三】

徐夫人 史記刺客列傳に「ここに於

て、太子、豫め天下の利七首を求め、

良冶徒爲殺人器。良冶徒に爲る殺人の器。
 何如劉生獨采昆。何ぞ如かむ、劉生、ひとり昆吾の鋼を
 吾鋼。采り、

大爐夜鍛騰虹光。大爐、夜鍛へて、虹光の騰るに。

神鍼妙刃兩如水。神鍼妙刃、兩つながら水の如し、

提出二豎皆奔藏。提出すれば、二豎、皆奔藏。

利器之功有如此。利器の功、かくの如きあり、

特爲醫仙起人死。特に醫仙の爲に人の死を起す。

囊中長得伴刀圭。囊中、長く刀圭を伴ふを得たり、

海上何須刺犀兕。海上、何ぞ須ひむ、犀兕を刺るを。

我看十年太白西。われ看る、十年、太白、西方に明かに、

方明。

銅山尋鑿兵縱橫。銅山尋鑿、兵縱橫。

趙人徐夫人の匕首を得たり」とあつて、索隱に「徐は姓、夫人は名、男子を謂ふなり」とある。【四】藥・洋・匕首。上文の覆きに「これを百金に取し、工をして薬を以て、之を洋せしむ」とあつて、索隱に「洋は染なり、毒薬を以て劍刃に染むるを謂ふなり」とある。【五】函・秦。函谷關内の秦。【六】白帝。史記高祖本紀に「高祖、酒を飲り、夜、澤中を經、大蛇、徑に當る。高祖、劍を抜いて蛇を斬る。後に一老嫗あり、夜、哭して曰く、吾は白帝の子なり、化して蛇となつて、道に當る。今、赤帝の子に之を斬らる」とあつて、その注に「秦は西戎に居り、少昊の神を主とし、西時を作つて白帝を謂る」とある。【七】伯圖。霸圖に同じ。【八】良冶。すぐれたる冶工。【九】昆吾。趙人徐夫人の匕首を得たり」とあつて、索隱に「徐は姓、夫人は名、男子を謂ふなり」とある。【四】藥・洋・匕首。上文の覆きに「これを百金に取し、工をして薬を以て、之を洋せしむ」とあつて、索隱に「洋は染なり、毒薬を以て劍刃に染むるを謂ふなり」とある。【五】函・秦。函谷關内の秦。【六】白帝。史記高祖本紀に「高祖、酒を飲り、夜、澤中を經、大蛇、徑に當る。高祖、劍を抜いて蛇を斬る。後に一老嫗あり、夜、哭して曰く、吾は白帝の子なり、化して蛇となつて、道に當る。今、赤帝の子に之を斬らる」とあつて、その注に「秦は西戎に居り、少昊の神を主とし、西時を作つて白帝を謂る」とある。【七】伯圖。霸圖に同じ。【八】良冶。すぐれたる冶工。【九】昆吾。

幸逢聖人生。

幸に聖人の生まるるに逢ひ、

干戈戢四海清。

干戈戢まり、四海清し。

願生但制此器勿

願はくは、生、但だ此器を制して、兵

制兵。

を制する勿れ、

民無疫癘樂太平。

民に疫癘なくして太平を樂まむ。

劉生。題義の條を見よ。【一〇】昆吾。銅は銅鐵、列子に「西海の上には昆吾石多し、治して鐵となして劍を作る、玉を切るに、泥の如し」とある。【一一】神鍼。病を治するに用ふる針、隋書經籍志に、赤烏神鍼一巻があつて、針治の術は早くから開けて居つた。【一二】妙刃。醫用の刀、元稹の詩に、磨礪割骨刀とある。【一三】二豎。病の神、左傳に「晉侯疾む、醫を秦に求む。秦伯、醫殺をして之を爲さしむ。未だ至らず、公、夢む、疾、二豎子となつて曰く、彼は良醫なり、われを傷つけむことを懼る、焉くにか之を逃れむ。その一日く、首の上、背の下に居らば、われを若何」とある。【一四】刀圭。薬を調合するに用ふ、前に卷四、贈惠山醫僧の詩中に見ゆ。【一五】犀兕。犀や兕を切り殺す。兕は、野牛に似て色青く、重さ千斤、一角あり、長さ三尺餘、性、よく抵觸するを以て、その角にて、酒杯を爲りて酒戒と爲す、皮は、堅厚にして甲を製す。つまり、犀の一種で、やや小さいものと見える。李尤の寶劍銘に、龍圖翔奇、太阿飛名、陸斷犀兕、水截鯨鯢とある。【一六】太白。即ち明星、兵風の象として知らる。前に卷四、感舊の詩中に評述して置いた。【一七】銅山。漢書食貨志に「建元以來、用少し、縣官、往往、銅山に即いて錢を鑄る」とある。【一八】疫癘。流行病。

【題義】劉生は、題下の原注に「生、鍛を善くす、李鍊師の爲に、三閭鐵劍藥刀を製す、歌を求む、これに贈る」とある。その人、名字不詳。この詩は、劉生の請に因つて、賦して、これに贈つたので

ある。

【詩意】古しへの歐冶子は、銅を以て魚腸の劍を鑄り、劍光は、遍ねく吳市を照らした。又徐夫人といふものがあつて、その人の造つた短刀を燕の太子が買ひ取り、毒藥を鍔の處に仕込み、そして荆軻に授けて秦に之かした。二人の造つた劍は、鋒先が鋭くて、随分よく切れるが、その凛烈の氣は、秋雲を奪ひ、秋の神たる白帝を愁へしむるばかり、こんな者を恃みとして居ては、霸圖の成就する筈もなく、折角の良冶をして、徒に殺人の用具を造らしめたのは、まことに、遺憾である。ここに、劉生は、昆吾に産する鋼鐵を採取し、夜、大きな爐で鍛へると、虹の様な光が立ちのぼり、針にしても、藥刀にしても、晶瑩水の如く、これを掲げて出さへすれば、例の二豎なども、辟易して走り匿れる。利器の功用は、かくの如く、そして仙醫の手に渡すと、人の死を起さしめ、囊中に在つては、常に刀圭と一處に置かれ、海邊に出かけて、旱や野牛を屠るにも及ばない。この十年以來、太白星は高く西天に輝き、到る處、銅山を發掘して、軍資となし、天下は、兵馬の縱横に任かせて居たが、幸にして、大明の天子が世に出た爲に、さしもの干戈、一朝にして戢まり、四海皆清平となつた。生よ、願はくは、かくの如く、仁術に役立つ道具のみを作つて、兵器などは製造せぬが善いので、さうすれば、人民も疫病に苦まずして、太平を樂むことが出來やう。

【餘論】この詩は、平易率直、趣意は至極尤もらしいが、題の性質上、どうも、あつといつて感服すべき程のものではない。

べき程のものではない。

登金陵雨花臺望大江

金陵の雨花臺に登りて大江を望む

大江來從萬山中。大江は萬山の中より來り、
 山勢盡與江流東。山勢、盡く江流と東す。
 鍾山如龍獨西上。鍾山は龍の如く、ひとり西上す。
 欲破巨浪乘長風。巨浪を破つて長風に乗せむと欲す。
 江山相雄不相讓。江山、相雄として相譲らず、
 形勝爭誇天下壯。形勝、争つて誇る天下に壯なるを。
 秦皇空此瘞黃金。秦皇、空しく此に黄金を瘞む。
 佳氣葱葱至今王。佳氣葱葱、今に至つて王なり。
 我懷鬱塞何由開。わが懷、鬱塞、何に由つて開かむ。
 酒酣走上城南臺。酒酣に、走つて上る城南の臺。

長短句體 登金陵雨花臺望大江

【字解】

【一】大江 普通に云ふ揚子江。支那第一の最大の川で、源を青海の巴顏喀喇山の南麓に發し、流れて雲南・四川・湖北・湖南・江西・安徽の諸省を經、江蘇の崇明縣に至つて海に入り、その長さ、九千九百六十華里、俗に長江と稱し、その下流を揚子江と稱して居る。【二】萬山 宜昌以西を云ふ。【三】鍾山 南京の東北に在つて、俗に紫金山と稱して居る。諸葛亮が鍾山龍蟠といつたのは、即ち此處である。吳の孫權は、その祖の諱を避けて、名を蔣山と更めたが、宋に成つてから復た鍾山と稱した。【四】秦皇 丹陽記に「秦

坐覺蒼茫萬古意。坐に覺ゆ、蒼茫萬古の意、
遠自荒煙落日之中より來る。
中來。

石頭城下濤聲怒。石頭城下、濤聲怒り、
武騎千羣誰敢渡。武騎千羣、誰か敢て渡らむ。
黃旗入洛竟何祥。黃旗洛に入る、竟に何の祥、
鐵鎖橫江未爲固。鐵鎖、江に横はるも、未だ固と爲さず。
前三國後六朝。前には三國、後には六朝、
草生宮闕何蕭蕭。草は宮闕に生じて何ぞ蕭蕭。
英雄乘時務割據。英雄、時に乘じて割據を務め、
幾度戰血流寒潮。幾度か、戰血、寒潮に流る。
我生幸逢聖人起。わが生、幸に逢ふ、聖人の南國に起るに、
南國。

の始皇、金玉寶を埋め、以て天子の氣を取す、故に金陵と名づく」とある。【三】 魏 盛にして生氣ある朝。【六】 至今王 王は旺、盛なりといふ意。【七】 鬱塞 もやもやして開かぬこと。【八】 城南臺 雨花臺をいふ、なほ題辭の條を見よ。【九】 石頭城 南京の西、石頭山に在る。漢の建安十六年、孫權は治を秣陵に移し、明年、ここに城いた。その後、沿革はあるが、その遺址は、今でも残つて居る。宋の張昇は「石頭城は、天生の城壁あつて、城の如く然り。江行、北より來るもの、石頭城に觸ひ、轉じて秦淮に入る」といひ、陸游は「龍舟より石頭山を望む、山甚だ高からず、然れども、江中に峭立し、巖壁、垣牆の如し」といつて居る。【一〇】 黃旗入洛 三國志の吳

禍亂初平事休息。禍亂、はじめて平らいで、休息を事とす。

從今四海永爲家。今より、四海永く家となし、

不用長江限南北。用ひず長江南北に限るを。

志に「はじめ、丹陽の刁玄、國人を誑いて曰く、黃旗紫蓋、東南に見はると。又壽春に童謡あり、曰く、吳天子當上と。皓、これを聞いて、喜んで曰く、これ天命なり、と。即ち其母妻子及び後宮數十人を載せ、牛溲の陸道より西上せむとし、云ふ、青蓋、洛陽に入り、以て天命に順はむ、と。行いて大雪に遇つて乃ち還る」とある。その後、孫皓は晉軍に敗られて降りし後、洛陽に入ったので、上の童謡等は、皆吳の滅亡に應ずるのであつた。【一】 鐵鎖橫江 晉書に「王濬、吳の丹陽を攻めて之に克つ、吳人、江積要害の處に於て、並に鐵鎖を以て、これを横截し、又鐵椎を作り、長さ丈餘、暗に江中に置き、逆に舟艦を拒ぐ。王濬、大筏數十を作り、方百餘步、草を縛して人となし、甲を被り、仗を持せしめ、水に善きものをして、筏を以て先行せしめ、鐵椎に遇へば、椎、皆筏に著いて去る。又大炬を作り、長さ十餘丈、大數十回、灌ぐに麻油を以てし、船前に在つて鐵に遇へば、炬を燃やして之を燒く。須臾にして、融液斷絶、船、礙るところなし」とある。【二】 三國 魏蜀吳をいふ。【三】 六朝 三國の時、金陵に都した吳を始めとし、東晉、並に宋齊梁陳を併稱す。その後、隋は天下を統一して長安に都した。【四】 長江限南北 曹丕が吳を伐たむとし、江に臨み、やがて引き返した時の言葉で、三國志の魏志に見ゆ。

【題義】金陵は、今の南京、雨花臺は、江寧府志に「南城三里、聚寶門外に在り、岡阜の最高處に據る。梁の武帝の時、雲光法師、經を此に講ず。凡そ經を講ずれば、天、花を雨ふらして、雪片の如し。故に以て其臺に名づく」とある。大江は揚子江。この詩は、雨花臺に上り、江山の形勢を觀て、感慨の餘に作つたので、即ち青邱が南京に居た時の事に係るのである。

【詩意】揚子江は、巴蜀萬山の中より流れ來り、そして、兩岸の山勢は、すべて、江流と共に東向して、ここにも、その餘脈を存して居る。ひとり、鍾山のみは、龍の如き形をなし、反對に獨り西上し、巨浪を破り、長風に乘じて昇天せむとする様である。江山は、互に其雄を競うて、少しも相譲らず、そして、その形勝の天下に壯なることを争うて誇つて居る。むかし、秦の始皇帝は、むなしく、ここに黄金を埋めて、天子の氣を鎮壓したが、その佳氣は、葱葱として、今日なほ盛である。われ、この地に在つて、懷抱鬱塞、不愉快で仕方がない處から、酒酣なる時、走つて、城南なる雨花臺に上つて曠望すると、蒼茫萬古、今を感じ、舊を懷ふ念が、遠く落日荒煙の中より來るを覺えた。石頭城下には、濤聲怒るが如く、武騎千羣を以てするも、なかなか渡ることが出來ない。むかし、吳國の末路、黃旗洛に入るといふ童謡が流行したが、それは、何の兆候であつたか、鐵鎖を以て江を横斷しても、西晉の舟軍を防ぐことは出來なかつた。前には三國の吳あり、後には六朝の國あり、當時の宮闕には、草が蕭蕭として生ひ茂つて居る。英雄は、時に乘じ、割據を務めて、この江山の要害を利とし、戰爭も度度あつて、血は寒潮に流れ、江水も爲に赤くなつた位。ここに、われは、幸にも、聖人の南國より起れるに逢ひ、さしもの禍亂、はじめて平らいで、休息を事とする目出たき御世となつた。されば、今より後は、四海一家となり、長江を界として、南北對立、その霸を争ふ様なことの無い様に致したい。

【餘論】この詩は、集中有数の傑作と稱すべく、起首より遠自荒煙落日之中來に至るまでは、雨花臺上の曠觀を敘し、金陵の形勢も、自然ここに盡されて居る。石頭城下濤聲怒の四句は、はじめて此に國せし吳の末運を傷み、前三國の五句は六朝の跡を弔ひ、我生より以下は、明祖の勃興を頌し、曹丕の語を翻用して、收束とした處は、最も面白く、これを禹域刻下の形勢に對照すると、又別種の感慨を催す次第である。

春日客園無花偶感

春日、客園に花なし、偶感

荒園多青草。

荒園、青草多く、

而無一樹花。

しかも、一樹の花なし。

東風吹春來。

東風、春を吹いて來るも、

只向何人家。

ただ何人の家に向ふ。

南池舊日花滿煙。

南池舊日、花、煙に滿つ、

美人夜彈蜀國絃。

美人、夜、彈す蜀國の絃。

亂枝迷眼歸不得。亂枝、眼を迷はして歸り得ず、

長短句體 春日客園無花偶感

【字解】(一)南池、蘇州の名園を指すのであらう。
 (二)蜀國絃、蜀中に産する絃を張つた琴。

醉帶月露花陰眠。醉うて月露を帯びて、花陰に眠る。

無花雖足歎。花なきは歎するに足ると雖も、

無酒更可悲。酒なきは、更に悲むべし。

如今但得一壺滿。今の如き、但だ一壺の滿つるを得ば、

何用紛紛紅紫爲。何ぞ紛紛たる紅紫を用ふるを爲さむ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、客園は、南京なる鍾山里第の庭を指したのであらう。

【詩意】荒れはてた庭園には、青草のみ多くして、一株の花だになく、東風春を吹き來るも、ここには、全く音づれず、何人の家に向ふかと問ひたい位。むかし、南池に遊びし時は、花が咲き揃つて、煙中に満ち、夜になると、美人が琴を弾じて、愈よ興を添へた。入り亂れたる花の枝は、わが目を迷はし、留賞久しきを経ても歸り得ず、はては、酔うて月光露氣を身にしめた儘、花かげに眠つて仕舞つた。かういふことは、到底、この地に於て求められない。花の無いのは、すでに嘆するに足るべく、酒なきに至つては、更に悲むべきことである。元來、花より酒で、今、もし壺に一ばいの酒を得たならば、それで、しばらくは凌ぐことも出来るから、紛紛たる紅紫の花などは、どうでも宜しい。

【餘論】大體、卑近淺俗を免れないが、中間の一解、南池の舊游を敘して、いくらか波瀾を添へた處

は、流石に面白い。

白下送錢判官岳

白下、錢判官岳を送る

白門有垂楊。

白門に垂楊あり、

復有春酒香。

復た春酒の香あり。

此地逢君誰。

この地、君に逢ふは誰ぞ、

乃是錢少陽。

乃ち是れ錢少陽。

相逢既沽白門酒。

相逢ふ、すでに沽ふ白門の酒、

相送還攀白門柳。

相送つて、還た攀づ白門の柳。

不向公車更上書。

公車に向つて更に書を上らず、

却趨官署初垂綬。

却つて、官署に趨つて初めて綬を垂る。

日落淮水頭。

日は落つ淮水の頭、

送君去悠悠。

君を送る去つて悠悠。

【字解】(一) 白門、南京城門の一で、前に數ば見えて居た。

【三】 逢君誰 貴下に御目にかかつた、お見それ申したが、貴下は誰方かといふ義。

【三】 錢少陽 李白に、贈三錢徵君詩の詩があつて、同姓の故を以て、これに比擬したのである。

【三】 公車 天子の正式車。上書とは、それに向つて直訴すること。

梁王苑裏花飛盡。梁王苑裏、花、飛び盡す、

明日相思過汴州。明日相思、汴州を過ぐ。

【題義】説明に及ばぬ。自下は、白門の外、前に數ば見えて居た。

【詩意】白門には、柳がしだれて居るし、春酒の香ばしさを賣る店もあつて、さすがに、送別には適當の處。ここに、君に逢つたが、誰方かと問へば、即ち錢君であつた。すでに相逢ひし上は、白門の酒を沽ひ、相送らむとしては、白門の柳を攀ちて之を折つた。君は、天子の公車に向つて直訴されず、早くも任官して、官署に奉職せらるる身分となり、今しも、印綬を垂れて赴任される。見渡せば、日は淮水の邊に落ち、君の行く手の道は、悠悠として遙かである。古しへの梁王の苑中、花すでに飛び盡し、客懷轉た凄涼たる折しも、明日、君は相思の念を抱きつつ、汴州を過ぎ行かれるであらう。

【餘論】錢判官は、名字ともに不詳で、もとより格別の人でもないから、この詩も、一向振つて居らぬ。そして、任地は何處か分らぬが、汴州を過ぎて、なほ其先といへば、定めて陝西地方だらうと思はれる。

聽錢文則琴呈良夫

錢文則の琴を聽いて、良夫に呈す

古樂久不聞

古樂、久しく聞かす、

【字解】【一】古樂、古しへの樂、

古器亦殘缺

古器、亦た殘缺。

惟有朱絃琴

惟だ朱絃の琴あり、

韻與箏瑟迴殊別

韻は箏瑟と迴かに殊別。

此夜聽君彈

この夜、君の彈するを聽き、

四座寂不喧

四座、寂として喧しからず。

古人有遺恨

古人、遺恨あり、

似向絃中言

絃中に向つて言ふに似たり。

初調乍冲融

初調、乍ち冲融、

再弄忽悽惋

再弄、忽ち悽惋。

秋猿春鳥相間啼

秋猿春鳥、相間して啼き、

夢繞瀟湘碧雲遠

夢は瀟湘を繞つて、碧雲遠し。

怒濤勢出峽

怒濤、勢、峽を出で、

鬪石轟奔雷

鬪石、奔雷を轟かす。

長短句體 聽錢文則琴呈良夫

主として三代に就いて云ふ。【一】朱絃琴、禮記に「太廟の瑟、朱絃、一倡三嘆」とあるに本づく。【二】初調、初めの調子。【三】冲融、のどかで融和なること。【四】相間啼、間はまじる。【五】怒濤、孟買の時に江上秋風捲怒濤とある。【六】出峽、李白の時に袖拂白雲開素琴、彈爲三峽流泉音とあつて、その注に「三峽流泉は、琴操の名なり」とある。【七】鬪石、高錡の山亭の時に「鬪石類三峽響、飛流萬瀑凌」とある。【八】再弄、世説に「趙師、字は耶利、善く琴を鼓す。貞觀の初、獨歩、京に上る。かつて云ふ、吳聲は清婉、長江廣流の若く、綿綿、徐に逝く、國土の風。蜀聲は躁急、急浪奔雷の若く、亦た一時の俊快」とある。【九】鬪石、一壺井杜市の時に陰井敲三銅瓶とある。

漫流入滄海。
 悠然去無回。
 銅瓶一墮井。
 汲引不可上。
 離車軋軋曉出關。
 欲行未行苦惆悵。
 夜深庭樹風雨驚。
 恍疑鬼神入蒲城。
 須臾響靜月照席。
 玉壺凍破冰崢嶸。
 我心正如水。
 萬籟不到耳。
 無端聽此聲。

漫流、滄海に入り、悠然として、去つて回るなし。銅瓶、一たび井に墮つ、汲引するべからず。離車軋軋として、曉に關を出づ、行かむと欲して未だ行かず、苦だ惆悵。夜は深くして、庭樹、風雨驚く、恍として疑ふ、鬼神の蒲城に入るを。須臾にして、響靜に、月は席を照らす、玉壺凍破して氷崢嶸。わが心、正に水の如し、萬籟、耳に到らず。無端、この聲を聴く、

【一】鬼神入蒲城。前に卷七、爲因師題松梢飛瀑圖の詩中に引いて置いたが、杜甫の靈山水障歌に、反思前夜風雨急、乃是蒲城鬼神入とある。
 【二】胡笳。胡笳十八拍を云ふ、下を見よ。
 【三】文姬。蔡琰別傳に「琰、字は文姬、興平中、喪亂、胡騎に獲られ、南匈奴左賢王に没す。十二年春正月、胡殿に登り、笳の音に感じて、胡笳十八拍を作る」とある。
 【四】履霜。詳しくは履霜操といふ。琴操に「尹伯奇、至孝、後母これを罰す。清晨、霜を履み、琴を授つて、履霜操を作る」とある。
 【五】南風。家語に「帝舜、五絃の琴を弾じ、南風の詩を歌うて曰く、南風之薰兮、可也以解吾民之愠兮、南風之時兮、可也以阜吾民之財兮」とある。【六】文王。琴錄に「文王、

雙淚迸落百感生。
 起請且莫彈胡笳。
 文姬思家意咨嗟。
 請莫彈履霜。
 孝子在野愁彷徨。
 願君拂拭登高堂。
 先彈南風後文王。
 美哉大雅聲洋洋。
 使我坐聽憂俱忘。

雙淚迸落して百感生ず。起つて請ふ、且つ胡笳を彈する莫れ、文姬家を思うて意咨嗟。請ふ、履霜を彈する莫れ、孝子、野に在り、愁彷徨。願はくは、君、拂拭して高堂に登り、先づ南風を弾じ、後には文王。美なるかな、大雅聲洋洋、われをして、坐聽、憂、俱に忘れしむ。

太公を涓陽に得、大に悦び、乃ち琴を授つて之を鼓し、自ら思士の意を鼓す、故に文王思士操あり」と見ゆ。
 【七】大雅。ここのは、詩經に在る大雅の意味ではなく、大に雅趣があるといふ義であらう。

【題義】覺藻集に贈錢文則一序といふ一文があつて、その中に「山陽の錢文則、書を讀み、好んで善を修し、琴を鼓す」とあるが、その他の事が分からぬ。つまり、琴工としては、一かどの素養のあつた君子人に見える。良夫は、いづれ字であらうが、誰か分からぬ。この人が主となつて、錢文則を招聘したものだと思はれる。そこで、この詩は、錢文則の琴を彈するを聴き、賦して席主たる良夫その人に

贈つたのである。

【詩意】三代の古樂は、久しく聞かず、その頃の古器も、殘破缺損して仕舞つたが、ただ朱絃の琴のみは、なほ儼存し、その音韻の清越なるは、箏瑟の類とは、眞然として異なつて居る。今夜、鏡君の琴を彈するを聞いたが、流石に名手であるから、四座寂然として、聲をも立てず、いづれも、謹んで拜聴して居た。その琴の音は、大體、古人の盡きぬ遺恨を絃に託して言はせる様なものである。はじめの調子は、冲然融和であつたが、再弄すれば、悽然哀惋、これを譬ふれば、秋、猿聲の悲しきと、春、鳥語の長閑けきとが、相雜はつて、ちやんぼんに啼くが如く、夢魂遠く去つて、碧雲の飛び迷ふ瀟湘の邊を繞る様な想がした。しばらくすると、怒濤の勢すさまじく、三峽を走り出で、水と相闘ふ石は、奔雷を轟かせ、はては、緩やかに流れて滄海に入り、悠悠として去つて、復た回らざるが如くである。又たとふれば、銅瓶が一たび井の底に落ち込むと、いくら汲引しても、上げることが出来ない様でもあるし、ひとり離れ行く車の聲、軋軋として、曉早く關門を出でむとし、行かむと欲して未だ行かず、惆悵として心に思ひ惱んで居る様である。時しも、夜は深く、庭樹には風雨襲ひ來り、恍然として、鬼神、蒲城に入りしを疑ふばかり。しばらくすると、風雨、響靜かに、空も晴れ渡つたと見えて、月色皎皎として、席を照らし、その淨潔なることは、玉壺が寒氣の爲にひび破れて、中には、氷が皴皴として堅く凝結して居る様であつた。わが心、さながら、水の如く、浮世の汚塵を離れ、萬

籟の聲は、耳にも入らなかつたが、ゆくりなくも、この琴の響を聞くと、兩の目からは、涙が迸り落ち、百感愴然として胸に生じた。そこで、起つて鏡君に向ひ、胡笳十八拍の曲は、彈せぬが善い、何となれば、蔡文姬が家を懷うて、歎息の意を漏らしたものであるからだといひ、又履霜操は、彈せずもがな、何となれば、孝子の尹伯奇が野に在つて、孤身伴なきを愁へて彷徨したことを述べたものだからといつた。それよりも、注意して琴を掻き拂つた後、高堂に登り、第一に南風、次に文王の曲を奏して貰ひたい。この二曲の特質として、大に雅致ある聲の洋洋として洵に美なるは、われをして、坐して聴かば、憂をも併せて忘れしめるからである。

【餘論】起八句は總提、初調乍冲融より欲行未行苦惆悵に至るまでは琴聲の形容で、例の序破急といふ様な音律の遞變を略ぼ盡して居る。夜深庭樹風雨驚の四句は、琴を彈じ罷んだ時の實景で、琵琶行に東船西舫悄無言、唯見江心秋月白といつた様な處。我心正如水の四句は、自家の感想。起請且莫彈胡笳以下は、悲哀な曲は止めにして、南風・文王の如き、雍和清純の音を聞かせて貰ひたいといひ、又暗に時世の此の如くならむことを嚮望したので、ここが即ち席主の良夫に併せて贈るといふ意に副うて居るのであらう。

雪齋爲述上人賦

雪齋、述上人の爲に賦す

長短句體 雪齋爲述上人賦

君不見韓刺史。君見すや韓刺史。

疲馬度關愁欲死。疲馬關を度つて、愁へて死せむと欲す。

君不見党將軍。君見すや、党將軍。

美人擁帳飲正醺。美人、帳を擁して、飲、正に醺す。

憔悴豪華兩何有。憔悴豪華、兩つながら何かあらむ、

世人徒勞競奔走。世人、徒勞、競うて奔走。

雪深三尺坐寒龕。雪深きこと三尺、寒龕に坐す、

誰似西齋衲衣叟。誰か似たる、西齋の衲衣叟。

開門一笑定起遲。門を開いて、一笑、定より起つこと遅く、

虛空大地皆春熙。虛空大地、皆春熙。

松梢一片忽墮響。松梢一片、忽ち響を墮し、

夜靜山空人不知。夜は靜かに、山は空しくして、人知らず。

此地應憐無熱惱。この地、應に憐むべし熱惱なきを、

【字解】(一)韓刺史 韓愈、佛

骨を諷めしに因つて、潮州刺史に左

遷せらる。(二)度關 關は藍田關、

普通に略して藍關といふ。長安の東

南、終南山脈の盡くる處に當つて居

る。韓愈の至藍關示三經孫湘一の詩

に雪積秦嶺一軍何在、雪擁藍關馬

不前とある。(三)党將軍 即ち党

大尉、前に引いたことがあるが、事文

類聚に「陶穀、党大尉の家姫を得た

り、雪水を取つて茶を煮る。曰く、

党家、この樂ありや否や。曰く、彼、

安んぞ此を識らむ、但だ能く銷金帳

下に於て、羊羔美酒を飲むのみ」とあ

る。(四)寒龕 龕は小さな佛堂、

【五】衲衣 僧衣。(六)定起 禪

定より起つて出て来る。(七)春熙

春めいて長閑なること。(八)無熱

惱 東坡の雪齋の詩に人間熱惱無

尋梅莫若尋詩好。

便穿蠟屐踏瓊瑤。

曉徑從埋不須掃。

得失を列せず。約に詣るあり、正に財物を料るを見る。客至る、屏當するも盡さず、身を以て之を蔽ふ。既に詣るあり、正に自ら履

【一〇】從埋 從は任かす。

【題義】雪齋は述上人の居室の號であるが、上人の本名閑歴等は分からぬ。

【詩意】韓愈は潮州に左遷されしとき、疲れた馬を驅つて、覺束なくも、雪中に藍關を度つて、憂愁

の極、殆んど死なむばかり。党大尉は、銷金帳裏に坐して、雪を賞し、美人が傍に侍坐し、酒を飲

んで、やつと醉が廻つた。韓公の憔悴と党家の豪華と、この兩者は、何でもないのに、世人は、徒勞

を顧みず、しきりに奔走して、皆憔悴を避けて、豪華に就かうとして居る。ここに、雪が積んで、三尺

の深さにも及びし時、西齋の高僧は、ひとり寒龕の中に坐し、他に一寸その類もない位。やがて、定

中より起つこと遅く、門を開いて一笑し、虛空大地、皆春めいて長閑であるといつて居る。その内に、

松の梢の上より、雪の塊まりが一つ轉げ落ちて來たが、夜は靜かに、山は空しくして、誰も知つて居

る人はない。ここに來れば、煩惱の爲に心頭を熱することもあるまじく、梅を尋ぬるよりも、詩を尋

梅を尋ぬるは詩を尋ぬるの好きに若く

便ち蠟屐を穿つて瓊瑤を踏み、なし。

曉徑、埋もるに從せて、掃ふを須ひず。

梅を尋ぬるは詩を尋ぬるの好きに若く

便ち蠟屐を穿つて瓊瑤を踏み、なし。

曉徑、埋もるに從せて、掃ふを須ひず。

梅を尋ぬるは詩を尋ぬるの好きに若く

便ち蠟屐を穿つて瓊瑤を踏み、なし。

曉徑、埋もるに從せて、掃ふを須ひず。

梅を尋ぬるは詩を尋ぬるの好きに若く

便ち蠟屐を穿つて瓊瑤を踏み、なし。

曉徑、埋もるに從せて、掃ふを須ひず。

梅を尋ぬるは詩を尋ぬるの好きに若く

便ち蠟屐を穿つて瓊瑤を踏み、なし。

曉徑、埋もるに從せて、掃ふを須ひず。

梅を尋ぬるは詩を尋ぬるの好きに若く

便ち蠟屐を穿つて瓊瑤を踏み、なし。

曉徑、埋もるに從せて、掃ふを須ひず。

梅を尋ぬるは詩を尋ぬるの好きに若く

ねる方が好い。そこで、蠟を施した足駄を穿き、瓊瑤と見まがふ雪を踏んで出かけると、曉早く、門内の細徑は、雪の埋めるに任かして、まだ掻き除けもしてなかつた。

【餘論】この詩は、簡勁の趣があつて、程よく、まとまつて居るのみならず、詩思清澄、一語一人の肺腑を淨くせしめる。就中、松梢一片の二句は、雋句であつて、空山積雪の實況は、まさしく、ここに盡きて居る。

燕覆巢

燕、巢を覆す

雙燕生五雛

雙燕、五雛を生み、

怡怡向高屋

怡怡として高屋に向ふ。

雛飢母出風雨來

雛は飢ゑ、母は出でて、風雨來る、

新作深巢竟傾覆

新に深巢を作つて、竟に傾覆。

主人念雛不解飛

主人、雛が飛ぶを解せざるを念ひ、

移之別壘待母歸

これを別壘に移して、母の歸るを待たしむ。

雛雖得壘燕勿喜

雛は壘を得たりと雖も、燕は喜ぶなし、

【字解】(一)不解飛 飛ぶことが出来ぬ。

(二)別壘 他の燕の巢。

相逢主人亦偶爾

相逢ふ、主人、亦た偶爾。

明年作巢當更好

明年、巢を作る、當に更に好かるべし、

須信安居最難保

須らく信すべし、安居最も保ちがたきを。

(三)偶爾 偶然、格別心を用ひぬこと。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】雌雄の燕が五羽の雛鳥を生み、怡怡として、さも嬉しげに、高い屋根の方を見て居た。兎角する内、雛鳥が飢ゑて、頻りに啼き叫ぶに因り、親鳥は、餌を探して來る爲に、飛び出した處が、風雨颯然として、遽に襲ひ來り、折角、新に構へた巢は、ひっくりかへつて仕舞つた。主人は、これを見て、雛鳥のまだ飛ぶことの出來ぬのを氣の毒と思ひ、そっくり、これを別の巢に入れて、親鳥の歸るを待たしめた。そこで、雛鳥は、巢を得て、幸に無事であつたが、親鳥は、歸つて來ても、格別喜びもしない。何となれば、主人は、ほんの氣まぐれに、一寸そんな事をして見たので、もとより、仁慈の本性から出たことではないからである。されば、明年、又巢を造るならば、もつと、丈夫に、しつかりとする方が善いので、平安なる居處も、永久に保ち難いといふことを始めて信じたであらう。

【餘論】多少の諷諭はあるらしいが、何分にも、淺薄卑近を免れぬ。

五禽言、和張水部

泥滑滑、啼空山。

行人愁、道路難。

高天浮雲自多雨。

人不知、還空怨汝。

【字解】「泥滑滑」鳥の名、本草に「山南子、即ち竹雞なり。蜀人、呼んで雞頭鷓となし、南人、呼んで泥滑滑となす、その聲に因るなり」とあり、梅聖俞の竹雞の詩に、泥滑滑

【題義】五禽言は、五種の鳥の聲に就いて構想したので、この體は、梅聖俞に始まり、東坡が之に倣ひ、その後、時たま作る人があるので、青邱も矢張試みに遣つて見たのであらう。東坡の五禽言の序に「梅聖俞、四禽言を作る。余、定惠院に寓居す、舍を繞つて皆茂林修竹、春夏の候、鳥鳴くこと百族、土人多く其聲の似たるものを以て之に名づく。遂に聖俞の體を用ひて五禽言を作る」とある。大抵、その鳥は、本名の外、その鳴聲に因つて、異名を設けてあるので、例せば、竹雞を泥滑滑といひ、布穀を脱却破袴といふの類である。但し、その鳥は、大抵和名が判然せず、どういふ性質の者か、よく分からぬから、唯だ其異名の様な聲をするものとして解釋する外はない。張水部の水部は官名、唐六典に「晉宋齊梁陳より、宗廟を營むには、權りに水部尙書を置き、事畢れば之を省く。隋の開皇二年、はじめて工部尙書を置く」とある。すると、水部は工部の古稱として用ひて居るものらしい。なほ、

一本に張子宜に作るといへば、水部は、字を子宜、名を適といひ、青邱と同邑の人である。この詩は、張水部の作を見たるに因り、これに和して作つたのである。

【詩意】泥滑滑といふ鳥が空山の中に啼くと、旅人は、折から、道路の歩き悪いのを苦にして居る。山上天高く、たださへ雨勝であるのに、泥滑滑といつて、雨を喜ぶ様に聞こえる處から、人は、いつ目的地に歸著するとも分からないので、縁起でもないといつて、ひたすら汝を怨んで居る。

【字解】「提壺」鳥の名、歐陽修の詩に、猶有三花上提壺、動我。有酒花前傾とある。【二】杏花村杜牧の詩に、借問酒家何處有、牧童遙指杏花村とある。

提壺盧、趣沽酒。杏花村中媪家有。君如不飲過却春。此鳥枝頭應笑人。

【詩意】提壺盧、即ち酒壺を提げよといつて鳴く鳥は、さながら、酒を買へといつて、催促する様であつて、又幸にも、杏花咲き匂ふ此村には、酒を賣る老媪の家がある。君、もし酒を飲まずして、折角の春を空しく過ごし去らば、この鳥は、枝頭に在つて、人を笑ふであらう。

郭公、郭公。

郭公、郭公。

天寒水空。

天寒くして水空し。

朝飛暮棲兼葦中。

朝に飛び暮に棲む兼葦の中。

兼葦中啼不息。

兼葦の中、啼いて息まず。

千載魂應怨亡國。

千載、魂、應に亡國を怨むべし。

を惡とするを以てなり。公曰く、子の言の若くんば、乃ち賢君なり、何ぞ亡ぶるに至る。父老曰く、郭公、善を善として用ふる能はず、惡を惡として去る能はず、亡ぶる所以なり」とある。

【詩意】郭公、郭公と啼き叫びつつ、天寒くして水空潤なる秋の末、枯れかかった蘆の中から、朝に飛び出し、暮に又歸つて宿る。この鳥は、蘆の中に居て、終日啼き通してであるが、むかし、郭の地に君たりし其人の魂が、長しへに死せず、化して鳥となつて、千載の後、その國の亡びたことを怨んで居るのであらう。

婆餅焦

婆餅焦

婆去餉孫田隴遙

婆去り孫に餉せむとして田隴遙なり。

【字解】(一) 婆餅焦 鳥の名、釋史に「成婦あり、山頭より夫を望む、時に餅を棄て餉と爲し、その子

隴頭小麥穗已搖

隴頭の小麥、穗、すでに搖く。

但願好收食自饒

但だ願ふ、好く收めて食自ら饒なるを。

爾莫憂婆餅焦

爾、憂ふる莫れ、婆餅の焦ぐるを。

と呼ぶなり」とある。(二) 餉孫 餉は食を送る。(三) 田隴 隴は田間の小高き處。

【詩意】婆餅焦といふ鳥が啼いて居るが、老婆は、去つて其孫に食を送らむとし、遙に田隴を望みつつ、とぼとぼと歩んで居る。隴頭の小麥は、穗が出揃ひ、風に隨つて揺らめいて居るから、これを刈り取れば、汝の食物には不足なく、餅が焦げて、老婆が化して鳥に成つた處で、汝は最早食ふには困らない。

脱却破袴

脱却破袴

脱却破袴

脱却破袴

溪深無船須涉渡

溪は深く、船なく、須らく涉渡すべし。

亦思脱舊復換新

亦た思ふ、舊を脱して復た新に換へむ

春機已空愁殺人

春機、已に空しく人を愁殺す。一ことを。

長短句體 五禽言和張水部

【字解】(一) 郭公 爾雅に「鳴鳩、一名は布穀、又郭公と名づく、又鶡鳩と名づく」とある。(二) 兼葦 二字ともに蘆、又はよしの類。

(三) 亡國 左傳に「齊の桓公、郭に之き、父老に問うて曰く、郭、何の故に亡ぶ。曰く、その善を善とし惡

をして之を債せしむ。その焦げて食ふべからざるを恐る。母、久しうして至らず、子、往いて之を視れば、すでに化して鳥となり、但だ婆餅焦

【字解】(一) 脱却破袴 鳥の名、東坡の禽言の詩に「溪邊布穀兒、勸我脱却破袴」とあり、陳師道の詩に「脱却破袴、鳥語徒殷勤」とあつて、その自注に「人、布穀を以て雀類となす、その聲、脱了破袴といふ」とある。破袴の袴は下衣、即ちズボンの

如きものを云ふ。【二】涉波、徒渉する。【三】春機已空、春に成つて野良仕事に忙しいので、機を片付けて仕舞つた。

【詩意】脱却破袴、脱却破袴といつて鳥が啼いて居る。つまり、破れたズボンを脱いで仕舞へといふので、丁度、この處は、露の深いのに渡し船がないから、徒渉する外なく、いやでも、ズボンを脱がねばならぬ。とてもものに、舊いズボンを脱いで、新しいのに換へたいと思ふが、春に成つて、野良仕事に忙しく、機を片付けて仕舞つたから、新しいズボンを織ることが出来ず、矢張、もとの儘にして置くとしやう。

【餘論】首首、皆禽言に因んで趣向を設けたのであるが、さう面白くはなく、大家の集中、宜しく一あるべくして、二あるべからざるものである。

約王孝廉看梅 王孝廉に約して、梅を看る

君莫憶東閣吟。君、憶ふ莫れ東閣に吟するを、
我莫憶西湖見。我、憶ふ莫し西湖に見るを。
兩地年來信不通。兩地年來、信通せず、
塵埃正滿春風面。塵埃正に滿つ春風の面。

【字解】【一】東閣吟、初學記に「何遜、揚州法曹となる、麻舎に梅一株あり、遜、かつて、その下に吟詠す。後、洛に居りて之を思ひ、再び其任を請うて揚州に抵る。花、方に盛に開く。遜、樹に對し、彷彿終日、

不知山中三日雪 知らず、山中三日、雪、局を掩ふを、

掩局

修竹斜倚愁娉婷。修竹、斜に倚つて娉婷を愁ふ。
讀書屋空滿梁月。讀書屋空し滿梁の月、
夢斷冷落留餘馨。夢斷えて、冷落、餘馨を留む。
相尋定有迎船鶴。相尋ぬる、定めて船を迎ふるの鶴あらむ、
煙霧籠寒縞衣薄。煙霧寒を籠めて縞衣薄し。
一尊好共煖花魂。一尊好し共に花魂を煖めむ、
明日關山笛中落。明日關山笛中に落つ。

去る能はず」とあり、杜甫の詩に、東閣官梅動三詩興、還如何遜在揚州とある。【二】西湖見、林逋が西湖の孤山に隱居して梅を種ふたといふことがある。【三】兩地、揚州と西湖。【四】掩局、局はとぼそ。【五】娉婷、たなやなる貌、梅花を形容して云ふ。【六】滿梁月、杜甫が李白を夢みて作つた詩に、屋梁看落月、猶疑照顏色とある。【七】迎船鶴、林逋が鶴を飼つて置いて、これを放ち、客が来ると、飛び這つて知らせたといふことがある。【八】縞衣、縞は純白、梅花を形容して云

ふ。【九】笛中落、笛中に梅花落の曲あるより云ふ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、王孝廉の名字閱歴等は分からねぬ。

【詩意】君は、揚州の梅花を憶うて、東閣に吟するにも及ばぬし、われも亦た態態西湖まで出かけて、梅を見やうとも思はない。揚州と西湖と、兩地ともに隔絶し、年來音信通せず、春風吹き至れども、

浮世にさすらふ身は、塵埃面に満ちて、全く俗了されて居る。しかし、この頃、山中では三日も雪が降りつづいて、修竹がたわめて、斜に梅花に倚りかかり、そして、梅花のあでやかなるが、術なき風情をして居るのは、殊に趣がある。わが讀書の家は、外に人もなく、落月、屋梁に挂り、恍として、人の面影を見るが如く、やがて、夢が醒めると、名残の匂ひが残つて居る。君が此に御出になれば、定めて、鶴が飛んで往つて、その船を迎へるであらうし、煙霧、寒氣を籠むる中に、梅花は、縞衣の薄きを披いて居る様に見えるであらう。かくて、一尊を共にし、併せて、冷かなる花魂を煖めて、おもふ存分、留賞したいと思ふ。さうでもしないと、明日、名にしおふ梅花落の一曲を吹きすさぶ笛の音につれて、花片紛紛として關山に落ち、その時、いくら悔やんでも及ばぬことであらう。

【餘論】唯だ共に梅花を賞して痛飲したいといふことを、これだけに引き伸ばし、且つ千古の風情を傳へたのは、流石に手際であるが、文字に囚はれて、用筆、聊か窘束したる傾向がありはせぬかと危まれる。

題滕用衡所藏山水圖

滕用衡藏するところの山水の圖に題す

滕君興在煙霞間

滕君、興は煙霞の間に在り、

【字解】(一) 滕君、即ち用衡、

遠游十年今始還、遠游十年、今、はじめて還る。

畫圖示我有層嶂、畫圖、われに示す層嶂あり、

竟似何處之名山、竟に何の處の名山に似たる。

君言我初適東越、君は言ふ、われ初め東越に適く、

酒船橫渡鏡湖月、酒船、横に渡る鏡湖の月。

醉詠謫仙天姥吟、酔うて詠す謫仙の天姥吟、

海光欲曙清猿歎、海光、曙ならむと欲して、清猿歎む。

瑤草春已生、瑤草、春すでに生ず、

便入金華行、便ち金華に入つて行く。

道逢牧羊兒、道に逢ふ牧羊の兒、

疑是黃初平、疑ふらくは是れ黃初平。

從此西游楚江水、これより、西に遊ぶ、楚江の水、

大帆如雲挂空裏、大帆、雲の如く空裏に挂る。

長短句體 題滕用衡所藏山水圖

題義の項に於て詳述する。(一) 煙、山水といふに同じ、唐書田游巖傳に「游巖、箕山に隱る。高宗、嵩山に幸し、親ら其門に至る。游巖、野服出でて拜す。帝曰く、先生、このごろ住なりや否や。答へて曰く、臣は、謂はゆる泉石膏肓、煙霞痼疾なるものなり」とある。(二) 酒船、酒を載せた船、即ち遊山船。(三) 鏡湖、一統志に「紹興府城の西南靈湖、一名鏡湖、漢の太守馬臻鑿つ。詔して、賀知章に鑑湖一曲を賜ふとは、即ち此れ」とある。(四) 謫仙、天姥は山名。李白に夢游天姥吟の一篇がある。(五) 金華、山名、前に數ば見ゆ。(六) 黃初平、前に卷八、煮石山房の詩中にも見えたが、列仙傳に「黃初平は、丹溪の人なり、年十五、家を牧せしむ。道士の

柁樓醜酒喚長風。柁樓、酒を醜いで、長風に喚び、一日看山一千里。一日、山を見る一千里。

不聞東林鐘。聞かず東林の鐘、但見香爐峰。但だ見る香爐峰。

波迷洞庭闊。波迷うて洞庭闊く、樹隔瀟湘重。樹隔てて瀟湘重る。

白沙翠壁經過好。白沙翠壁、經過好し、就中幾度曾幽討。就中、幾度か、かつて幽討。

麻姑壇上掃落花。麻姑壇上、落花を掃ひ、堯女祠前薦芳藻。堯女祠前、芳藻を薦む。

晚客湖南逢雁回。晩に湖南に客として、雁の回るに逢ひ、登臨長上定王臺。登臨、長く上る定王臺。

天從朱鳥峰頭轉。天は朱鳥峰頭より轉じ、

り、その良譚を見、便ち率ゐて金華山石室の中に至り、四十餘年、復た家を思はず」とある。【六】楚江、揚子江を云ふ。【七】柁樓、船上に在る物見櫓、杜甫の詩に「柁樓底、喚飯越中行」とある。【八】東林、一統志に「東林寺は、廬山に在り、晉僧慧遠、同門の慧永と西林に居り、學徒日に衆く、別に林の東に居る。謝靈運、爲に池を鑿ち、蓮を種ふ、蓮社と號す」とある。【九】香爐峰、前に卷八、廬山宋隱君の詩中にも見えたが、廬山の北に在つて、奇峰突起、その狀、香爐の如きが故に名づけ、山下に瀑布があつて、世に著聞して居る。又白居易の文に「匡廬奇秀、天下の山に甲たり、山北の峰を香爐峰といふ、峰北の寺を遺愛寺といふ、その境勝絶、又廬山に甲

江自黃牛峽外來。

江は黃牛峽外より來る。

蒐奇歷險今應倦。奇を蒐め、險を歷て、今、應に倦むべし、默坐舊游空數遍。默坐、舊游、空しく數へ遍し。

時向明窓看此圖。時に明窓に向つて此圖を見る、好山一一皆重見。好山一一、皆重ねて見る。

我聞君言自嘆嗟。われ、君の言を聞いて、自ら嘆嗟、身如處女愁離家。身は處女の如く、家を離るるを愁ふ。

閉門讀書無半車。門を閉ちて書を読み、半車なく、髀肉漸生空鬢華。髀肉、漸く生じて、空しく鬢華。

牀前塵土蔽雙屐。牀前の塵土、雙屐を蔽ふ、何不著之踐苔石。何ぞ之を著けて苔石を踐まざる。

幸逢盛世道路平。幸に逢ふ、盛世、道路の平かなるに、五嶽尋眞皆可適。五嶽、眞を尋ねて、皆適くべし。

たり」とある。【三】洞庭、湖水の名。【四】瀟湘、二水の名、その合流して洞庭湖に入る附近一帯を瀟湘といふ。【五】麻姑壇、一統志に「麻姑山は、建昌府西南に在り、周廻四百里、即ち道書三十六洞天の一」とあり、李白の詩に「石鏡麻姑壇」とある。【六】堯女祠、黃陵廟、娥皇・女英を祀る、即ち堯の二女で舜の妻である、なほ其詳は、前に卷一、湘中鼓の詩中に見えて居る。【七】薦芳藻、即ち蘋藻を薦めると同じで、廟前に供へ物をする。【八】造雁回、一統志に「回雁峰は、衡州府城の南に在り、雁、衡陽に至つて過ぎず、春に遇つて回る、故に名づく」とある。【九】定王臺、長沙の定王は、漢の景帝の子で、その人の作つた臺、金樓注の本に楚王臺に作

便當往抱綠綺彈 便に當に往いて、綠綺を抱いて松風に

松風

彈じ、

行盡萬壑千巖中 行き盡す萬壑千巖の中、

仙書探得金匱空 仙書、金匱を探り得て空しかるべし。

歸來誇君重相逢 歸り來つて、君に誇り、重ねて相逢ふ、

握手一笑吳門東 手を握つて一笑吳門の東。

軒曲、數宿を經るも、猶ほ之を望み見るといふ。【三】 寬奇、寬は、春、狩獵を爲すこと。集まるといふ處に用ふ。【三】 無牛車、

車の片われしもない。【三】 饒肉漸生、劉備が劉表の處に居て、厨に上つて歎息した言葉。前に卷十、北郭秋夜の詩中に見えて居る。

【二】 雙展、二つの下駄。【三】 五嶽、前に數ば見ゆ。【三】 綠綺、前に數ば見ゆ、司馬相如の琴の名、李白の詩に蜀僧抱綠綺、

西下三峽月餘、爲我一揮手、如聽三萬壑松とある。【三】 金匱、前に數ば見ゆ、金屬製の櫃。

【題義】 滕用衡は、姑蘇志に「滕用亨、字は用衡、長洲の人、問學辨博、文詞爾雅、尤も六書の學に

精しく、その篆隸の妙、高く近世に出づ。永樂三年、召し見、面のあたり篆書を試みて曾に稱ひ、翰

林待詔を授けらる。かつて、上に侍して、畫卷を閱するや、衆、目して趙千里となす。用亨、頓首し

て言ふ、筆意、王晉卿に類すと。卷を終るに及びて、果して、駙馬都尉王侁の名あり」とあつて、餘

程、鑒識に長じて居る人と思はれる。この詩は、滕用衡の所藏に係る山水の圖に題したので、その圖

の筆者は分からねぬが、いづれ、相當な人であつたらう。

【詩意】 滕君は、興を山水の間に縱にし、十年間も、遠方に遊んで居て、今やつと歸國された。そして、子に畫を見せられたが、その中に畫き出された層嶂は、果して、何處の名山に似て居るか、いづれ、君が旅中目睹したところであらう。君が言ふには、われは、初に東越に往き、游山船に酒を載せて、月下に鏡湖を渡り、醉中、李白の作に係る天姥吟を朗誦すると、やがて、海の方が白みかかつて、猿が鳴き止んだ。春、すでに回つて、瑤草の萌え出づる頃、金華山に分け入つたが、道すがら、出逢つた牧羊の小童は、古しへの黄初平ではないかと思はれた。それより、一轉して、西、揚子江に遊び、大帆は雲の如く、空中に挂り、それで、江水を溯る間、身は舵樓に倚つて、酒を灑ぎつつ長風に向つて呼號し、山を眺めながら、一日の間に千里を馳せた。次に、廬山に入つたが、東林寺の鐘の聲だに聞かず、唯だ香爐峰だけは見逃さなかつた。波浪一白、望眼爲に迷はむばかりにして、洞庭は流石に瀾く、遠樹相隔つて、瀟湘の二水は、重なり合つて見える。白沙翠壁相連る處は、經過するも面白く、中には、幾たびか尋ねた勝地もあるので、麻姑仙壇の下に落花を掃ひ、黃陵廟前に蘋蘩を薦めたのが、即ちそれである。最後に、湖南に入つて、雁の北歸する春の頃、定王臺に登臨すると、天は、衡山の頂より轉するが如く、大江は、はるかに黃牛峽から流れ下つて居る。久しい旅の間に、奇勝を狩り集め、險阻な路を歴て、今は、もう厭きはてて仕舞ひ、默坐して、空しく舊游の跡を

數へて見るだけである。そこで、時たま、明るい窓の下で、この畫を繰り廣げると、面白さうな山は、いづれも、ここに再び御目にかかつたので、つまり曾游の地でないものはないと、かう云はれた。これは、君の話の聞くと、まことに、嘆息に堪へないことがあるので、この身は、箱入娘の如く、家を離れるのが、兎角いやである處から、門を閉ちて書を読み、出かけたくても、車の片わだになく、あんまり、氣樂にして居るものだから、股には贅肉を生じ、そして、鬢は白くなつて、いつしか、年が寄つて仕舞つた。しかし、牀前には、雙屐が塵土に蔽はれた儘、ちやんと残つて居るので、何故、これを足に穿いて、苔石を踏まないのか。今しも、目出たき太平の御世であつて、道路平かにして、五嶽に仙人を尋ねることも、造作なく、決して、往かれぬ處とてはない。されば、綠綺琴を抱いて出かけ、松風颯颯の下に之を弾じ、萬壑千山を行き盡し、洞中に藏してある金匱を残りなく探して、仙書を手に入れたいと思ふ。かくて、恙もなくて歸つて來たならば、重ねて、君に逢うて自慢をなし、笑ひながら、吳門の東に於て握手をしたいものである。

【餘論】起四句は總提、君言我初適三東越一より好山一一皆重見に至るまでは、滕君の口を借りて、その游蹤を歴舉し、畫中の山は、何處とも分からぬが、皆重ねて見るものであると云はしめた處には、無限の含蓄がある。以下、自分の附甲斐なきことより始め、とてもものに、一と奮發して、洞府に仙書を探りし後、又御目にかからうと云つた處は、流石に丈夫蓬桑の本志に負かず、さしもの滕君も、稍

や煙に巻かれた様な工合、章法より見れば、まさしく、一步を拓開したものである。

余未有嗣雪海道人以張仙畫像見贈蓋蘇老泉嘗禱而得二子者予感其意因賦詩以謝

余、未だ嗣あらず、雪海道人、張仙の畫像を以て贈らる、蓋し、蘇老泉、嘗て禱つて二子を得たるもの、予、其意に感じ、因つて詩を賦して以て謝す

我年已及壯、
吉夢未兆熊、
雖有三女兒、
豈足慰乃公、
每聞鄰家子、
夜雨誦經史、
起坐秋燈前、

われ、年すでに、壯に及び、
吉夢、未だ熊を兆せず、
三女兒ありと雖も、
豈に乃公を慰むるに足らむや、
毎に聞く、鄰家の子、
夜雨、經史を誦するを、
起つて坐す秋燈の前、

長短句體 雪海道人以張仙畫像見贈

【字解】【一】已及壯、年、三十に及びしこと。【二】未兆熊、詩經に熊羆維綱、男子之祥とある。【三】乃公、自ら稱す。史記高祖本紀に、幾んど乃公の事を敗る」とある。【四】每聞鄰家子、即ち張仙、十國春秋、後蜀慧妃徐氏傳に「氏は青城の人、幼にして才色あり、後主、これを嬖し、花蕊夫人と號す、國亡びて宋に入る、心、未だ蜀を亡びたりとせず、毎に

願影長嗟不能止。影を顧みて、長嗟、止む能はず。

道人念我書無傳。道人、わが書、傳なきを念ひ、

畫圖卷贈成都仙。畫圖、巻いて贈る成都の仙。

云昔蘇夫子。云ふ、むかし、蘇夫子、

建之玉局禱甚虔。これを玉局に建て、禱る甚だ虔むと。

乃生五色兩鳳鶴。乃ち五色の兩鳳鶴を生じ、

和鳴上下遂與夫。和鳴上下して、遂に夫子と相聯翩たり。

子相聯翩。

勸我勤禮之。われに勸めて、勤めて之を禮す、

當有明珠出深淵。當に明珠の深淵に出づるあるべし。

我感道人意。われ道人の意に感じ、

捧觴拜其前。觴を捧げて、その前に拜す。

君不見東家翁。君見すや、東家の翁、

後主の像を懸けて、以て祀り、護つて子に宜しきの神と言ふ」とあつて、その注に「張仙挾彈圖は、即ち後主なり、童子は太子玄結たり、武士は趙延慶たり」とある。花蕊夫人が張仙圖と稱して居たのは、後主が彈を挾んで居たのであるが、本物の張仙圖は、もとより有つたのである。【三】蘇夫子。蘇老泉を云ふ。【四】玉局洞の名、茅亭客話に「蜀の玉局洞中、五色の雲を出す、觀るもの千餘人、時を移して散す」とある。【五】鳳鶴。鶴は福徳の時、矢張り鳳凰。【六】明珠出深淵。北齊書陸印傳に「印、少にして、善く文を屬し、甚だ河間郡部に賞せらる。郡、又印の父子影と交游す。かつて、子影に謂つて曰く、吾以ふ、卿、老則、遂に明珠を出す」とある。【七】捧觴。御神酒を供へ

力耕積多田。力耕して多田を積む。

平生辛苦立門戶。平生辛苦、門戸を立て、

兩兒棄擲如浮煙。兩兒、棄擲して浮煙の如し。

惡兒亦何須。惡兒、亦た何をか須ひむ、

願得一子賢。願はくは、一子の賢を得む。

上以承吾宗。上は以て吾が宗を承け、

下以與吾玄。下は以て吾が玄を與へむ。

仙乎有驗看明年。仙か、驗あり、明年を看よ、

請君更賦懸弧篇。請ふ、君、更に賦せよ懸弧の篇。

る。【一】與吾玄。前に卷一、神仙

曲の詩中に引いて置いたが、揚子法

言に「苗にして秀でざるは、吾が家

の童鳥か、九齡にして我が玄文を興

ふ」とある。揚雄の子の早熟なりし

こと。ここでは、唯だおのが著作を

傳へることだけを取つたのである。

【二】懸弧篇。禮記内則に「子生ま

る、男子は氣を門左に設け、女子は

帨を門右に設く。國君世子生まるれ

ば、射人、桑弧蓬矢を以て、六たび

天地四方を射る」とある。

【題義】この題は——予、未だ後嗣の男子あらず、ここに、雪海道人といふ道士が、張仙の畫像を以て態態贈られた。蓋し、蘇老泉も嘗て此像に構つて、賦・轍の二子を得たといふこと。そこで、その厚意を感謝し、詩を賦して謝を爲したといふのである。

【詩意】われ、年、すでに三十に成つたが、不幸にして、男子の祥と稱する熊羆の夢を見たこともな

く、三人の娘はあるが、とても、乃公を慰めるに足らない。そこで、鄰家の小伴が雨ふる夜など、經史を誦讀するを聞くと、羨ましく堪えられず、起つて秋燈の前に坐し、おのが影を顧み、長嘆して止むことが出来ない。ここに、雪海道人は、わが著述を後世に傳へる様な嗣子なきことを氣にかけ、蜀の成都の張仙の畫像を巻いて贈られた。聞けば、むかし、蘇老泉先生は、この畫像を玉局洞中に祀りこみ、非常に謹んで禱り、その爲に、羽毛五色の雙鳳凰に比すべき様な東坡穎濱といふ立派な息子が二人も生まれ、互に上になつたり下になつたりして和鳴し、遂に老泉と共に、聯翩として並び翻つたとのことで、われに勸めて、怠らず之を拜禮すると、屹度、明珠が深淵より出づるが如く、男子が生まれるに相違ないといつた。予は道人の厚意に感じ、御神酒を供へて、像前に拜禮をした。東家の主翁は、セッセと耕作をして、田地を澤山殖やし、平生辛苦して門戸を立て、大分盛になつた處が、兩兒は、そんな事に頓著せず、その家業を抛擲すること、浮煙の如く、その家は、とうとうつぶれて仕舞つた。して見れば、悪い子供では仕方がないので、ただ一人で善いから、伶俐なものが欲しい。さういふ賢子があれば、上は以て吾が宗の祀を承けしむべく、下は以て太玄經に比すべき我が著述を傳へることが出来る。張仙にして靈驗あらば、どうか、來年、子を授け玉へ。その時は、更に道人に乞うて、弧を門左に懸ける其祝の詩を作つて貰ひたいものである。

【餘論】起首より願影長嗟不能止に至るまでは、青邱自身、繼嗣なくして、寂寥に堪へざる趣を

述べ、道人念我書無傳より當有明珠出深淵に至るまでは、張仙の像を贈るに就いて、道人の懇に勸めた言葉を其儘寫し、委曲丁寧。以下は、自己の感慨で、是非、明年子が生まれて欲しいといふ意を返露したのである。この詩は、決して名作ではないが、これに因つて、青邱の身生が略ぼ窺はれる。それから、程遠からず、青邱は一男を擧げて、大に喜んだが、不幸にも病して仕舞ひ、やがて、青邱の死後、唯だ二女を餘せしのみなることは、卷首の略傳中に記した通りである。

釣臺歌送嚴陵徐尊生太史

釣臺の歌、嚴陵の徐尊生太史を送る

羊裘翁遺釣臺

羊裘の翁、釣臺を遺す。

蒼翠兩相向

蒼翠兩つながら相向ひ、

勢壓千崔嵬

勢は壓す千崔嵬

巉巖峭壁聳雲表

巉巖峭壁、雲表に聳え、

泱泱桐江流遠其

泱泱たる桐江、流れて其下を遠つて、

下徒喧喧

徒に喧喧

【字解】「千崔嵬」無數の峰

【二】泱泱 水の漲る貌。

【三】桐江 一統志に「天目より出づ」とある。

【四】喧喧 騒がしいこと、李白の詩「飛泉瀑流爭喧喧」とある。

清風在翁振千古。清風、翁に在つて、千古に振ひ、

唾視軒冕浮輕埃。軒冕を唾視して、輕埃よりも浮なり。

心懷高潔猶可觀。心懷高潔、猶ほ觀るべし、

時吐片月峰頭來。時に片月を吐いて峰頭に來る。

先生當代詞林。先生は當代の詞林、

載筆有良史才。筆を載せて良史の才あり。

不展調元手居鼎。調元の手を展べて鼎台に居らず、

却思釣臺亟歸去。却つて、釣臺を思つて亟かに歸り去る。

胸襟灑落何如哉。胸襟灑落、何如ぞや、

胸中之樂何如哉。胸中の樂、何如ぞや。

【題義】釣臺は、一統志に「桐廬の富春山に在り、一名嚴陵山、清麗奇絕、錦峰繡嶺と號す。前は大江に臨む、即ち嚴子陵の釣せし處、左右二臺、各高さ數百丈」とある。嚴陵は、嚴子陵の姓名を約め

【五】軒冕、車と禮冠、大官の仕度。

【六】調元手、宇宙の元氣、即ち陰陽を調和する手、宰相たるべき器量。

【七】鼎台、三公の位。

たので、今では富春一帯の地名となつて居る。後漢書隱逸傳に「嚴光、字は子陵、小字は狂奴、餘姚の人、少にして光武と同學。帝の即位するに及び、物色して之を訪はしむ。齊國上言す、男子あり、羊裘を披いて澤中に釣ると。帝、光たるを知るや、安車玄纁を備へ、三聘、乃ち至る、諫議大夫に除せしが屈せず」とある。徐尊生は、列朝詩集に「字は大年、淳安の人、洪武三年、召して元史を修す。史成るや、翰林應奉文學を授かる。自ら引いて去るを求めしが、省臣、留めて、庚申君史を修せしめ、又禮樂書を編集し、書成るや、乃ち始めて歸るを得たり」とあつて、青邱と略ぼ同じ經歷で、稍や後まで残り、やつと歸里した人である。この詩は、嚴陵の徐尊生が官を罷めて歸里するに就いて、その行を送る爲め、特に其故里なる釣臺に託して、歌を作つたのである。

【詩意】羊裘の老人嚴子陵は、ここに釣臺を遺した。その釣臺のある處は、錦峰繡嶺といふ兩山で、蒼翠こんもりとして相對し、その勢は、無數の峰巒をも壓して踏まへむばかり。巖巖峭壁は、雲表に聳え、決決たる桐江は、その山の下を繞つて流れ、水の音は、極めて騒がしい。嚴子陵の清風は、千古に振ひ、軒冕などは、唾も同様にみて、輕い塵埃よりも浮浮したものと考へて居た。その心懷の高潔なることは、今でも峰頭にさし上る片月を見て、略ぼそれかと想像される。ここに、徐太史は、當代詞林の一家家、筆を載せれば、天晴、良史の才のある御人であるが、調元の手を展ばして、三公の位に居ることを願はず、却つて故國の釣臺を思つて、速かに歸り去られるとのことで、胸襟の灑落な

309
65

るは、如何ばかりか、胸中の樂は、如何ばかりか、まことに、他に其類なきものである。
【餘論】起首より時吐三片月峰頭來に至るまでは前半で、純ら釣臺及び嚴子陵を寫し、後半は、徐太史竝に其歸郷を云ひ、兩者が自然交錯して居る處が、極めて面白く、従つて、結構頗る緊健である。

終